



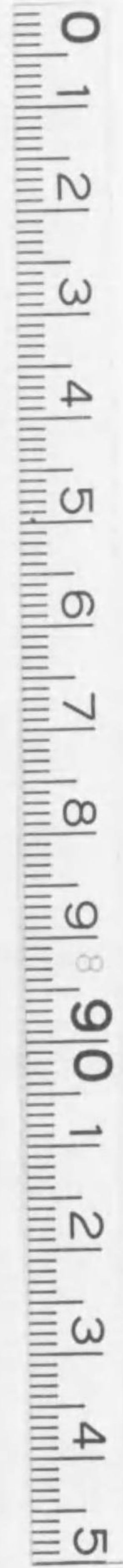
386-268



1200501457049

386

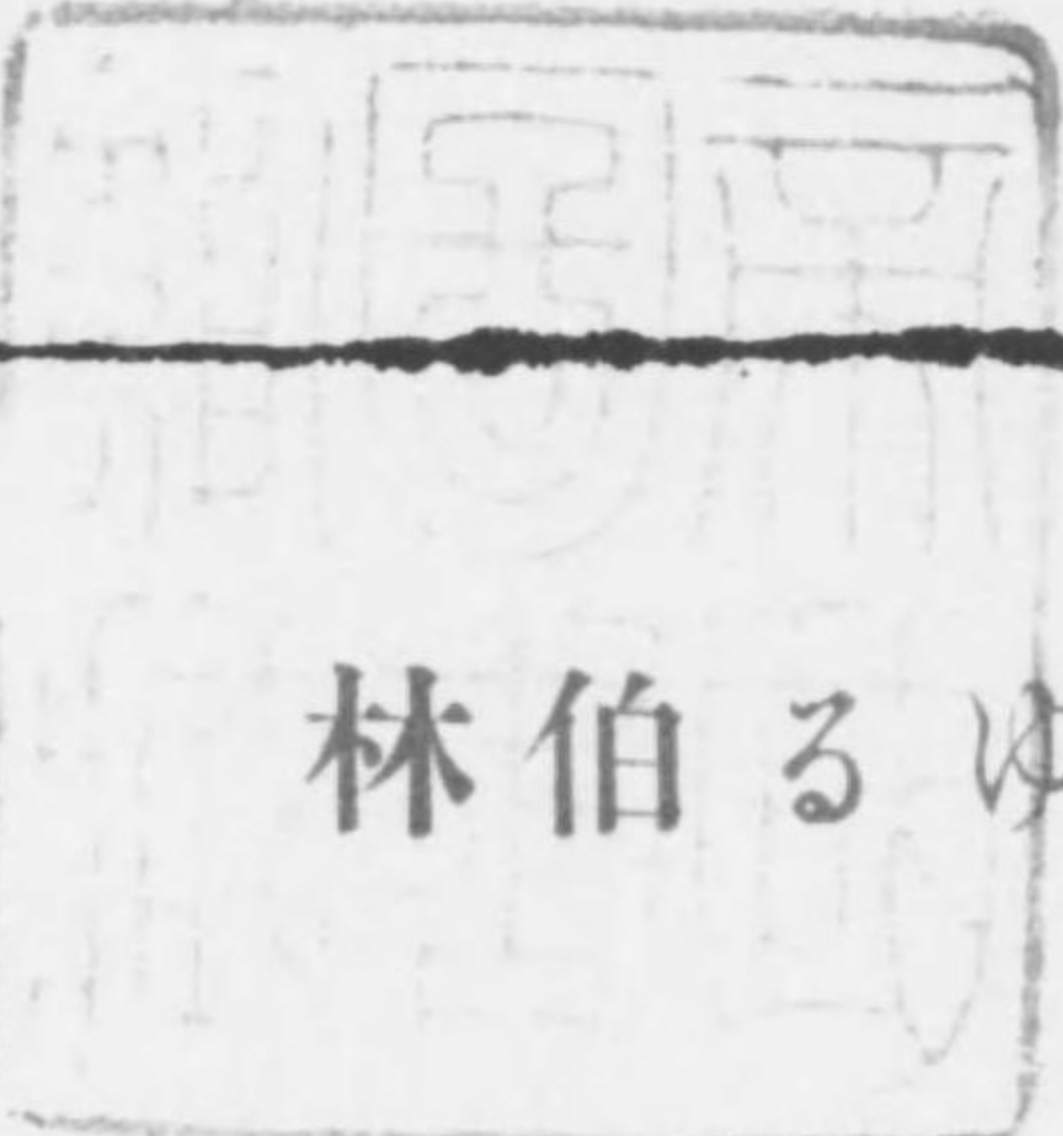
268



始







386-
268

燃ゆる伯林

守田有秋著



平凡社

m.ta.



(上) 審問を受けしヒンデンブルグ元帥誕生記念肖像



(下) ウカツキイの肖像
(獨逸名畫家、マックス・ロイベルマン筆)

装幀 立野道正



革命當日のライプツネヒトの演説振り

修正派の主將で非戦論者の
ベルンスタイン



エルンスト・トカラア懸賞捕縛のポスター



Berliner Straßenkämpfe März 1919.
Blindgänger 2 28-29

一九一九年三月の街上戦



Berliner Straßenkämpfe März 1919.
Warenhaus Platz.

アレキサンダア廣場の政府軍



ライド・ダウアー



ヒリツブ・シヤイテン



ハムレットに扮せし
アレキサンダア・モイシイ



フウゴア・ハアセ

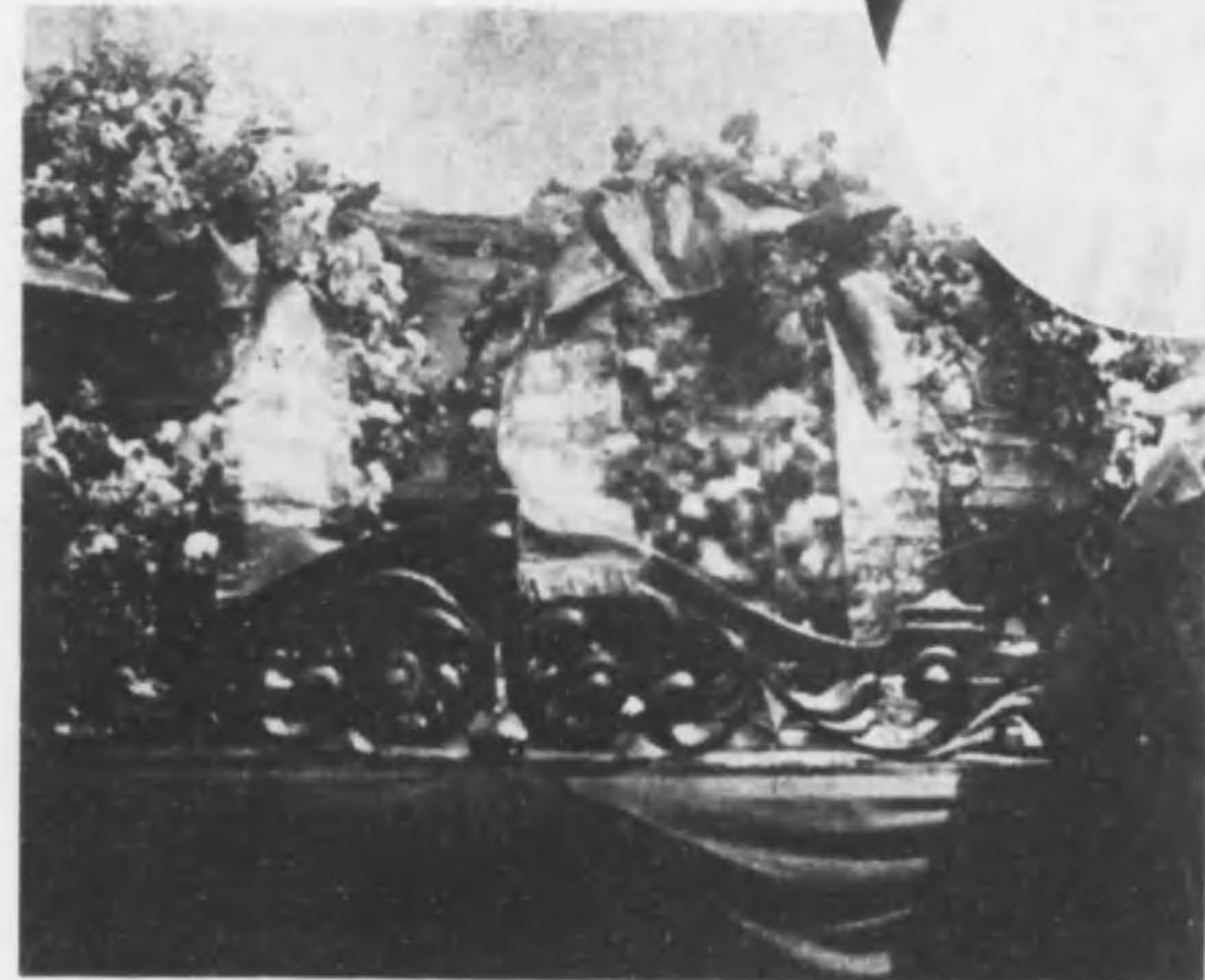


革命の犠牲者の葬儀行列



革命の犠牲者を葬ふ弔銃射撃

ローザ・ルクセンブルグ女史



ローザ・ルクセンブルグ女史の棺、花環は労働者ロシヤ
及労働ハンガリー政府より贈られたるもの（著者撮影）

Einlaß-Karte für den Friedhof
 IN FRIEDRICHSFELDE ZUR
 BEERDIGUNG DER GENOSSIN
 DR ROSA LUXEMBURG AM
 FREITAG DEN 13 JUNI 1919
 Die Zentrale der Kommun. Partei Deutschlands

ローザ・ルクセンブルグ女史葬儀入場券



ゲユネア湖畔に於て暗殺されたる
奥國皇后エリザベストの紀念像



Die Mitglieder
der Unabhängigen Sozialdemokratischen Partei Deutschlands.

獨逸革命當時の獨立社會黨の幹部



革命の都ブダペストの鎖橋



Nationalversammlung in Weimar.
Fraktionssitzung der Mehrheitssozialisten.

革命後開かれたるロイマアルの國民議會

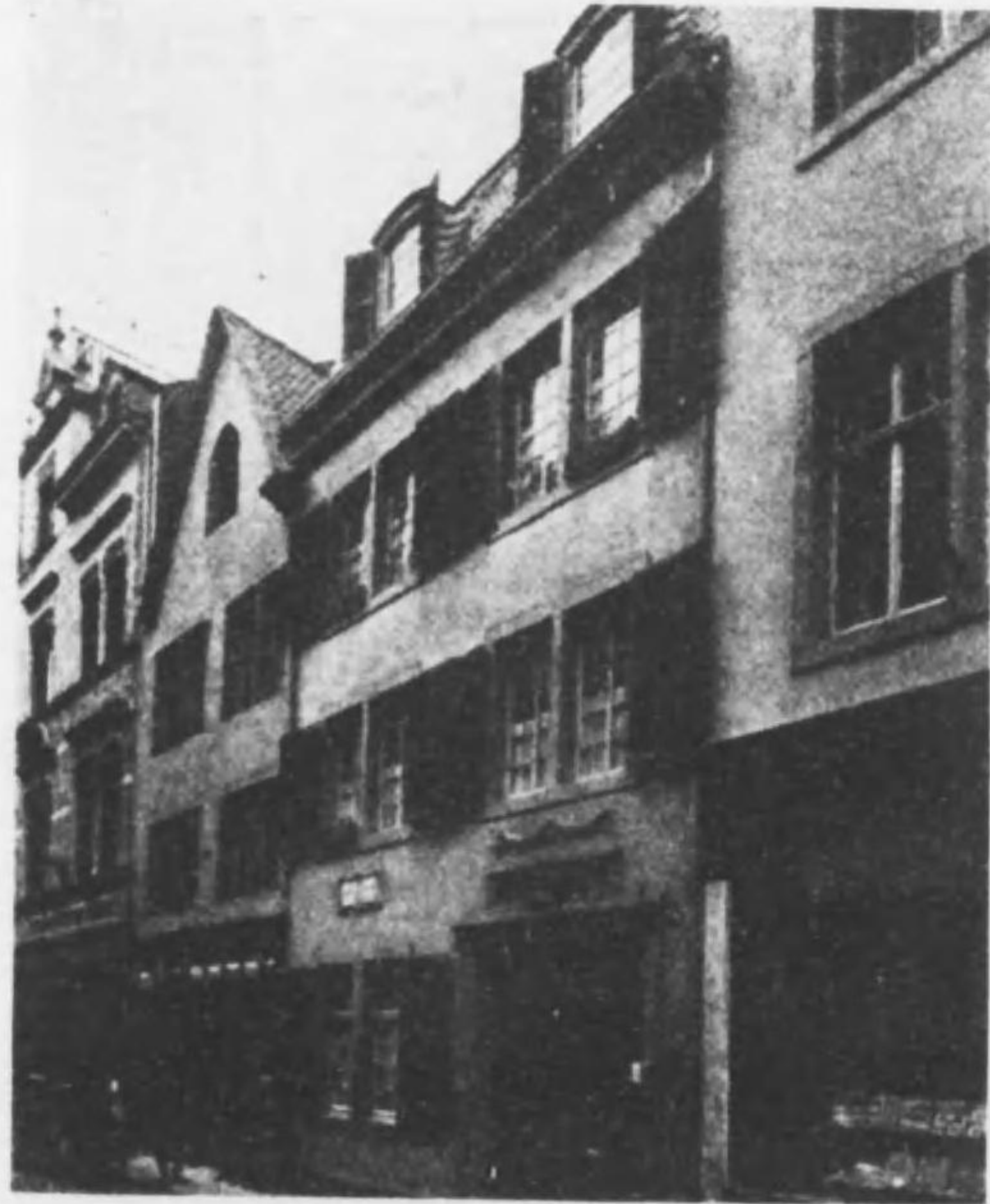
386-268

序

著者が滞歐の六ヶ年間、ヨーロッパは戦争と革命の血と火に蓋はれてゐた。
本書は、著者自ら體驗せし一個のヒューマンドキュメントである。
卷を便宜上未來、現在、過去の三篇に分つて置いたが必ずしも聯絡があるといふ譯ではない。
『燃ゆる伯林』と題したるは、卷頭の文から取つたものである。

一九三〇年四月

著者



ベートーフェン誕生の家（中央）



ベートーフェン遺品の楽器

心の記録

前後六ヶ年の滞歐中の思ひ出は、アルベンとラインとドナウの三つに盡きる。

アルベンに私は登る多くの機会をもたなかつた。けれども、アルベンの峰の雪を朝夕に眺めて私は三年半を瑞西に過した。ある時はフランスの境に聳ゆるダン・ヂ・ミチを、ある時はマチオレの湖底に峰の雪を醸すテシン・アルプスを、眺め暮して私は旅愁を慰めた。

ライン河の畔には一年三ヶ月を過した。獨逸とエルサスを境する其の河の上流バアゼルの宿の窓に、駒鳥の聲の雨とふりそゞぐ頃から、翌年の櫻子の實る頃まで、私はしみぐと放浪者の寂しさを心に泣きつゝ暮した。

初めて倫敦に上陸した時、郵船の支店から一封の手紙が諏訪丸の甲板に

立つ私の手にとゞけられた。それは巴里から五十哩許り離れた片田舎に居る石川三四郎君の手紙であつた。「君は倫敦に止るべし。今私の居る村より五十哩と離れない地點に獨軍は攻め寄せて居る。私の村は戰時地帯なり、私の如き長年此の地に住ふ者でさへも殆ど捕虜同様に行動の監視を受けて居る。されば新たなる外人、たとへば君の如き人が此の地に入ることは軍司令官の絶對に禁止する所である。君は英國に止れ、英人は佛人よりも遙かに親切である。長き航海に疲れた君に取りては、ロンドンこそ暫しの間君に安慰と休息を惠む地であらう。」彼れはさう書いて來た。

七十日の長き航海の後に得た此の手紙は、私を幻滅の底に突き落した。私の周圍から大きなテムスの河口と、廣大な倫敦の市が跡方もなく沈んで行つた。上陸を急いで居る諏訪丸の船客、下甲板に群衆して居る無数の荷上人足、それらの影が忽ち消えて、私の存在が唯一つの世にすてられた小石の様に残された。

名狀し難い心細さと寂しさの中に私は二十磅の金を懐にして上陸した。

若しあの時に私と同じ紹介狀をバアゼルの知友T君宛に有つて居る一人の青年を見出さなかつたならば、私は倫敦に止つたであらう、そして私はアルプスの雪をも、ラインの流れをも、ドナウの碧をも見ないで、二年間の後に神戸に向ふ郵船の甲板に立つたであらう。

然し偶然に私をしてドウバアを越えさせた。

巴里には石川三四郎君が私を待つて居て呉れた。私はそれを知るつてがなかつた、私は彼が田舎の別荘から自由な一步の行歩をさへも許されて居るとは想はなかつた。私はボンタリエの佛瑞國境から、ニューシヤツテルに向ひ、其處から乗り換へて更にバアゼル市に向つた。

それ以後、私は一年六ヶ月を獨逸に境を接した古都バアゼルに、一年六ヶ月をフランスに近いジュネヴ湖畔に、七ヶ月を伊太利に面して居るティンに過した。そして、休戰條約の締結された一九一九年二月の初め、私はバアゼルの雪道を越えて獨逸のレオポルド・ヘーエに入り、初めて戦後の獨

逸に足跡を印したのである。

伯林に一ヶ年餘を過した私は、前後二回ドナウの岸に立つた。一度はキーンの市に、一度はブタベストに、その二つの市はいづれもドナウの岸に臨んで居た。

一九二〇年の春、ルーア河岸の町々に赤旗の輝いて居る頃、私は其處を抜けてライン河の下流キヨルンの市に入つた。其の河を下つてボン、マインツ、コブレンツなどの町々に、暮ゆく春を訪ひ、嘗つてバアゼルに在つた頃のラインの上流を偲んだこともある。

前後六ヶ年、人生五十年とすれば其の十分の一以上を私はこれらの土地で過した。殊に其の中の三ヶ年半を過した瑞西は、私の一生の思ひ出に消し難い印象を烙き付けた。

六ヶ年の間に戦争から平和へ、平和から革命へ、中歐の國々は恐ろしい經驗を嘗めた。それらの國々の人々が、心より滲み出す涙を、私は、私の

頬に見たこともある、それ等の人々が心臓の一つ一つに感じた所を、私も亦同じやう私の心臓の壁上に感じたこともある。

私は伊太利の國境の寺々で打ち鳴す平和祝賀の鐘の音と、伯林の寺々が屈辱條約の涙に濕ほはした鐘の音を、聞き分け得る耳を持つた。私は上エルサスから、私の旅の宿に、曉の夢を破つた砲聲と、伯林市街に、白晝行人を驚かした共産黨員の砲聲を聞き分ける耳をもつた。

私は六ヶ年の間、中歐の人々が經驗した無數の興奮と、感激を、舌の上で味はふやうにして味つて見た。戦捷の凱歌に代る亡國の歌と、亡國の哀歌の中に變る「インタアナシヨナアレ」の音律の底に流るゝ一つ一つの思想に對しても、同情と共鳴を有つて來た。

瑞西、獨逸、奧多利、そして匈牙利に亘る私の記録は、自然を叙する記録のみではなく、時代の姿を反映した心の記録であらなければならぬ。けれども、さうした仕事は、恐らく、ロマン・ロオランの如き人にして、初めて企て得る仕事で、私にとつては至難の業であらう。けれども、私はそ

れを試みて見やう、然り、何人にも「試み」は許されなければならぬ。

此の巻頭語は數年前に執筆したものであるが、當時の儘茲に收めることにした。

一九三〇年四月

東京市外大井町にて

著者

燃ゆる伯林 目次

第一編 未來を語る 一

燃ゆる伯林 三

スエズ運河の封鎖 三二

伯林の平和條約 三四

明日の世界 三七

一、アルプスの理想郷 三七

二、朝の一刻 四三

三、新世界の温床 四五

四、東洋人の一團 五一

第二編 過古より未來への一線 五二

伯 林 篇……………五

血闘の伯林……………五七

一、二つの思想……………五七

二、必死の努力……………五九

三、戦争と左右兩派の態度……………六一

四、ハアゼと小數黨……………六三

五、分 裂……………六三

六、獨立社會黨……………六五

七、革 命 へ……………六七

八、兩派血で血を洗ふ……………七一

ライプクネヒトとルキゼンブルグ……………七三

アレキサンダア廣場……………七五

クララ・チエトキン……………七八

獅子の鬣をもつた人……………一〇六

フウゴオ・ハアゼの死……………一〇四

赤色俳優モイシイ……………一〇九

ヒンデンブルグ元帥審問……………一三三

南 獨 逸 篇……………一六〇

ミュンヘン革命の犠牲……………一六〇

エルンスト・トオラア……………一七九

匈 牙 利 篇……………一八二

匈牙利の勞農革命……………一八二

匈牙利の白色テロル……………一九五

革命と新聞紙……………二〇四

マサリック博士小傳……………二二

第三編 過去を語る……………二五

シエーン・ブルン王宮……………二七

フリードリッヒ大王とカアライル……………三三

ドイツ農民一揆……………三九

修正派の主將ベルンスタイン……………四五

最近のベルンスタイン……………五二

第四編 自然及び人……………五九

ベエートフエン誕生の家（彼とワグネル）……………七一

雨のワン湖（クライストの墓）……………七八

外交秘密暗號紛失事件……………八二

第一編 未來を語る

燃ゆる伯林

それは眞夏の夜であつた。微明は拾時過ぎまで続いた。消えさうで、そしていつまでも消え残つた光は、ウキルヘルム街の高い官署の窓硝子を燻し銀に見せて居た。大統領エツクハルトの官邸の鐵門は固く閉ざされて、普魯西藍色の制服を着けた兵士の姿ばかりが寂しげに見られた。けれども、其の建物に續く外務省の門前と、大宰相リヒトホフエンの官邸前には、數臺の自動車がかながら砲列そのまゝに並んで居た。——何かありさうだ！いや、何かあるに違ひないと伯林の市民は思つて居た。其處からいくらかも離れて居ないチイア・ガルテンに沿うて、ブランデンブルグの凱旋門を抜けるといつも其處に華やかな街の光が見られる。それは、ウインタア・デン・リンデンへの入口である。ところが其の夜は、佛蘭西大使館前に、群衆の一團が黒く響り騒いで居るので、リンデン街の華かさはそれに没はれて、何となく凄愴の氣があたりに漲つて居た。大使館前のホテル・アドロンも、其の夜に限

つて、奏樂を中止し、舞踏場に入入りする艶かな婦人達のモダンな姿も、その夜は終に見られさうもなかつた。多くの市民は群衆が何ゆゑ、佛蘭西大使館前に群つて居るかを知らなかつた。ホテル・アドロンがなぜ今日に限つて奏樂を中止して居るかを知らなかつた。——けれどもジュネヴの國際軍縮會議の席上で獨逸の全權委員フリードリツヒ・フォン・ホーヘンツォラン親王と、佛國の全權委員デルカツセ氏が火華を散らして論戦した末、相伴つて、ニイヨンの原へ出かけて行つた事實を知つて居るものには、群衆の昂奮して居る原因が想像されたらう。

何かしら新聞紙は重大な記事の振出を差し止められて居たらしい。伯林の市民は不安な心持で、辻、街々のラヂオ發聲機の前に立つて居た。放送局は其の日のニュースを報じた。けれども、それは群衆の満足を買ふに足らなかつた。唯だ一つ、變つたニュースがあつた。それは、和蘭や、丁抹や、瑞西や、英國や、佛國の海外新聞紙が、昨日の正午過ぎから、獨逸の總ての國境及び海港に於て、内務省檢閲課員の檢閲を受けて居ると云ふこと、そして、それ等の新聞紙の多くが入國を禁じられて居ると云ふことであつた。此の放送一つで市民の謎は益々深まり、不安の念は愈々密度を加へて行つた。市民は容易に街上を去らなかつた。其處にも一團、此處にも一團、彼等は何かしら不安な想像と憶測を逞しふして居た。

『新聞社へ行け！、新聞社へ行け！』群衆の一人が叫んだ。

『さうだ、新聞社へ行け！、新聞社に迫つてニュースを發表させろ！』

群衆はそれに雷同した、忽ち砂煙の中を黒い群衆の流れがウイルヘルム街を横に、ライブチツヒ街から、更に裏通りへ出て、フォルウエルツ社の前に進んだ。そして、社會民主黨の機關紙として、數十年の歴史を有つ新聞社の前で群衆は立ち止つた。

『ニュースを發表しろ！』

『秘密外交を排斥しろ！』

『市民の不安を一掃しろ！』

群衆は口々に叫んだ。其の時！ 群衆の喧騒の未だ止まない中に、新聞社前のラヂオ高聲機から、中央放送局の放送が聞えて來た。

『……伯林及び全獨逸の民衆諸君、唯だ今、國家の一大事に關して、吾々の大統領エツクハルト閣下が、諸君に對して、或る重大な告示をなさいます』

さう言つて、發聲者が變ると、大統領の聲が響いて來た。深い、落着いたベースの底力のある聲である。

『伯林及び全獨逸の諸君！ 吾が獨逸國は一昨日以來、意外なる國際的大事件に逢遭して居ります、それは、ジュネヴの國際軍縮會議に列席した吾が全權委員、フリードリツヒ・フォン・ホーヘンツ

オラアン氏と、佛國のデルカッセ氏が會議の席上に於て激論の末、其の日のうちに、ニイヨン附近の原野に於て決闘したことであります。決闘の武器として双方に選ばれたものは、拳銃の如き近世的な武器ではなく、最も舊式な長剣でありました、長剣であつたが故に立會人は、比較的安心して居りました、恐らく、二人は輕傷で引分けられるだらうと、人々は豫想して居りました。ところが意外にも親王の劍は、デルカッセ氏の心臓に觸れたのであります、そして親王は微傷だも負はなかつたのであります。此の個人的な事件は、佛國政府の赫怒する所となり、同國政府は、終に我が政府に對して昨日國交の斷絶を宣言し、同時に吾が駐劄外交官の退去を求めたのであります。けれども諸君、未だ宣戰が布告された譯ではありません。……諸君、獨逸國民の長い屈辱、長い陰忍は、今充分であります。此の上忍ぶことは不可能であります。獨逸國民の再び起つべき時は來ました、けれども諸君！吾々は三十年に亘る世界の貴き平和を尊重しなければなりません。吾々は世界の平和のため尙ほ忍ばねばなりません。子供達よ！吾輩を信じて下さい、吾輩に最後まで信任を與へて下さい。吾輩は斷じて諸君の信任と期待を裏切らないであります。大統領の告示は終つた、暴風雨のやうな拍手が起つた！暫くの間、ブラボオ！ブラボオ！の叫び聲は止まなかつた。

群衆は次第に數を増した。其の時、勞働者らしい中年の男が街上にテーブルを持ち出して、それに飛び上つた、そして群衆に對つて演説した。

「諸君！歐洲戰爭が終つて三十餘年が経過した。三十年は決して短い時日ではなかつた。それにも拘らず、同胞が受けた舊き戰爭の創夷は未だ癒えて居ない。此の上、吾々は戰爭を希望しない、戰爭は國民を亡ぼし、國家を破産せしめる。同志よ！同胞よ！吾々は全國を擧げて戰爭を拒否しなければならぬ！」

否！否！と、左様！左様！の聲が群衆の喧騒の中に相錯綜した。

一人の青年が起ち上つて、勞働者の演説に對抗した。

「吾等は戰爭を希望しない、けれども傳統的の仇敵が吾等に戦ひを宣し、吾等の存在を脅かす場合に於ては、吾等は進んで祖國を擁護せんがために、吾等は總てを棄て、戰場に臨まなければならぬ」拍手が怒濤の如く起つた。

「祖國と同胞を擁護するために！」

同じやうな言葉が、群衆の口々から繰り返された。

「斷じて戰爭を否定する、吾々勞働者には祖國はないのだ！」

さう云つた反對の聲も可なり多かつた。

「此の國賊め！」

「何！ブルジョアの餓鬼めら！」
 労働者と學生の間に、激しい反對の叫び聲が交換された、平素は口にされない罵詈が互に言ひ放たれた。

夜は次第に更けて行つた、けれども群衆は散じやうとしなかつた。彼等は唯だ一刻一刻と數を増す許りであつた、それ等の人々は、新聞社の前や、大きなホテルの前で、放送されるラヂオを待つて居た。突如として、再びラヂオの發聲機が街上に響き亘つた。群衆は思はず聲を飲んだ。
 『市民諸君！ 終に隣邦佛蘭西は平和の破壊者となりました、假令、これが爲めに、再び全世界が戰爭の猛火の中に投げ込まれるとも、それは斷じて吾々の責任ではありません。諸君！ 今や、佛蘭西の空中艦隊は、翼を並べて伯林の空に向つて進みつゝあります。吾が空軍は、半時間前にヨハニスタアルを出ました。恐らく、彼等は今、勇敢に戦ひつゝあるでせうが、暗夜が敵に便宜を與へました。敵は半時間後には、伯林の上空に現はれます。けれども市民諸君！ 勇氣を持つて下さい。一九一五、六年時代の堅忍不拔の精神を喚起して下さい、そして、獨逸國民らしき沈毅さをもつて行動して下さい。總ての燈火を消して、出來得るだけ迅速に避難して下さい！ 同時に、吾が勇敢なる空軍に、全幅の信任をかけて下さい！』
 それを聞いた時、群衆の誰れ一人、彼自身の耳を信するものがなかつた。群衆は互に顔を見合はせ

た。——それは果して事實であるか？ と言つたやうな質問的表情が、互の眼の中に閃いた。けれども、その表情も瞬間の中に消えた。彼等は、消防自動車の消滅ましいアラームを聞いたからである。一臺又一臺、其處にも此處にも、疾風の速さをもつて、街から街へ消えて行く消防自動車の慌だしい姿が見られた！

群衆の口々から明瞭な叫び聲は聞かれなかつた。唯だ大きな嘆息と吐息、さう云つたやうなものが聞えて來た。

忽ちフォルウエルツ社の高塔の燈が消えた。明々とした光の窓が、其處でも此處でも黒く塗られた。華かな街頭は、忽ちのうちに暗黒の領域となつた。

茫然自失して居た群衆は、其の時初めて我に歸つた。そして、それ／＼の道を急いだ。

街には消燈した自動車、諸方の廣場で立ち往生をして居た。ライプツヒ街、フリードリツヒ街の辻々に、武装した警官の一隊が交通を整理して居た。そこでも自動車の無限の長き一列が、空しく黒い姿を街上に横へて居た。交通機關として、公衆のために動いて居るものは、唯だ電車だけであつた。それも總ての燈火を消して居た。前照燈すら點することを禁じられて居た。

かうした光景を見た時に、群衆は、其處に一九一四年代に於ける彼等の兩親達の悲惨な惱ましい姿を見出したのである。

その時、新伯林の人々は何をして居たか。

新伯林！それは三十年前まではシャールツテンブルグと云はれて居た、けれども、今では誰れも一口に新伯林と言つて居る。若し舊伯林が政治の中心であるとすれば、新伯林は商業の中心地である。其處には世界の各地に通じて居る航空機の停留場がある。いつも朝夕二回、紐育から、倫敦から、巴里から、ウキンから、羅馬から、マドリッドから、チューリッヒから、ブルツセルからの商人が、其處の航空停留場へ降りた。又一日に一回、ワルサウから、モスカウから、コスタンテノオブルからバグダッドから、ボンベイから、北平から、上海から、横濱からの商人がやつて来た。其處には紐育と同じ位の高層建築が林立して居た。多くの死物は、それ／＼の屋上に飛行機の格納所と、發着所を有つて居た。つまり數十年前の文明社會に於て、自動車を受持つて居た役目を、今日では飛行機がやつて居る譯である。

地上の狭きを感じた新伯林人は、地下にも街を作つて居た。ハイネ街、ゲニテ街、アインスタイン街、ワグネル街と云つたやうな街が其處の重なる街である。さうかと思ふとラザアレ街だの、モエトキン街だのと云つたラディカルな名稱を有つた街もある。

ラザアレ街の小さなレストオラン、「赤鷄」には、世界の隅々から集つて居る貧乏な留學生や、勞働者や、亡命者などが出入して居る。其のレストオランの隅に、先刻から密々と話して居る二人の東洋人があつた。一人は、著しく日本人としての特徴を示した容貌の持主であり、今一人は、支那の青年かと思はれた、彼等は故國を亡命した天涯の孤客であるか、それとも貧しい留學生であるか、それは不明である。

「君、先刻のラデオを聞きましたか、大統領の悲壯な告示を。大變なことになりましたね、きつと獨佛の開戦になりますよ、さうなれば、延いて第二の世界戦争にならないとも限りません。」

日本人が言つた。

「然し、戦争がそんなに急に起るでせうか」と、支那の青年が問ひ返す。

「呑氣なことを言つては困りますよ、僕は今夜の中に他國が宣戦の布告をやると思つて居ます。」

「獨逸には、それに對抗するだけの準備があるでせうか。」

「獨逸は長い間、復讐戦の準備に掛つて居たし、そして機會をも待つて居たのです。佛蘭西の方でもそれを知つて、機先を制しようとして居るらしいのです。」

「若し、第二の世界戦争が勃發する場合がありますれば、一體日支の關係はどうなるのでせう？」

支那青年は不安らしく眉を曇らす。

『日本と支那とは同種同文の國民ですから、協力して亞細亞の平和のために盡さなければならぬ譯です。然し現實に打つ付かつて見なければ、どうなるか解りません、殊に、國民同志は握手したにしても、政府同志がどう態度を異にするか、それは吾々に想像がつかえません』

『困つたものですな、……兎に角、此處を出ませう』

『え、出ませう』

二人が卓を離れた時、不意にラヂオの高聲機が、佛蘭西航空隊の來襲を報じた。二人は思はず顔を見合はせた儘、暫く其處に立ち盡したが、やがて二人は肩を並べて、慌しく地上街の入口へと出て行つた。彼等は其處から自動車に乗らうと思つたらしい。けれども其の時自動車は總て前照燈を消して居た。絶え間もなく消防自動車のアラームが闇の中で呻つてゐる。地上街の群衆の流れは先を争つて地下街の方に奔つた。彼等は何故獨逸の空中防備軍が、佛蘭西の航空隊を無造作に國內に入れさせたかを考へて居る暇を有たなかつた。唯だ一團に、地下街へ、地下街へと殺到して行つた。

第一流のホテル、歌劇場、活動寫眞、レストラン、それ等は、總ての出入口を開いて群衆の去るに任せた。血走つた眼、狂人地味た恐怖、死を遁れようとする必死の努力！ さうしたものが群衆の心を壓して居た。街上には、たゞ名状し難い混亂が、暴威を揮ふに任せられてあつた。

其時！ 突如として、ポツツダムの方に當つて、半天が眞晝の如く照し出された。續いて遠雷のや

うな爆音が連續して聞かれた。それから五分も経たない間に、グリエネワルドの空で激しい航空砲が亂射されて居た。確かに獨逸の空軍が、探照燈の光を便に、敵の爆撃飛行機を射落さうとして居るらしい。それから、二分！ 三分！ 發動機の音が氣味悪く新伯林の空に響いて來た、それは十臺や、二十臺や、三十臺ではなかつた。無論、それには獨逸空軍の強大な發動機の音も、交響して居るには居たが――。

暗い大空には星が閃いて居た。若し佛蘭西機が、すべて遠距離操縦の無搭乗者飛行機でなかつたならば、たとひ照明弾を投じたにしても、六千メートル乃至一萬メートルの高空から、地上のものを見分けることは確かに困難であつた筈である、それに新伯林の兩端には二つの大森林があつた、その一つはグリエネワルドであり、他の一つはティア・ガルテンであつた。若し佛機が搭乗者を有つたならば彼等は、森林上を彷徨して確かに目標を捜すのに躊躇したに相違ない、殊にまた、彼等は沈着と勇敢を以て名聲を得て居る獨逸空軍の、フォゲエゼン式爆撃機に惱まされたに相違ない。

ところが佛蘭西機は地上の目標を捜す必要を有たなかつた。彼等は、遠距離から、豫め目標を定めて、雷氣操縦を受けて居たのである。それは、ストラスブルグの佛蘭西航空軍司令部からか、それとも、佛蘭西機を掩護して來たシヤルパンチエー航空船からか、それは、何れとも不明であつた。

彼等が伯林の上空まで飛んで來れば、それだけで、既に大成功の筈であつた。伯林の上空では、彼

等は容易に襲撃される氣遣ひがなかつた。其の理由も亦容易く推理し得られる。若し假りに獨逸空軍が、彼等を爆撃するとせば、數千貫の爆弾や、瓦斯彈や、燒夷彈を搭載した新ベツソン式佛蘭西機は自己の目的通りに落下して、伯林の街の上に炎の洪水を氾濫さす譯である。——如何にしてそれ等の危険物を、最も犠牲少く、そして、最も有効に除き得るか？ 獨逸空軍の苦心焦慮する所は、其の一點に在つた。けれども、其の苦心は終に酬られずして終つた。敵機は次第に近づいて來た。

凄じい發動機の音が轟々と大空に鳴り響いた時、新伯林の街の上には、犬の兒一つだも影を見せなかつた。總てが地下街と、地下鐵道の沿線に姿を隠して居た。

けれども、死を怖れない好奇心をもつた人々は、地下街に隠れることを好まないで、新伯林から舊伯林に續くチイア・ガルテンの森に入つて行つた。先刻の日本と支那の青年もそれ等の人々の中に泥じつて居た。彼等は一時日本大使館に避難しようと思つて居たらしい。その大使館はチイア・ガルテンを抜け出たところ、即ちケエニツグ・ブラツツの角に在つた。だがチイア・ガルテンを抜けることが如何に危険であるかを彼等は少しも知らなかつたのである。

前に言ふ如く、獨逸空軍の目的は、絶対に敵機を市街に侵入せしめないで、途中で待ち受けて、その空軍を爆撃するにあつた。けれども、敵機の新伯林に侵入することを防止し得ない場合は、遺憾な

がら彼等を放置し、第二段の策戦として、彼等をチイア・ガルテンの空上に爆撃し、それによつて、舊伯林を敵の猛火より救ふ豫定であつた。

若し避難者が、かうした獨逸軍の方略を察し得たならば、恐らく何人もチイア・ガルテンの森に避難しなかつたであらう。

間斷なき、無氣味な發動機の響が、新伯林の眞上に來たと思ふ間もなく、十萬燭光の閃光が、其の新都市の林立した大建築を照し出した、けれども、それはホンの一瞬間で、忽ち光に代る大爆音が、百雷の碎け落ちたかと思はれる程、物凄く大空と大地を震撼した。チイア・ガルテンの樹々の枝が、暴風に遇つた如く、一時に激しく揺れた。それから二分間も経過したかと思はれる頃、續いて第二の爆音が轟いた。一時大空が同じ程度の光に照し出された。急に猛獸が吼え出した、それはホテル。エデンから、何程も離れて居ない場所に、奇怪な東洋風の樓門を有つて居る動物園内の獸が、恐怖の餘り暴れ出したものと思はれる。

間もなく、新伯林の空が炎の色に彩られた、半天に聳え立つ七十階のウエルトハイム、五十八階のチイツなどが、何の窓からも、めらくと炎を吐いた。新伯林から舊伯林に走る高架線の大橋梁は、宛然に虹の如く、五彩の炎となつて焼けつゝあつた。有名なルイズ王妃の石柩を安置した宮殿、ナホ

レオンに復讐すべく、愛兒達を其の死床に招いて誓はしたあの悲れな女王の遺骸が、ナボレオンの暴戻を、繰り返しつゝある同じ佛蘭西人の火によつて焼かれつゝあるのも、皮肉であつた。

劇しい爆薬の力は、總ゆるものに對して愛惜を知らなかつた。さうした山緒ある建物も、將た堅牢無比を誇つた鋼鐵筋の建物も、差別なく無力であつた。新歌劇場、ワグナー座、ゲエテ座、ハウプトマン座、それ等は、世界のどの都市にも誇るに足る特種な建物であつたが、何れもキネオラマのそのやうに、眞紅に彩られた空の中に、それ自身も亦炎をあげつゝあつた。——その間に、猛獸の吼える聲が益々激しくなつた。さながら咽が裂けるかと思はれる必死な叫び聲、それは確かに動物園に猛火の迫つて居る證據であつた。けれども消防隊はどうした、先刻、消聲ましく警笛を鳴らして街を疾駆したあの消防自動車はどうした？

おゝ大なるパピロン！ 近世のパピロン！ 世界戦に敗北した獨逸民族が、新興の意氣を象徴した新伯林は、かうした佛蘭西人の暴戻な炎の下に、一夜にして焦土と化しつゝあるのだ！

新伯林からの避難者達は、舊伯林を指して、チイア・ガルテンの奥深く走つて行つた。けれども暫くして彼等は濃密な煙が、彼等の後に迫つて来るのを知つた、それ等の人々は、振り返つて、思はず足の竦むのを覺えた、それは森林の一端が炎をあげつゝあつたからである！

それは方略でも、はた策戦でもなかつた。獨逸空軍に取つては、當然闘はるべき生と死の戦ひであつた！ 敵機が新伯林から舊伯林に侵入する中途を、チイア・ガルテンで食ひ止めなければ、舊伯林も亦、當然新伯林の運命を繰り返さなければならぬ！ そして、其の舊伯林には、獨逸民族の現在論は勿論、過去と未來の文化生活の精髓とも云はるべき總ゆるものが含まれてあつた。殊にあの舊王宮であつた現在の伯林大學や、大圖書館や、附屬病院や、議事堂や、マックス・ラインハルト座や、ストラウス歌劇場や、國民美術館や、それ等を一夜にして猛火に委することは、獨逸國民に取つては、一大悲痛事であつた。獨逸空軍が、死身の努力を試みねばならぬ理由は、實に其處に在るのだ！

チイア・ガルテンの空上まで、佛蘭西機の行動を寛容に見て來た獨逸のフオゲゼン五機の四中隊新々超フオツカア機、十機の四中隊は、森林の上空まで來ると、急に佛蘭西機に對して、一齊に砲火を浴せた。佛機の最初の一機が墜落したと思はれる頃、大爆音に脅かされた暗黒な森林の梢は、忽ち炎の鬢を振り亂した。一時に數百本の樹幹が凄じい爆音と共に裂かれた。爆音に次ぐに爆音、光に次ぐに光——戦争は可憐な鳥にすら塹を與へなかつた。忽ち森林の三分の一が火の海と化した。——

四千貫の爆薬が一時に爆發したからである！ 悲壯なる獨逸空軍は、彼れ自身の全滅によつて、敵を全滅さす覺悟をもつて進んだ。舊伯林を救ふ

には、機件を惜んでは居られなかつた。彼等は敵機に衝撃を加へん許り、近く、そして、猛烈に突進して行つた。

間断なき爆音が、天柱を撞き、地軸を破碎した。總ての生物は、呼吸を禁じられた如く、激しい空気の震動を感じた。大地震の前後に起る異象の如く、大地は絶え間なく揺れた。そして、チイア・ガルトンは、ものゝ十分と経たない中に、森林の全面に亘つて炎の怒濤を揚げて居た。

恐ろしい光景！ 世界の終末を想はず光景！ 其のチイア・ガルトンと新伯林の猛火に對して、一八七〇年の普佛戦争の捷利を記念した記念塔の女神と、議會前のビスマルク像が、屹然と面を背けず立つて居たのは、何と云ふ皮肉な光景であつたらう！

獨逸のフオゲエセン機の幾臺かは、敵機とからみ合つて、猛火に包まれて墜落した。それは血の如く染め出された大空に、目を蔽はす悲壯さを添えた。獨逸軍のさうした努力にも拘らず、佛機の幾臺かは、舊伯林の方へ抜けて行つた。彼等は一定の高度を休み、一定の針路を取り、何ものをも怖るゝ所なく平然として進んだ。——佛國の航空司令部は、遠距離の電氣操縦に於て、確かに、完全な成功を收め得たと言つてよい！

……佛蘭西の、無搭乗者爆撃機百臺は、殆ど安全に其の目的を達成した。彼等はそれ／＼に、四千貫

の爆撃を呑負つた儘、それ自身大爆弾となつて墜落し、また爆撃された。機自身の行動が直接であらうと、又間接であらうと、それは問ふ所ではない、彼等は其の使命を全ふしたのである。そして、彼等を掩護して來たシャルパンチエー空中艦の運命は？

獨逸空軍の死物狂ひの突撃に對して、シャルパンチエー飛行船の搭乗者は、數門の機關砲を開いて、敵機に猛火を浴せた。

探照燈の照明の達しないあたりまで昇騰して行つたシャルパンチエーを見かけて、獨逸機は遮二無二に突進した。水素瓦斯の代りにヘリウム瓦斯を氣囊に充滿して居る空中艦は、容易く爆破されさうに見えなかつた。けれども、其の翌朝未明に、その空中艦は蜂の巢の如く氣囊に彈痕を帯び、裂かれた大魚の腹のやうに、だらりと、グリユネワルドの森林上に懸つて居た。無論、それには一人の搭乗者も生き残つて居なかつた。

かうして、佛蘭西の來襲軍は獨逸空軍により撃滅された。けれども、彼等を全滅させたことによつて、決して伯林の破壊が償はれた譯ではない。

三

恐ろしき夜が明け離れた時、新伯林と舊伯林の一部は廢墟の如く荒み果てゝ居た。亘して人類が、

まだ此處に住つて居るのか、否、一夜の中に、活きとし活ける總ての存在が失はれてしまつたのではないか。あのチイア・ガルテンの鳥が塹を追ひ立てられて、炎に翅を焼かれたやうに、シユブレエ運河の魚は、其の巢を失つたのではないか。いな！いな！彼等は其の巢を追ひ立てられた許りではない、今朝は、其の白い腹を臥仰にして、醜い死骸を水面に浮べて居る。

あの恐ろしい佛蘭西空軍の爆薬は、シユブレエの水面に落下して、天に沖する水柱を立てる間もなく、運河の茶色の水を、見る見る白色の毒液に變へてしまつた。そして、其の毒液は、沿岸一帯に猛烈なる毒瓦斯となつて蒸發した。

シユブレエの流れに沿うた街々、家々の人々は、たとひ炎の雨に見舞はれずとも、此の毒瓦斯のために死の苦しめを嘗めた筈である。それ等の人は、立ち昇る黒煙と、重く、地上に立ち迷ふ毒瓦斯に咽せかへりつゝ、伯林南區を指して、眞黒な長蛇の列を作つて逃げた。半ば焼けたボツツダム停車場から、ステエグリツツ、フリーデノオ、デアレム、ワン湖方面への列車には、避難者が鈴なりに絶りついて居た。列車のどの屋根の上にも、避難者が満載されてあつた、にも拘らず、後から、後から殺到する避難者のために、屋根を焼かれ、ブラットホオエを破壊された停車場内は、身動きもされなかつた。

それ等の人は、一日か二日の後には、あの激しい毒瓦斯が霧散し去るものと思つたらしい、まことに愚かしき人々である！ 彼等は、その毒瓦斯に、數十年前の毒瓦斯と同じ程度の有毒作用を空想して居た。けれども佛軍の新毒瓦斯は、さうした生優しいものではなかつた。

シユブレエ一帯の家々では、初めの中は、無臭無色の瓦斯を氣付かなかつた。恐ろしさに慄へて、一夜をまんじりともしなかつた人々も、流石に朝になつては、餓を感じたのである。哀れな主婦達が朝の珈琲を煮るべく、瓦斯焔爐に火を點じた時、無色の毒瓦斯は、一時に引火して、強烈なる爆音と共に、全家を炎と化したのである。それ等の瓦斯は、部屋の壁紙や、家具の中にまで沁み込んで居た。人々の着て居る着物や下着にまで深く浸蝕して居た。それがいつになつたらば霧散して行くか、人々はそれを考へ及ばなかつた。

それ程の猛烈な作用をもつた瓦斯が、どの程度で人體に有毒作用を起して居るか、初めの程は想像されなかつたが、毒瓦斯を吸入した人々は、何れも數時間後に、激しい悪感と發熱を感じ、同時に咽喉部に灼熱的の疼痛を覺えた。それは吸入者の氣付かない中に、喉頭を爛らし、肺部に急性的炎症を起すらしく想はれた。

ワン湖の畔には廣々とした砂岸が連なつて居る。平素は、其處に輕快なヨットが、白鳥の翅に似た帆影を泛るのであるが、今日は、眞夏の蒼空が、一碧拭へるが如く澄み亘つて居るにも拘らず、遊覽

船らしいものゝ影は一つだも見られない。

今、其の廣潤な砂岸に眼を放つと、其處には、埃及を連れて来たイスラエル族の大集團かと思はれる數千、數萬の避難者が、何れも蒼い顔をして横になつて居た。夏の陽は、容赦なく、それ等の人々を照しつけた。暑さに堪へ兼ねた人々は裸體になつて湖水の水に浸つた。けれども毒瓦斯吸入者である彼等は、さうした無謀なことをした後で、忽ち猛烈な悪感を感じ、恐ろしい高熱に呻らなければならなかつた。

其處でも此處でも、激しい咳嗽の聲が聞かれた、苦しみに泣く兒童達の泣き聲が、避難者達總ての胸を痛ましめた、女達は、唯ださめくと泣いた。途方に暮れた男達は、其處でも一團、此處でも一團、何事かを協議して居るらしく見えた。

病弱者や、老人達は、精神的な苦悶と、毒瓦斯の作用を受けて死への道を急いだ。若くは慌だしい死の轉機を取つた。

さうして居るうちに、避難者達は、饑に苦んで來た。

ナポレオン時代に、伯林を棄去つた彼等の父祖が、苦い経験に泣いた後、早くも百五十年が経過した。そして、かうした避難の経験を夢想しなかつたそれ等の不用意な避難者は、殆ど總てが、食料を準備して來ることを忘れて居た。かりに彼等は、すぐそこらの街上でパンを求め得ずとも、商人が

市廳か、誰れかしらパンを供給して呉れるものがあると思つたらしい。

然し、伯林の何處にパンがあるか？

焼き拂はれたと同然の姿となつた伯林市が、假りに尚ほパン粉の多分を蓄積して居るとしても、果してそれが使用に堪へ得るかどうか、それ等の食料は、何等の有毒作用を被らないで、蓄積されてあるかどうか。

それは大きな疑問である！

四

伯林は全滅した譯ではない。伯林市は決して佛國空軍に制空權を握られた譯ではない。確かに伯林市民は、次に何をなすべきかを知つて居た。

唯だ彼等は、何故伯林市が突如として、佛國空軍の襲來を受くるに至つたかを、可なり疑惑の眼をもつて考へたのである。國境は勿論のこと、各地の航空監視所は、敵機の襲來を知るべき凡ゆる設備を有つて居た筈である。單に監視所許りでなく、總ての無電局は、無搭乗者飛行機を操縦する敵の發電所の電波を、其の敏感な受電機に感受しなければならぬ筈であつた。然るに國內の各無電局からは、陸軍航空本部の何等の通報も送られなかつた。何と云つてもそれは不思議なことゝ云はなければ

ならない。

ところが其の夜、唯だナウエンの無電本局のみは、異様な電波を其の受信機に感じたのである。技師達は、コイル型空中線によつて、電波の進行して来る方向を測定して見た。すると、それが、ストラスブルグからであると知れた。

ストラスブルグ！ストラスブルグ！佛國空軍の本部を有し、佛國最大の發電所を有つて居るストラスブルグ！其處からの強大なる電波、それは不思議と思はなければならぬ。殊に、ナウエン無電局が感受したのは、反射電波であつた、そして、幸ひなるかな、それが夜分であつて、受電機が、割合に強度の電波を感じ得たことは！忽ちナウエンから航空本部へ、そして獨逸國內の總ての無電支局へ、一齊に警報が發せられた。

佛國空軍の襲來！さうした警報が獨逸の各地に駛つた時は、既に佛機が伯林を目指して、疾風の迅さを其の翅に乗せて居る時であつた。

ナウエンの無電局が、ストラスブルグからの電波を感じたことは、當然過ることである、佛國の無電操縦が進歩して居れば居る程獨逸の航空無電局にも、それに對應する装置が施されて居なければならぬ。

苟くも敵機が寸地尺土たりとも、獨逸の國境を侵したとすれば、一萬二千メートルまでの射程を有

する獨逸の高射砲が、それ等に向かつて一齊に砲口を開く筈である。若し敵の飛行機が強大な受電機の装置を備へて居るならば、屹度味方はこれに對應する電氣砲によつて、不思議な命中振りを見せたであらう。然るに、それ等の施設を毫しも利用することが出来ないで、其の首府伯林を、全然無防備の都かなんどのやうに無慘無慘敵機の爆彈に曝したことは、何と云ふ不覺千慮なことであらうか。

伯林の市民は勿論のこと、獨逸の全國民が、此の、空から降つて湧いたかとさへ思はれる佛機の、伯林空上に於ける物凄い襲撃に對して、陸軍航空本部の間抜け振りを憤慨し、そして、それに一種疑惑の眼をさへ向けたことは、全く無理からんことのように思はれる。

然し、獨逸國民は燃ゆる憤激から冷めねばならない、なぜなれば、敵機の襲來は各監視所や、無電局や、獨逸航空本部の怠慢の結果ではなくして、全く、佛蘭西の科學的施設が、獨逸のそれよりも遙かに優れて居た結果に外ならぬからである。

若し獨逸の航空本部が、佛國空軍襲來の顛末を、國民に對つて巨細に報告しようとするれば、勢ひ敵國の優越な電氣装置に比較して、自國のそれが、比較にならない程劣つて居る點に言及しなければならぬ。それは確かに國民の士氣の上に、恐るべき影響を與へるであらうから、特に詳細な發表が控へられねばならなかつた。それは兎に角、獨逸の航空本部は、遺憾ながら、佛國の陸軍電機局から放射された未知の強大な電波が、佛機の侵入前に、早くも全獨逸に於ける總ての無電装置を不能に陥ら

してしまつたことを認めざるを得なかつたのである。
 唯だナウエンの無電局だけは、流石に其の装置の一部に故障を受けたのみで、主なる機構は、その被害を免れ得た。そこで遅れ馳せながら、敵機襲来の警報を、全獨逸に駛らすことが出来た。

五

ナウエンから、全獨逸に警報が發せられた時、まづ錯愕したもののは、敵機の目標となりつゝあつた伯林よりも、ライン河畔のケルン、ボン、マインツ、コブレンツなどの諸都市であつた。それ等の都市は、彼等の頭上高く、佛國の飛行機が飛翔した事實を知らなかつた。

勿論佛蘭西の空軍は、無音響のプロペラと發動機の装置をもつて居た。そして、暗が、彼等に有力な援助者であつた。

眞夜中のコルン市の、暗黒な半空に、惡魔の巨大な矛の如く聳え立つ大茄藍、羅馬以西第一と云はれて居るそのドオムの鐘が、星も隠きせぬ大空と、墨のやうな流を淀ませて居るラインの水の上に、突如として呻るが如く響き亘つた。

そのケルンの街は云ふまでもなく、鐘の音の達する程の、沿岸の都市、村間は、忽ち平和の夢を

破られた、人々は褥を蹴つて起き上つた。眞夜中に、何の椿事が彼等の夢を奪つたであらうと、——
 總てが窓を開いて見た。否な或るものは跣足の儘、または寢亂れた寢衣の儘戸外に、河岸に、狂氣の如く走り出て、黒き水と、黒き空を仰いだ。

其の時、ラヂオの發聲機は、人々の家庭に於て、街々の辻に於て、高聲に佛國空軍の通過と、その歸途に於ける危険を報じたのである。際時の後、平和な市が、文字通り恐怖の巷と化した。錯愕した男子達は恐怖に躍り上つた。女達は、絶望的に髪を掻つた。兒供達は、慄へながら、悲痛な泣き聲を胸の底から絞り出した。

さうした恐怖と混亂に、市民が立ち騒いで居る中、第二回目のラヂオは、政府の命令を通告した、それは、ライン沿岸に於ける即時的の撤退命令であつた。

今、全市は燈火を滅した、それは敵機の目標となることを怖れたからである。けれども避難の市民が街上に流れ出た時、街上到る所に立つて、交通の整理をして居る警官の手には、強大な光を發する懐中提燈により、群衆の行く手を明かに示した。流星に、組織的行動を取るべく訓練された警官は、かうした場合にも、依然一絲を亂さなかつた。

『ビツテ！ 右へ！ 右へ、總て中央停車場へ』

彼等は口々にさう叫んだ、時々雪崩のやうに頽れ掛る群衆を、軽く制止し、静かな、なだらかな、

敬愛を失はない調子で停車場への道を示した。其處では一臺の馬車も、自動車も使用が許されなかつた。それ等の乗用車を有つ人々は、すべてラインの波止場へ追ひやられた。彼等は其處から、汽船の便を借りて、河上へ、又は河下へ、避難すべく餘儀なくされた。

中央停車場に殺到した群衆は、豫ねて準備された列車によつて、總てデュッセルドルフの方に送られた。同じラインに臨む市であるにしても、其處は稍安全であつた。群衆は、其處で自由な行動を許された。けれども、伯林が、敵機の襲撃を受けつゝあると云ふ報を聞いた時、群衆は何れも、深い絶望を、其の個々の額に刻みつけられた。

即時撤退を命ぜられた都市は、キヨルン許りではない。ベエトオフエンを産んだボンの市も同じやうな恐慌をうけた、けれども、其の市の人々は、ラインを溯江する汽船により、コブレンツ、マインツを経て、ウキスバアデンに、フランクフルトに溢れて行つた。

コブレンツとマインツの人々も、同じ運命に囚はれた人々であつた。

ダルムスタット、ウオルムス、カアルスルーエの人々は、フランクフルトの方へ遷けて行つた、ゲエテの市であり、獨逸南方の大都市である其の市には、一時に避難の群衆が溢れた。

けれども、バアデン聯邦國の人々は、すぐお隣りの瑞西へ避難するを、最も近道と思つた、世界の

遊園地と云はれる瑞西には、ブルジョアの避難者を歓迎する一流のホテルが、バアゼルに、チューリツヒに、ベルンに、ジュネヴに、大廈を並べて居た。中以下の人々も、瑞西の山村や、小都市に、一時避難し得る設備は充分にあつた。

斯うして、ライン沿岸の都市を空虚にさした當局者には、果して如何なる成算があつたのであらうか。

六

さて、伯林はどうなつたであらう！

伯林の壊滅は、獨逸そのものゝ壊滅であらうか。否！ 否！ 獨逸人はさう容易く粉碎される人種ではない。

假りに、伯林が全滅したとしても、獨逸は單に其の胃の腑に疾患を得たと云ふだけであつて、それが全獨逸を滅亡に導くとは、何人も考へて居ないであらう。然し、敵の空軍に制空權を奪はれたとしたならば、獨逸は佛蘭西に軍事上の死命を制せられることになる。幸ひにして、獨逸空軍が、昨夜襲來した敵機の總てを爆撃し得たことは、戦局の上にて、又國民の士氣の上にて、偉大な勳業であつた。たとひ伯林市民の大半は、其の屋根を奪はれ、其の居所を廢墟にされ、父母、兄弟、離れ離れ

に、煙と炎に追ひ立てられて行つたとしても、尙ほ自國空軍の沈毅なる態度に對して感謝しなければならなかつた。

伯林を圍繞する交通機關の障礙、食料の缺乏、それは確かに重大な問題であるに相違ない。然しそれよりも、政府當局が、先づ手を付けなければならぬ事業は、毒流及び毒瓦斯の淨化であつた。

若し伯林を貫流するシユブレエを、毒流の流るゝが儘に任せて置いたならば、全伯林の市民は、軒並みに枕を並べて斃れたであらう。敵の毒瓦斯から伯林を淨化すること、それが先づ焦眉の急務であつた。

政府は科學技術員の總動員を行つた。それ等の人は、總て伯林郊外ダレエムの陸軍技術局に召集された。そしてそれ等の人は陸軍科學技術部の命を受けて一齊にシユブレエ沿岸に自動車を駛らせ

た。彼等は何れも、毒瓦斯除けのマスクに其の顔を蔽うて居た。白晝百鬼の横行するかと思はれる奇觀が伯林の到る處で見られた。

伯林の街路には、街なみに濛々たる淨化瓦斯が大仕掛の空氣ポンプにより放射された。瓦斯は濃い煙霧の如く街々をおし包んだ。そして慘害の跡を赫々と照り付ける眞夏の陽光を陰鬱にした。けれど

も淨化作用はたゞそれだけで満足されなかつた。夏雲の如く漂うた淨化瓦斯に對して、尙ほ強烈な淨化光線が放射された。

街々は、家々は、其の六階、七階、若しくは十二階、十五階の窓を開いて、それ等の瓦斯を光線を吸ひ入れた。壁紙の中まで、絨氈の底まで込み込んで居る毒瓦斯に對して、殆ど完全な反作用が及ぶまでには、可なりの努力と、費用と時間が費されねばならなかつた。

シユブレエの流れには、一齊に淨化薬が投入された、その度に恐ろしい化學作用によつて、其處此處に、高く水柱が天に沖した。けれども、一時間後には乳汁の如く混濁したシユブレエの水が、清水の如く底まですみ互つて、眞夏の陽の光を輝々と反射して居た。

これはヨーロッパの旅に疲れた旅客が、眞夏の一夜、カーテンに白み行く曉かけての悪夢であつたらうか。

スエズ運河の封鎖

藍色に澄み互つた中空に、紅を流したかと思はれる空の色、それは夕もやが染め出されたのか、それとも、夕の雲が融けて流れたのか、それは判らぬ。さうした夕暮れの紅海に沿うて、蘇士運河の岸に、低く飛び行く一列の航空縦列があつた。その翼は白くトルコの新月を抜いて紅に染められ、さながら千一夜物語の中から抜け出て来たかのやうに思はれた。

彼等には、ボート・サイドまでも、蘇士までも行く気はなかつた。たゞ運河に沿うて、低空を飛行した。何もものを求むる如くに——忽ち運河の見張り所から、高射砲が響いた、連続して、豆を煎る迅さをもつて。けれどもトルコの飛行隊は、無關心に、その茫漠たる不毛の岸に沿うて飛行を續けた。シナイあたりから、沙漠に斃れた獣の腐肉をでも獲やうとして、沙丘の上に翼をおさめて居た二羽の秃鷹が、飛行機の爆音と、その巨大な赤い翅と、豆を煎る高射砲の響きに驚かされて、慌てふためきながら、アフリカの彼方に飛んで行つた。

飛行隊は尙ほも静かに運河の岸を渡る。何もものを捜すらしく、——突如！ 沙上に眞白な斑点が現はれた。飛行隊の一機が其の上へ一個の圓筒を投下して、なほもその航路をつゞけた。

一條の銀蛇を走らしたかと思はれる光を残したまゝ、沙漠の夜は運河の上に暮れそめた。その時、トルコの飛行隊は、運河を下航して来る一隻の巨船を認めた。船尾には、夕闇にもそれと知られたユニオン・ジャックの旗をなびかせてゐる。急に、機は速度を迅めて、巨船の上空に、またもや一個の圓筒を投下した。それは——船客に退去を要求したものである！

蜘蛛の子を散らす如く、甲板を右往左往に馳けて行く船客、ボートを下す準備、投錨するチェーンの響など、一時、甲板の上に、もの凄い混亂があつた。間もなく、運河の岸まで、幾度となく船客を運ぶボートが見られた。

いつか夜に入つた！

一萬二千噸の、アガメノン號の檣頭に、青い燈が輝いた、けれども船には何人も居なかつた。それは、飛び行く和蘭人の船であつた！

巨船の上に、「アラビアン・ナイト」の飛行機は一齊に爆弾を投下した。それは目的を誤らなかつた。巨船は運河の兩岸に、凄じい波濤を起して、静かに沈んで行つた。

勞農トルコの飛行機は、運河の航路を封鎖したのである。そして、彼等は、白衣の回教兵に、運河の見張りを托して、その儘、小亞細亞の方面に影を没した。斯くして日英兩國は、海上における歐亞の聯絡を失つた。それは日本を益々苦境に陥れ、そして印度に獨立の機會を與へた。

伯林の平和條約

亞細亞と、ヨーロッパと、南北アメリカの中に、双方の交戦體が、相錯綜して存在した。戦争は、表面から見れば、資本家國の勝利らしく思はれた。けれども、戰期が長引けば長引く程、勞働者國家には有利であつた。なぜならば、資本家の國家は、その内部において、自然的解體を促す多くの缺陷をもつてゐたからである。

交戦中、それらの資本家國においては、猛然なる階級闘争が行はれた。それらの政府は、一般の法律により、または軍律によつて、國家の内部的解體を阻止しやうと、必死の努力を試みた。左翼政黨員の一團、勞働者の一隊、戦争を拒否する兵士の一個聯隊、または一旅團が銃殺された。けれども政府はその目的を貫徹することが不可能であつた。

x

ソヴェット同盟は、軍備の點においては、遙かに資本家國に劣つて居た。けれども兵の質において彼等は、遙かに敵側を凌駕してゐた。不可能と考へられること、作戦上、許され難いことが、屢々彼等によつて敢行されたのは、全く、兵の意氣と犠牲的精神が、遙かに、資本家聯合國の兵士より卓越してゐたからである。

戦争は一年と八ヶ月に及んだ。その間に印度、スーダン、南阿聯邦が英國の手を離れた。布哇と、キユバと、フネリツピンが完全に米國の鐵鎖を斷つて獨立した。

フランスはシリアとアルヂイアを失ひ、スペインはモロッコを、伊太利はトリポリを失つた。ユーゴオ、スラヴは、アルバニアの獨立により革命を誘致し、ルーマニアは、匈牙利とロシアの手に屈服し、チエツコ・スラヴは、坡蘭土とロシアの手によつて、ソヴェット組織に改造され、そして獨逸聯邦は、戦争中に全部赤化してしまつた。

x

終に、米國が資本家國を代表して休戦を提唱し、平和會議が伯林に於て開かれた。

米國は、半世紀前のウエルソンの欺瞞を踏襲して、再び世界の耳目を蔽ひ、再び、信を世界に失ふの愚を繰り返さなかつた。斯くして、米國の提案通り、人民の自決權と無賠償無併合の平和が締結された。

けれども、**聯合國**は**戦役**、**世界**に、**大小十二ヶ國**の**新ソヴェット國**を承認しなければならなかつたのである。

明日の世界

一 アルプスの理想郷

人類が長い間希望してゐたユートピアの試み、それは**瑞西**において實現されやうとしてゐる。文明に疲れた人々、文明の惨禍に泣いた人々、かれらは今、**瑞西**の到るところに詩的な理想郷を建設しやうとしてゐる。カントン・グラウブデンに、カントン・デ・ヴォに、カントン・チュリツヒに、カントン・テシンに、あるいは**リギの山**の上に、**ジュネヴの湖畔**に、**ボーデン・ゼー**の波うつ岸に。

X

ある若い**青年男女**の一團、それらの人々は**ロシエ・ド・ネエ**と云はれた山の麓に自由な理想の社會を作つた。彼號の一團は**紐育**から來たのである。彼等の中には以前知り合ひの者もあつたが、多くは互に未知の人達であつた。同じ理想に對する憧れが、彼等に一個の集團を組織せしめ、そしてこの

村に入りましたのである。

彼等が初めて其處に着いた時、附近に住むアルプスの自由民は、極度の文明に疲れた近代人の顔を見た。極度の神経衰弱、極度の恐怖、それが若人達の額に深い線を刻んでゐた。それは戀人の、灼熱せるキスをもつてしても、容易くは拭い難い文明病の痕跡であつた。

けれども、彼等は原始の姿の儘に残されたアルプスの麓に着いた時、彼等の眼には歡喜の涙があつた。そして彼等は、樞から再び野に放たれた野獸が、その痛ましい捕はれの間に、忘れ果てゝゐた咆吼の狂喜を味つた時のやうに、 O とばかり、野生の叫びを、峯の雪に、谷の氷河に反響させたのである。

かれらは互に相抱いた。彼等はただ理由もなく抱き合つて泣いた。キスの雨が、夫婦とも、戀人と

も、兄妹ともつかぬ人々の、額に、頬に、唇に、降り注いだのである。彼等に與へられた猶大な自由の土地、文明の脅威を受けなかつた原始の土、たゞそれを見ただけで彼等は躍り上つて泣いたのである！ おゝ、其處には前世紀、前々世紀の詩人が歌つたアルペンの牧場の香と、夢の如き牛羊の鈴の音と、神秘的なヨードラを、谷間より谷間に響かす少女の聲があつた。多謝す、瑞西の山河と、瑞西の國人に！ かれらは人類の最後の血闘とさへ想はれた最近の戦争にも、厳正なる中立を維持して來た。その中立を維持するがために、かれらは如何に多くの犠牲を拂つ

たであらうか！。そして、いま戦争が終つた時、彼等の人民委員會は、世界に對つて、その國土を提供したのである。——さうだ、ジュネヴの平和會議について知つてゐるものは、瑞西が、その國土を、世界人の理想郷として用ゐらるべく提供したことを忘れないであらう。

ユートピア！、それは血と火によつて得やうとしたユートピアではなかつた。平和な、人類の犠牲的精神によつて提供されたユートピアである！。たゞ、その國は餘りに狭小である。アルプスの峯と峯の間に横はる谿谷と湖水と、僅かばかりの平野と、たゞそれだけである。

けれども、其處には、文明の力をもつて破壊されなかつた自然が、氷河時代からの湖水に、峯の雪を融かして、神嚴なる姿を見せてゐる。そこには、白雲の湧き立つたかと思はれた連峯が、まだ人類の姿を見なかつた時代の儘、聳り立つてゐる。

X

其處に初めて着いた文明人の、はじめて結んだその夜の夢はどうであつたか！。彼等は、原始の詩を破壊するあらゆる文明的の用具を、かなぐり棄てゝ來た。たゞ昔の夢を憶はずテントの生活、それが彼等に戀しかつたのである。

アルプスの自由民は、かれらを同胞のやうに迎ひ入れた。アルプス人は、無償で、その牛や山羊を與へた。黄金の色に輝くバタ、香高いエーメンタルのチーズ、森から伐り出したばかりの薪、それ

らが自由に異邦人の前に提供された。

半世紀前の人達が論議したところの「剰餘價值」、さうしたものは、アルプス人の社會には存在しなかつた。彼等の生活に用ゐられたものゝ残りは、凡てが剰餘であつた。けれども彼等の剰餘に對しては價値の起りやうがなかつた。

アルプス人は、アルプスの高峯から流れ出る氷河の泉を飲む。しかし、その水は、谿谷に、湖水に、豊かに湛へられてある。かれらの兒達も、かれらの牛羊も、それを自由に飲む。そこにはこれを瀆する装置もない。そこには、これを給水する文明的設備もない。同時に、それを獨占しやうとする個人も、團體もゐない。彼等は一生の間、間斷なく食ひ續けても、食ひきれないチーズやバタをもつてゐた、彼等の牛羊は、唯だ頸に大きな鈴をつけて、山の牧場に放し飼ひにされてあつた。彼等は、その牛羊から得た乳とバタに價値を置かなかつた、それ程無盡藏な生産が、彼等の前に擱げられてあつた。彼等はそれを私有して、子孫に残さうとしない。アルプスの國家は、既に長い以前、人類のさうした誤想を正して居た。

人類の少數者が、生産の「剰餘」を獨占しない限り、「剰餘」に價値は起り得ない筈である。人類がその労働を他の人類に限り、生産の剰餘に價値は起り得ない筈である。

嘗つて前世紀には、サン、ガランの地から、世界にむかつて、世界一を誇るレエスを輸出した。しかしアルプスの國家がその輸出を禁止して後、そのレエス市に住つて居た大商人の群は、ロンドンに細育に、伯林に、上海に、東京に移住した、そして今、アルプス人の少女達は、自國で必要なレエス以外のものは製産しない、それらの熱練した女性達は、レエスを供給する代りに、その隣人から牛乳とチーズとパンを興へられた。——たゞそれだけである、かの女達はもはや奴隸のやうに労働を賣りものにしなかつた。

一日に二三時間の労働、それは労働と名づくべき程のものではなかつた。ヘルヴェチヤ (Helvetia) の娘達であるかの女達に、アルプスの空氣と水が恵んでゐる健康は、世界の大都市の少女達の健康より、何倍か優れたものであつた。さうした健康者には、二三時間の労働は一種の遊戯であり、娛樂であつた。かやうな快適な境遇と、自由なる精神状態——それ以上、人間が何もの必要としやう！

X

文明人の一團にとつては、全くアルプス人の國はユートピアであつた。そこでは凡ての人が兄弟であり、凡ての人が姉妹であつた。そこでは、言語と人種を超越した自由があつた。紐育人の一團は、始めて天幕を張り、火を焚きつゝ、喜びに眠られぬ一夜を明かした。

彼等はあの七十八階とか、九十三階とか、百二十五階とか、百七十階とか云つたやうな、莫迦々々

しい摩天閣の中に住む人々を憐れに思つた。日光を見ず、大空の碧を仰ぎ得ないで、地下の街路を唯一の歡樂境とする不自然な、狂人染みた人類の大群を氣の毒に思つた。

殺人光線によつて國境を守る！。殺人瓦斯によつて敵人を妨害する！。——何といふ淺ましい、狂人沙汰であらうか。なぜ人類は、その同胞を殺さねばならないのか、なぜ人類は、都市に集合して、他國人の襲來を待たなければならぬのか。

あの大空を飛翔する殺風景な航空船隊、夜の星にさへも靜かな眠を興へないで大空に織られるサアチライトの縞！、敵機の襲來に備へるサイレンの氣膽ましき響！——さうした世界を住居とした紐育人にとつては、あの薄明の中に夢みつゝあるアルプス連峯の姿と、碧を湛へたりマン湖の水を見て、自然の平和と、神秘に對する感謝に、頬の濡れるのを知らなかつたのである。

けれども茲に集つた人々の群は、個人としての欣求と理想のために、他を顧る暇のない人々のやうに想はれる。他を顧る少しの餘隙をもたない人々のやうに思はれる。それは前々世紀の宗教者の群が、同一の目的と、同一の欣求に繋れた罪囚の如く、朝にも、眞晝にも、夕暗にも、月明にも、絶え間なく列を作つて巡禮に上つた時の熱心さをもつてゐた。ある時は、灼熱の陽の下に跣足の足の裏を爛らしつゝ、ある時は、月光の雫を、頭髮の毛から着物の裾まで滴らしつゝ、同一の名を讚美し、同一の熱情の、力強い腕に掴まれて、曳づられて行くやうに見えた。彼等は自分と同じ列にある人々

を顧る暇はなかつた。それらのある者は病人であり、それらのある者は仆れては起き、起きては又仆れながら、同じ列に追ひ縋らうとした。けれども、列の人々は、それらの手をとり、または己れの肩に縋らしてやる程の餘隙をもたなかつた。

紐育人は、それに似た熱狂と欣求をもつて、この國に辿りついた。——果して、この自由な國土が彼等のあらゆる苦痛に對するバルザムであり、あらゆる理想に對する實現の國であるか、それは「未來」が解決の鍵を握つてゐる。

二朝の一刻

瑞西全國民の人口は、前世紀においては四百萬人であつた、けれども、平時には尙ほその外に四百萬人の人々が、ローマから、巴里から、倫敦から、ハンブルグから、モスカウから、ヴェノス・アイレスから、ケープ・タウンから、上海から、東京からやつて來た。或るものは航空機により、或るものは航空機に劣らぬ迅速さをもつた汽車によつて——。それらの人々の一部は、ジュネヴの國際聯盟會議に出席する人々や、その隨行者であり、その他の大部分は遊山の客であつた。けれども瑞西が率先して共産制度を斷行した後、大都會の住民は殆ど大部分退去してしまつた。残つたものは、アルプス山地の人々のみであつた。大戰前後、この國の住民は僅かに二十萬人しかなかつた。さうした、比較

的人口の稀薄な時に入り込んだ紐育人は幸福であつた。

かれらの一群は、その一人が毎日三時間づゝ牧場に労働して、三ヶ月勤勞すれば、一ケ年分の食糧を得るに充分であつた。

アルプスの牧場に放たれた牝牛は、乳牛として世界がもつた最良のものであつた。若い男女が數頭の牝牛から與へられる乳の量は、殆ど始末に終へないかと思はれる程多量であつた。

アルプスの山々が、明け行く半天に未だ灰色の儘眠つてゐる頃、そして瞬く星の光が、紐育人の天幕に残光を投げてゐる頃、彼等は一齊に起き上つて、新たに建てられた牛舎に行く。勞働服を着た勇ましい男女の顔には、勇氣と希望が溢れて居る。戀を得た人に見られる瞳の輝、喜びを口にする人の唇、希望に燃ゆる頬の色、——彼等は、さうしたものゝ所有者にふさはしい人々であつた。一人一人が、餡色をした、または灰色の斑點をもつた牝牛の腹の下に踞んで、なれない手つきで乳を搾る。張きつた乳房の下に受けられたバケツには、見る見るうちに新鮮な乳が溢れる。一人々々が、それらバケツを、バタとチースの製作場に運ぶ。

朝の風は、昨夜の名残を止めた森の木立の薄暗を吹き拂ふ。小鳥がチ、と啼き出す。いつかアルプスは、くつきりと、乳白に晴れ互れた大空に聳り立つてゐる。その時、何處からともなくアルペン・ライドが響いて来る。

Wo Berge sich erheben
Zum hohen Himmelzelt,
da ist ein freies Leben,
da ist die Alpenwelt.
Es g'raet da kein Morgen,
es dümmer keine Nacht,
Ton Aug'n unverborgen,
das Licht des Himmels lacht,
das Licht des Himmels lacht.

新らしき生活の喜び、その感激が、音響の波を作つてゐる。一節が終ると、期せずして其處でも、此處でも、その疊句を付ける。

再び歌は響く、牛舎のあたりから、そして、朗かな歌の響きのうちに、いつかアルペンの峯が紅に染められる。

三 新世界の温床

ニューヨーカーは時折、父母の國を思ひ出した。それは一種の懷郷病であつた。人類の總てがもつて居る懷郷病であつた。けれども、それは人類が遺傳的にもつて來たセンチメンタリズムの一種に

過ぎない。そして、彼等は思ひ返した、「さうしたものに支配されることは人類の耻辱である」と——全くさうに違ひないのである。既に人類はこれまで誤れる軌道を走つて来たのである。滅亡への道である。と知りつゝも、それに向つて憧れをもつならば、それは阿片を喫む人が、阿片の害を知りつゝもなほそれを戀しがると同じである。

なる程、ニユオオクの生活は、人類生活の極度に達したものに相違ないだらう。けれども、その物質文明は一體誰れがために、また何を目的にして、其の頂點に達したのであるか。何のために、あの百階以上の摩天閣が必要なのだらう、何のために、摩天閣に達し易い由乗りの電車が必要なのだらう。車體の屋根に滑車を附し、一條の軌道により、壓搾空氣の力を借つて中空に懸りつゝ駛走する。實に目覺しい交通機關である。——けれども、斯やうにまで時間を節約して、人類の能力を増進さす目的が何處にあつたか！

それは労働者自身のためであつたか、被傭人それ自身の利益のためであつたか、それとも、人類の大多數の福祉のためであつたか、——否、否、否、何れでもなかつた筈だ。たゞ資本家と、資本家の組織してゐる社會のためであつた。大多數の人類は、資本家が無生物である機械を運轉し、あらゆる生産上の能率増進を計る場合に、中間の機關として、すなはち、機械態の一部分として利用せらるゝに過ぎなかつた。

若き紐育人がその父母の國においてなしたるあらゆる労働、あらゆる努力は、決して彼自身のためでもなく、又彼自身の同種族のためでもなかつた。

彼等は一杯の牛乳、一片のチーズを得やうがために、どれ位の努力と屈辱を同じ人類の足下に献げたことであらう。かれらは、理由なくして、餘りに安く労働を買ひ取られた。時には足もとを見られて、踏み値にして、血と汗を欺き取られた！

けれども、いま此の瑞西のユートピアにおいては、彼等は、彼等自身の幸福、彼等自身の同階級の幸福のためにみに働いてゐる。その労働は何人の感謝を受けずとも、何人の激勵を受けずとも、よいのである。それは彼等自身と、その同種族のために献げられるものであり、何人にも横奪を許さないものである。——さうした社會、そこには文明と稱すべき施設がなくとも、彼等には満足と幸福の絶頂がある！

おゝ呪はしき物質文明！それが如何に高度に達したにせよ、それは多數の人類には無意味ではないか、不必要ではないか。

高度の資本主義を擁護するための高度の物質文明、それは人類の大多數により、呪はれねばならぬ必然の運命をもつ！

紐育人の村は、背面にアルプスの連峯を望んだ、前面にはサヴォイ・アルプスの波濤と、リマン湖の碧を見た。湖水の此方は、瑞西のリヴェラと云はれてゐるモントレエ・テリテ (Montreux Teritet) であり、湖水の彼方には佛蘭西のサン・ジャンゴルフとエヅキアンの村がある。

モントレエの岸に沿ひ、サラニヨンの白鳥のやうな小島を見て、クララン、ヴェヅエ (Claren Veve) の町を通り抜けると、間もなく、其處にウシイの岸がある、その岸から少し高所に上れば、丘の上の城かと思はれるローザン (Lausann) の市がある。ローザンから電車で半時間を費せば其處にはジュネヅ市 (Geneve) が、湖畔を鏤める寶玉中の、最も大きな明珠のやうに輝いてゐる。いや、明珠よりもなほ、美しい都であつたかも知れない、あの三日月形のリマン湖の、その一端に輝く、ジュネヅは、星の都の美しさをもつて居たかも知れない。そして4世紀前までは、その都は、姪酒の都であり、享樂の臺であり、そして同時にまた國際聯盟の都市であつた。けれども瑞西國家が、財産自由制を創始して、新に特種の國家となつて以來、ジュネヅも、以前のインタアナシヨナルの都としての光榮を抛つた。

國際聯盟會館！ 世界の人類が一度永遠の平和の殿堂であると過信した建物、其處から平和の鐘が、地球の全面に波及すると信ぜられた建物、それもいつか不用になり、長い間無人の宮殿となつて居た。それが、この數ヶ月來、ヘルヅエチャ・ユートピアン俱樂部 (Helvetia Utopian Club) として

この國に理想郷を建設した人々の集合所となつてゐる。其處には何人でも自由に出入することが出来る。何の規約も、何の拘束もない。この國の自由を樂しむ人々は、凡てがその會員であり、その維持員である。

其處の掲示板に掲げられた新ユートピア村のリストは會員の誰れにも興味のあるものであつた、それには――

名 稱	所 在	人 種	人 口
サン・クリシヨナ自由村	パアゼル郊外(クリシヨナ)	加 奈 太	七〇名
アルトナ自由村	ロカルノオ郊外(アルトナ)	朝 鮮 人	三〇名
フライブルグ・フライスタート	フライブルグ郊外	英 國 人	六〇名
チンメンワルド理想村	チンメンワルド	印度人 スマトラ人 フキリツピン人	八五名
ベルナア・オーベルラン ド・ユートピア	ベルン上高地	(支那人、安南人、 韃靼人)	五〇名
ユートピア・ベルノア	ベルン市郊外	フランス人	六五名
ボヘミアン・ユートピア	チヌーリツヒ郊外	デブシイ人	四〇名
アラビアン・ユートピア	ルガノ市郊外	(アラビアン シリア人)	三〇名
シオン・自由村	ニイヨン町附近	猶 太 人	七〇名

以上現在

かうしたリストが毎日のやうに増へて行く。人々はそれを好奇の眼をもつて眺める。人々はその俱樂部で、世界の有ゆる人種に出會ふことが出来る。そこでは有色の人種も、以前のやうに侮られることもない。そこでは、アフリカの黒人の婦人も、女性として尊敬を拂はれる點においては、白人の貴婦人と變る所はない。其處では凡ての人類がひとつの崇高なる理想によつて一環の如く繋れてゐる。そこに集る凡ての人の眼には、平和が溢れ、慧智が迸つてゐる。凡ての人が聖徒の如き風系と容貌をもつてゐる。黒人の老人にも、韃靼人の青年にも、頭に圓光が輝くかに思はれる。其處では、アラビア人の少女も、マリアの清純をもち、フキリツピン人の老婆も、エリザベエトの敬虔と善良さを示してゐる。其處には虚榮もなければ、偏狭な名譽心もない。たゞあるものは、眞卒であり、善良であり博愛である。

X

甲の自由村において餘れりと思はれるものは、それが、アラビアの文字、土耳其の綴で書いてある小冊子でさへも、倶楽部の卓上に置かれる、必要な人の持ち去るを希望せられるのである。

朝鮮人が持つて來た奇樂人參が、屢々其人達のユートピアから寄贈された。人參の培養法に關する

講演が、諸方の自由村から依頼されるなどの面白いエピソードも作られた。

印度人の少女が、英國人の青年から妻にと所望されて、前世紀に見たやうな舊式の結婚式が、二つの自由村の人々を前にして行はれたことなどもある。

かやうに、瑞西國は、來るべき新社會の大いなる温床となつてゐた！

四 東洋人の一團

ある日、紐育人のキャンプの前に一團の黄色人の男女が現はれた。

彼等は大して背は高くなかつたが、平均した瑞西人ほどの身長と骨格をもつてゐた。女は濡羽の黒い髪を、耳のあたりで斷つてゐた。その聰明さうな瞳、明るい表情の中にも、東洋人の特徴である淑しさを失はなかつた。

紐育人のある一人が出て、かれらを迎へた。

「あなた方は何處へ行かれますか、この村は此處で盡きて居ります、これからはロシエ・ド・ネエの山に入る道です。山には前世紀時代のホテルが、壊はれた儘になつて居ますが、人は一人も住んで居ません」

東洋人の一人、それは一團の代表者かと思はれる若い男が答へた。

「吾々は、このあたりにユートピアを建てやうと思つて、遙々東洋から参つたものです、貴下方は紐育からの方ですか」

「さうです、紐育からのユートピアンです、——けれども、東洋の方よ、理想的なあなた方の國々はそれ自身既に一つの大きなユートピアではありませんか。あなた方は何を苦んでこの國へ來られたのです？、あなた方は、この國へおいでになる必要はなかつたでせう」

「さうです、吾々の同胞は、今ユートピアと思はれる新東洋の建設に努力して居ります、そして、世間では、已に吾々の國々が一つのユートピアであると言つて居ります。けれども、アメリカの友よ、吾々はあのユートピアよりも、尙ほ一層自由なものを欲しいと思ふのです、なほ一層詩的なものを欲しいと思ふのです」

「お、ではあなた方の新東洋は、吾々が此處でもつ小さな自由な社會よりも、不自由なものでせうか」

「將來は知りません——、拙くとも今は、あなた方のユートピアよりも、制度や、規律や、組織が行き交り過ぎてゐると思ひます。新らしき道徳、新らしき組織、新らしき社會、その凡てが萬人の理想といふ譯にはゆきません。一つの心臓が太い動脈から、網細管の末梢に至るまで、平等に、規則正しく血を送るやうな譯に、さう理想的に人類の社會は行くものではありません」

「ではあなた方は、どういふ理想と、どんな欲求を胸に燃やして居られるのですか」

「吾々には、原始の世界の、大なる自由に対する複雑な渴望があるのです——。舊きものを破壊して新らしきものをもつて之に代へるといふこと、それも、可いでせう、けれども、舊きも、新らしきも、他よりもつて來たものは、二つながら台々には贗物なのです。吾々は舊衣を脱ぎ棄てるのではなくして、舊い皮膚の下から、新しい人間を産み度いのです。吾々は何ものによつても創造され度くないのです。勿論、吾々も一度は創造されたでせう。けれども、今吾々は、組織から、内層から、細胞から、自然に解體されて來たのです。吾々、すなはち、小さな分子と分子から、吾々は新しい人間を創造し度いのです。吾々、一人々々の手で、新しき世界を創造したいのです。吾々は Geschicht となるので無く、小さくとも Schöpfer であり度いのです。これが、吾々の未來に對する幻影なのです、この幻影を求めて、吾々はこの國に來たのです」

若き紐育人が、それを聞いて、この新らしき東洋人の手をひしと握つた。

「同胞よ！、吾々の理想もまた其處にあるのです、それだから、吾々は、あのソヴェット・アメリカを遁げて來たのです。では、諸君が適當なる土地を得られるまで止り給へ、吾々の新ユートピアに、そして、吾々のテントの中へ。吾々はなほ多く、未來の社會について論じやうではありませんか」

その夜、テントの中には赤々と火が焚かれた。若い人達の晴やかな聲が、アルプスの麓をたち罩め

霧の中に反響した。華やかな少女達の聲が、折々森の仙女に嫉妬の眉を聳ませた。

x

地球は、昨日の如く、明日も亦、二十四時間をもつて一回轉するであらう。されど彼は、その全面が、一刻々に變化しつゝあるのを氣付かないでゐる！。

第二編 過去より未來への一線

伯 林 篇

血闘の伯林

一二三つの思想

世界大戦によつて、第二インタアナショナルが消滅してから後、諸國の社會民主黨の中に思潮上の大闘争が起つた。けれども、其の闘争の激しさにおいて、恐らく世人は獨逸の右に出づるものを見なかつたであらう。

ドイツにおいては社會民主黨から、獨立社會黨の分裂を見、更にスバルタキストの派生を見たが、此の分裂派生は、決して戦争のみによつて起つたものではなく、既に戦争前にさうした思想上の對立を見たのである。

世界大戦前に、プロシヤ議會の代議士選挙があつた。其の當時、既に社會黨内部には思想的の相異が存在してゐたのである。黨内の多數黨は「倦怠的戦術」と稱せらるゝ、傳統的の戦術を固守した。

此の戦術をエンゲルスは、一八九五年、其の死の直前まで尙ほ賛同して居り、ベエベルは、其の死期に至るまでこれを固持した。此の戦法は、敵が疲勞するまで、そして、社會黨が、確實なる捷利を得る力を涵養するまで、決戦を延ばさうといふ戦術であつた。

斯やうな戦術をもつて資本家と對立する策戦は、ドイツ社會民主黨創立の當初から存在してゐた。そして、かうした戦術の相違からして、終に右翼となり、左翼となり、修正派となり、極左翼となつた譯である。

然るに、新思潮が、更に彼等の中に入つて來た。それは、日露戦争後における第一ロシア革命の印象であつた。これはロシアの如き、經濟的發展の遅れた國においてさへも大衆的ストライキが××の解決をなすに當り、與つて力ありといふことを、ドイツ社會黨員に教へたからである。そして、殆ど全世界の社會民主黨が、マツセン・ストライキの意義を、このロシアの場合に於て認めることが出來たのである。

ところが、此の大衆的ストライキの利用に關して、ドイツ社會黨内の、右翼と左翼の見解に、可なり隔りがあつた。

左翼は、このストライキをもつて、直に敵軍に決戦を試むべき手段なりとした。

右翼は、左翼の此の見解を以て誤れりとした。その理由は、ドイツの場合は、ロシアと同様に考へ

れない。殊にロシアにおいてすらも、たゞ敗戦（日露戦争の如き）の場合においてのみ、此の戦術が有効であると考へた。

左翼は左様な、生ぬるき見解を否認した。であるから、斯やうな右傾の見解を有する首領及び領袖たちは、彼等左翼に取つては、一種の裏切者であつたのである。左翼に取つては、首領のベエベルも亦長老のカウツキイも、裏切ものとしか見えなかつたのである。そして斯やうな、戦術上の意見の相違は、終に世界大戰の勃發まで持ち越されて來たのである。

二 必死の努力

なる程、世界の社會黨の内部には二つの思想の潮流があつた。勿論それは、ドイツにも、フランスにも、英吉利にも。けれども第二インターナショナルにより、一つの聯鎖の如くなつてゐた彼等が實際的に分離の危機に立つた時、分離すまじとして其の最後の努力を試みた一事はこれを認めねばならない。

一九一四年、セルビアに對するオーストリアの最後通牒が發せられて後、密雲はヨーロッパの空を忽ちのうちに蔽うてしまつた。埃霧の開戦は、即ち獨佛の開戦を意味したのである。

かうした危機が、時局の上に看取された時、フランスのジャン・ジョーレスとドイツのフウゴオ。

ハアゼ（社會黨首領）は、ブルツセルに會見して、萬一開戦の不幸を見るに至る場合は、獨佛の労働者相呼應して豫じめ戦争の防止に努めやうと約した。

彼等がブルツセルに袂を分つて幾干もなく、獨佛の間は一髪を容れぬ危険な場合に陥つた、ハアゼは急遽、其の若き同志ヘルマン・ミュラアをパリに遣はし、ジョーレスと共に、戦争防止の手段を講ぜしめやうとした。然るにミュラアがパリに到着した七月三十一日、ジョーレスは、一兇漢のために、パリのレストランに於て暗殺されたのである。ミュラアは、危く捕虜とならうとした、彼れが歸路の停車場には、すでに動員令に接したフランス兵が、雲霞の如く集中してゐた。宣戦は布告された！

けれどもハアゼは戦争の防止に其の全努力を傾注しやうとして、社會民主黨の黨員をして、ウンタア・デン・リンデン街に示威運動を試みさせた。然し其の努力も、餘りに遅すぎた。社會黨の内部は、明瞭に二つに分裂してしまつた。

多數黨は政府を援助して、軍費案に賛同しやうと思つた。彼等は、獨逸國の敗戦の結果が、直ちにドイツ無産階級の上に、一大負擔として加はるを知つたからである。殊に、當時のドイツ政府は、必ずやドイツ國が敵の侵入を受けるに相違ないと公言したのであるが、これが虚構であつたことは云ふまでもない。けれども、開戦當時、ドイツ人は一般にそれを信じ切つてゐたのである。

（註）ヘルマン・ミュラアは、當時社會黨内の少壯者であつたが、一九一九年、ヤイデマン及びパウアー内閣の後をうけて、平和條約調印内閣を組織し、自ら正使として、副使ランツベルグ（労働者出身のベルギー大使）を伴うて、ヴェルサイユに赴き、條約に調印して歸つた。

かれは一九二八年——九年にかけて聯立内閣の首班であり、そして目下の社會民主黨を代表する主なる一人である。

三 戦争と左右兩派の態度

社會黨内部の少數黨は、戦費案否認の意見をもつてゐた。

けれども此の少數黨の内部がまた決して統一を有たなかつたことも事實である。戦前、在來の左翼の中には、開戦と同時に、革命をもつてこれに應じやうといふ考を有つたものが多數あつた。

カウツキイなどの意見は、戦争が敗戦に終つた場合には、革命が起るに相違ないと思つた。けれども、これは決して戦争を防止さすべき手段とは考へられなかつたのである。

さて、愈々戦争になつて見ると、社會黨員の多くには革命的思想の代りに、戦争的感激の方が多分になり、國防戦をやらなければならないといふ考の方が、階級意識よりも遙かに濃厚になつた。

然し、左翼の方は、急速な革命運動によつて、戦争を終結せしむべき積極的手段に出でやうと努めた。そして、其の運動の第一歩として、戦費案を拒否する態度に出でやうとしたが、それにしてもカウツキイなどは、それ位のことでは革命が来やうとは信じなかつたのである。勿論、戦争の急速なる終結は焦眉の問題ではあつたが、それにしても革命運動に着手することによつて、戦争の終結を早めやうなどとは、大多数の社会黨員が考へ及ばなかつた。當時、将来獨立社会黨として認めらるべき人達のみが、戦争の終結を革命手段によるべしと主張してゐた。

党内の多数黨は、ドイツ國の敗戦と怖れる以上に、また、ドイツ國の捷利をも怖れたのである。それは、ドイツが捷利を得ることによつて、隣國その他小國を壓迫するに相違ないと思つたからであるかやうな捷利の結果、ドイツの主張する平和は專制的、獨裁的平和であり、そして、それは實に怖るべき結果を生ずべきであると思つた。ゆえに、社会党内の多数は協調の平和を希望した。かれらは專制と獨裁による平和條約によつて、理想の平和は斷じて庶幾されないと思つた。

然し、ドイツの敵國は決して協調的の平和を期待するまでに至らなかつた。そこで、敵國に此の協調的平和を希望さすまでは、戦闘を繼續せねばならない。ゆえに、戦費案を協賛しなければならぬ——といふのが、多数黨の意見であつた。

四 ハアゼと小數黨

多数黨に取つては戦争前から、最左翼の存在が、党内の統一上から考へて、餘り面白くなかつた。もしこれを除去することが出来るならば、それは大變に都合のよいやうに思はれた。ところが第一回の戦費案の協賛後になつて、少数黨には、多数黨の連中が、一種の裏切者の如くに思はれて來た。そして一つの党内に兩派が共に籍を置くことは、不可能なことのやうに見えた。

然し、党内の左翼を除名することは、右翼に取つては、痛し痒しであつた。なぜなれば、黨の勢力が減少すればする程、それは、政府に取つては都合のよいことであり、そして、社会黨としては、戦争終局を急ぐ上に、都合の悪いことであつた。

然るに戦争の進むと共に、社会黨内の右翼の中に反對意見を懐くものが出て來た。それは、フウゴオ・ハアゼであつた。

ハアゼは、その當初、スバルタキストと意見の相異を有つてゐたが、戦争の進むにつれ、歲月の経過するにつれて、スバルタキストに接近して行つた。

五分 裂

スバルタキストの態度が、當初の中は必ずしも黨の内部に大して反對を起した譯ではないが、戦争の發展と共に、黨の分裂を益々早めるが如き状態を示した。

戦争の當初には、たとひ黨内部に不平分子があるにしても、尙ほ其の行動においては、統一が取れてゐた。されば最初の戦費案、即ち一九一四年八月四日の戦費案に對しては、カアル・リイブクネヒトの如きすら、これに賛同し、ハアゼも亦同様な投票をしてゐる。

然し此の統一は長く繼續せず、一九一四年の末には、リイブクネヒトとリユールが先づ反對した。次いで反對者等は「社會民主労働組合」を組織した。

翌年になつて、左翼における反對の傾向が益々濃厚になつた。ハアゼや、カウツキイの傾向も益々左傾的になつた。一九一五年四月の初めには、黨内左翼の少数者は、世界に對して平和的宣言書を發表した。これに署名したものは、ハアゼ、ベルンスタイン、カウツキイ等の長老であつた。

ハアゼは此の事を、豫め何人にも話さなかつたので、右翼の大多數はハアゼのこの行爲を以て一種の裏切りの行爲なりと認めて、猛烈な非難攻撃を加へた。

一九一五年の十二月には、戦費案は、黨内の議員四十三名によつて反對されたが、然し愈々投票するといふ段どりになると、それは減少して二十人だけの反對者になつてしまつた。即ち反對者の數は一九一四年八月から一九一五年十二月までには、十四名から四十三名になつた譯である。

兎に角、斯やうな譯で、黨内は三つの團體に分裂した。其の(第一)はスバルタキストであり、其の(第二)は労働組合であり、その(第三)は在來右翼と稱せられたものゝ中における左傾派の人達であつた。

六 獨立社會黨

一九一六年に政府は臨時軍費案を議會に提出した。是に對し黨を代表してシヤイデマンが賛成の意を表し、次いでハアゼが立つた。黨員は何れもハアゼが賛成演説をやるものだと思つてゐた。所が意外にも、それは、政府案に反對の意を表したものであつた。

ハアゼの演説は、忽ちのうちに議場を大混亂に陥れた。混亂の渦巻は反對黨からではなくして、ハアゼの屬する社會黨内から起つたのであるから、全く奇妙な現象といはなければならぬ。彼に對しては、右翼の長老であるタヰット、カイル、ザクセなどが一齊に攻撃的罵倒を送つた。

「裏切者！ 卑怯者！」

かうした罵倒の聲を浴びつゝ、ハアゼは敢然として闘つた。

彼はザクセに對して答へた。

「僕は政府の代議士ではなく、大衆の代議士である。僕はたゞ一事を言ひ度いと思ふ。それは十二ヶ

月の戦後、最も愛國的行爲は、此の戦争を終局に導くべく努力することだ。終に議場は大混亂に陥り、收拾し難い状態を呈した。議長は振鈴し、怒號し、極力議場の整理に努めたが、凡て無効であつた。議長にとつて、議場を整理する唯一の手段は、彼が、其の席を去ることであつた。

(註)ダ井ツドはシャイデマン内閣の時に、何かの次官をやつてゐた。ダギツトも、シャイデマンも、亦ハアゼも同じユダヤ人であつた。

一九一七年四月に、ゴオタにおいて反對者會議が召集された時、新黨の組織をやるといふことよりも、黨の内部における反對黨の鞏固な團結をつくるといふことが、其の主なる仕事とされた。

ゴオタの會合において、反對派の一派は、ドイツ獨立社會民主黨を組織すべき提案を出した。これに對して、反對を唱へたものは、カウツキイ、アイスナア、ベルンシユタインであつた。然しこれ等の人々に對して、飽くまで自説を通さうとした人は、レエデブル、ヘルツフェルド、ヘツケルトであつた。彼等の主張は、四十二に對する七十七票で捷利を得た。

決議の後に、ベルンスタイン、ウルムおよびカウツキイは何等躊躇するところなく、此の新黨に參加し得るかどうかを満場に問うた。大多數が然りと答へた。けれども、此の分裂が、ドイツ社會民主黨に必ずや打撃を與へるに相違ないといふことが明瞭になつた。

一九一七年十月のロシアにおけるボルシエキの革命以來、マルクス前の思想、即ちワイトリングブランキ、バクニン等の思想が一時に無産階級の中に甦つた。殊に、ボルシエキのロシアにおける捷利は、スバルタキスト、また獨立黨の成長の上に、多大の影響を與へた。

かくして、ボルシエキの思想及び革命がドイツには適しないといふ考が、社會民主黨の大部分ばかりでなく、獨立黨の中においてさへも、懷かれて居るにも拘らず、獨立社會黨の大多數は相率ゐてボルシエキの思想に追従した。

一九一七年に、ドイツ海軍の水兵中に騒擾が起つた。當時首相のミハエリスと、海軍大臣のフォンカペレは議會において、ハアゼを叛逆罪なりとして、公然彈劾した。けれども、ハアゼ及びドイツマンは頗る巧妙に其の攻撃を回避することを得た。

七 革 命

一九一八年十月、ブルガリア及びオースタリーの戦線において、軍事的敗北が起つた。それは終にドイツの西部戦線の惨敗を惹起するに至つた。これは、協調的の平和を來すにあらすして、むしろ獨

裁的の平和を將來する機縁となつた。

かうした戦局の終末は、社会黨の上にも、新たな態度を取るに至らしめた。戦争によつて作られた黨内の分裂は、また戦争によつて、其の原因を失ふに至つた。無産階級の前に、今や政治的権勢が落ち來らんとしてゐる。そして政權への道を辿らんとするには、左翼の獨立社会黨は、最も鞏固なる基底となるべきものと思はれた。カウツキイの如きですらも、獨立黨を其の地盤として闘はんとした。

局面の開展に際しても獨立黨の中には、統一が無かつたが、大部分の黨員は、今や兄弟互に場にせめぐべき時でないことを自覺した。

聯合するといふことは、分裂するよりも困難なものである。迅速なる恢復は考ふべからざることであつた。けれども、若し、獨立社会黨と、社会民主黨が聯合しない場合は、政權を掌握することが、到底不可能であるといふことを、大多数が承認した。だが、かやうな思想を持つたものは、獨立社会黨の一部であつて、其の他のものは、完全にボルシエキキ的手段によつて、政權を得やうと、たゞ無性に焦つてゐた。

然らばロシアのボルシエキキの手段といふは、如何なるものであつたか——。ロシアにおけるボルシエキキは、革命の開始以來闘争を開始した。この闘争は、ひとり大地主や、資本家に對する闘争ば

かりでなく、また、他の社会黨に對する闘争であつた。少數の獨立社会黨は、果して此の闘争に堪へ得る準備があつたか？

これより先、ロシアとドイツはブレスト・リトヴスクの講和を結んだ、此の講和が如何にドイツ軍閥の横暴ぶり、愚劣さを發揮したかといふことは、今日なほ記録に残つてゐる。

當時ロシアの無産者政府が、如何にドイツ戦線の兵士に訴へたか、そして、これが如何に効果があつたか、——疑ひもなくドイツの革命は、外部よりロシアの力が加はつたことを否定し得ない。

(註) 拙著「革命文集」又は「著名文集」を所持する人は参考され度し。

次いで吾々は、講和後ロシア大使としてベルリンに駐劄してゐたヨツフェの宣傳を忘れてはならぬ。

其の頃ドイツからロシアに駐在を命ぜられた元帥や、大使が相次いで暗殺されたことは、ドイツ軍閥の末路を報ずる第一の吊鐘の如く響いた。

それに次いで起つたヨツフェの、ベルリンにおける赤化運動は、端しなくも露獨の國交を斷絶せしむるに至つたが、それと同時に、ヨツフェは數百萬ルーブルの金を、獨立社会黨のコーン(CORN)の

手に残して去つた。コーンが此の金を、如何に有利に用ゐたかは言ふを須ゐない。

(註) コーンは、一九一八年末のドイツの革命後に司法次官になつた人であるが、一九一九年の戦争主任者審判委員会の委員長として、ベエトマン・ホルウエツヒ、ヘルフェリツヒ、チンメルマン、ヒンデンブルグ、ルーデンドルフ其の他を審問した、筆者は當時屢々傍聴席にあつて其の模様を目撃したものである。

一九一八年、十一月、まづ直先きに革命を謀つたものは、キール軍港における水兵達であつた。革命が勃發してゐる中に、ハアゼは獨立社會黨を代表し、ノスケは社會民主黨を代表してキールに赴き、水兵達の計畫を援けた。

かうしてゐる中に、ハアゼの同志バルト等はベルリインにおいて革命の準備をした。彼が軍隊と労働者の迅速なる握手を企てんがために、徹宵して同志と共に、宣傳ビラ其の他の手配をしたことは特筆に値ひする。

ベルリインの總ての工場の労働者が、バルトの革命計畫に賛同して、最も敏捷に行動したことは、革命を容易に成功せしめた。

少数の士官達は、宮城の廐舎に據つて、軍隊と労働者を防いたが、とても其の敵ではなかつた。

ハアゼは遅れてベルリインに歸つた。歸つた時は、ベルリインの政權は無産階級の手にあつた。キルハルム二世は、已に戦線からオランダに逃走してゐた。

政府は社會民主黨と獨立黨の聯立内閣であつたが、其の閣僚の重なる顔ぶれは大體左の如くである

人民委員長	フリツツ・エーベルト
同	フウゴオ・ハアゼ
人民委員	ドイツトマン(獨立黨)
同	バルト(同)
同	シヤイデマン(社民黨)
同	ランヅベルグ(同)

(註) 此の中のエーベルトは後に大統領になり、シヤイデマンは首相となつた、又ランヅベルグは、白耳義公使となつて、後にヘルマン・ミュラアと共に巴里の講和會議に副使として行つた人である。

一は黨中の右翼であり、他は左翼に屬す、氷炭相容るゝことの出来ないのは理の當然である。然る

に強ひて一時の苟合的聯立内閣を組織したことは、獨立黨にとつては大失策であつた。

世界廣しと雖も此の内閣ほど、變態不可思議の内閣はなかつた。政府の右翼は、内閣を飽迄も維持しやうとし、政府の左翼はこれを顛覆しやうとして努めた。

殊に獨立黨（少數黨）は、戰爭中よりして、多數黨（社會民主黨）の政策に、熱罵と憎惡を浴せかけてゐたのである。これが、協同して、一つの政府を支持しやうとすることは、絶対に不可能といはなければならぬ。

モスカウの政府に對して好感を有する左翼は勞働者、兵士および農民會議を要求した。

然るに、此の勞農兵會議の會員は、皮肉にも大多數は社會民主黨であつた、そこで、左翼は此の會に満足することが出来ないで、革命的勞働者會議の既會を要求した。

一九一八年のクリスマスの前に開かれた獨立社會黨の大會は、スバルタクス一派の急進的な施設を否定したが、スバルタクス一派は、何等その主張を變へやうとしないので、獨立社會黨の幹部は、彼等に引づられて行つた形で、終に、聯立内閣の閣僚たることを辭した。

八 兩派血で血を洗ふ

ところが此處に、奇妙なことが起つた。それは、ベルリインの警視總監アイヒホルンが辭職を拒否したことである。此のアイヒホルンは、獨立社會黨員であるから、ハアゼ以下の獨立黨幹部が辭職した以上は、當然辭職すべき筈のところ、彼は頑として總監の職を辭しなかつた。

茲において、社會民主黨は武力によつてこの地位を奪はんとし、アイヒホルンと其の一派は武力をもつて、これを渡さじと抗争したのである。それは一九一九年の一月の初めに起つた兩派の血闘であつた。（「アレキサンダア廣場」及び「リイブクネヒト」参照）

筆者がベルリインに入つたのは同じ年の二月であつて、此の兩派の争つた北ベルリインのアレキサダア廣場の家々及び女神の立像には、滲漉たる彈痕が、まさしくとありし日のことを偲ばしてゐたのである。

當時、カウツキイは兩派の間に仲介者として立つたのであるが、其の斡旋にも拘らず兩派を調停することが出来なかつた。

獨立黨員とスバルタキストは聯合した。此の兩派に對して、臨時政府の陸相ノスケが、舊軍隊を率ゐて闘つた。

激しい闘ひの後、左翼は退却した。アイヒホルンは飛行機によつてハノオフアに逃走した。

此の闘争における最も悲惨な犠牲は、ローザ・ルクセンブルグとカール・ライブクネヒトであつた。
 (「ライブクネヒト」参照)

其の後、スバルタキスト及び獨立黨は、屢々復讐しやうとしたが、武器彈藥の手に入らぬために失敗した。けだし、政府は此の騷擾の後、舊兵士又は労働者の手から武器を取りあげたからである。上述の如き騷擾を避けて、エーベルト政府は一九一九年一月憲法制定議會をワイマアに召集し、社會民主黨は其議席の絶對多數をしめた。

此の議會に獨立黨から代議士として送られた人々は、ハアゼ、ドイツトマン、チイツ女史以下約二十名であつた。

政府はプロイス博士の立案した憲法案を提出し、その協賛を求めたが、それは修正後通過し、次いで大統領の選舉に移り、フリッツ・エーベルトは、其の第一次の大統領として選ばれた。

やがてドイツ國民の受難の日が近いて來た、それは、聯合國から、提出せられた賠償問題——いな平和條件に對する態度であつた。

時の内閣は、飽くまで此の提案を拒否せんとしたが、それには、獨立黨が承知しなかつた。政府にとつて二十餘名の獨立黨代議士は怖るゝに足らなかつたが、五百萬人の背景は、怖るべきものであつた。

た。

シャイデマン内閣は辭職した。パウアー内閣が組織された。パウアーはドイツ労働組合の権者である。労働組合を背景とするパウアー内閣は、必ず此の難局を打開すると思つたに、それは實に意外でもあつた。彼等の力をもつてしても、議會を切り抜け得なかつたといふことは。即ち、大衆が平和條件拒否に反對したといふことは。

終にヘルマン・ミュラアが内閣を組織することとなつた。ミュラアは嘗つてハアゼの下にあつて、パリに使用した男である。

然し、ミュラア内閣の政綱は前内閣とは全く異つてゐた。すなはち、彼は調印を應諾すべき政綱を提げて立つたのである。——即ち労働階級、無産階級は、充分の流血をやつて來たから、これ以上、無産階級の血を流さない、——といふのが、彼等の政綱であつた。

かくしてミュラアはランツベルグと共に、ヴェルサイユに向つた、そして、所謂ドイツ國の屈辱條約に調印したのである。其處の鏡の間においては、プロツクドルフ・ランツァウ伯が一度席を蹴つて歸つて來たのである。

75
 ハアゼの使命は未だ終つた譯ではなかつた。少數社會黨の威力を此處までも持つて來るまでに彼の

努力は、絶えず拂はれてあつた。
 残るところは、彼がモスカウの第三インタナショナルに行くであらうか、どうかといふことであつた。

間もなく、即ち詳しく云へば一九二〇年六月の國民議會召集の日が来た。此の選挙において獨立社會黨は、五百萬票を得た。然るに同じ期間に社會民主黨は、千一百万票から、五百萬票に下つてゐた。これによつて見るも、當時獨立黨が如何に人氣を得てゐたかを知るに足るではないか。けれども、此の人氣の一面には、社會民主黨、即ち、獨立黨の敵黨ともいふべきものが、其の政策の失敗から、如何に人氣を失つてゐたかが反映されてゐたのである。

社會民主黨と、獨立黨と、スバルタキストと、此の三黨の前に、「第三インタナショナル」といふ標柱が建てられてあつた。三黨の果して、いづれが此の標柱に向つて進むべきか。
 問題が、三つの黨を、分裂の儘に残して居るうちにハアゼは一兎漢のために、ペルリンにおいて暗殺された。

(註) ハアゼの項を参照。

ライブクネヒトと

ルキゼンブルグ

—

カアル・ライブクネヒトの歩んだ道は荆棘の道であつた。

彼は彼の父キルヘルムの歩んだ以上の險道を辿つて来た。彼自身の父の穩健な主張にさへも反對して来た。

一九一四年の十二月、軍費案に反對の一票を投じて以來、彼は、完全に孤立してしまつた。彼は黨から除外された。けれども、黨の少數者は彼と行動を共にした、これが後の獨立社會黨となつた譯である。

けれども戦時中、彼も亦徵集されて兵役に従はなければならなかつた。休暇を得て、彼は一九一六年のメエデーの頃伯林にあつた。その年の記念すべきメエデーの夕暮方、彼は、自ら作つた非戰主義

宣傳のチラシを撒き散らしつゝ、ポツツダム廣場で演説した。これによつて彼は叛逆罪として捕縛され、其の年の八月、彼は四年の徴役及び六ヶ年の公權停止の宣告を受けて入獄した。

二年の後、バアデンのマックス親王を首相とする社會黨との聯立内閣が組織された時、彼は曩日の同志であり、當時の閣僚であつたシャイデマンの命によつて赦免された。

彼は直に、戦争の休止及び革命の宣傳に狂奔した。そして終に、あの十一月九日が來たのである。彼の味方は捷利を得た。彼はポツツダム王宮に入り、其の夜はキルヘルム二世のベットの上に眠つた。

ルツカウの獄にあつた日が思ひ出されて、彼の感慨は盡きなかつた。

けれども、彼は新なる理想に向つて進んだ。即ちそれは「獨逸ボルシエキズム」の實現であつた。彼が閣僚の一員たるべく勸説されたにも拘らず、斷乎として、それを退けたのは、其處に彼の新たな道が布かれてあつたからである。

獨立黨の警視總監アイヒホルンの罷免が發表されたのは、其の翌年の一月五日（日曜日）であつた。リイブクネヒトは、嘗つて非戰演説を試みたあのチイア・ガルトンの戦争並樹道で政府反對の大演説を試みた。日曜日のことであるから、プロレタリアの大部分が彼の前に堵列をなして、拍手を送つた。此の演説後、彼は群衆の先頭に立つて、ブランドブルク門に入り、そしてウンター・デン・リン

デンにおいて再び演説した。

彼は労働者の武裝と「赤衛軍」の組織に就て説いた。

行列は、シュプレー運河を過ぎ、王宮前を通つて、北へ、北へ、警視廳の方に進んだ。そして、其處のバルコンから、彼は三たび労働者の武裝を説いた。

月曜日と火曜日は實に、彼の生涯において重大な日であつた。彼は警視廳において、アイヒホルンと共に、政府軍と闘ふべき策を講じた。

火曜日の午後には、ブランドブルク門において、政府軍と、彼のスバルタキストが、擲弾と機關銃で互に砲火を交へた。互に一捷一敗があつた。

さうした闘ひの休止の間に、彼は俄作りの演壇に立つて演説した。彼は、其の敵として闘ふ労働軍を怖れなかつた。彼の演説には、敵も味方も一様に耳を澄した。彼に對して一發の彈丸も放れなかつた。

その火曜日は終日、スバルタキストと、ノスケに率ゐられた政府軍が、街上の到る所で闘つた。

水、木、金曜日まで市街戦は繼續された。けれども政府軍は、漸次に組織立つた攻勢を取つた。反對に、スバルタキストはじり／＼に退却しなければならなかつた。

日曜日(にちようび)が再び(また)来た。ライブクネヒトはノイキョルンに隠(かく)れてゐた。

月曜日(げつようび)も、同じ所(ところ)に隠(かく)れてゐたが、突然(とつぜん)一つの悲報(ひほう)が彼の手(て)に落(お)ちて来た。それは、彼の妻(さい)子が拘(こ)引(ひ)されたといふことであつた。彼はそれに就(つ)て詳細(しんじゆ)を知らうとしたが、何等(なんら)の手掛(て)りも得(え)なかつた。親友(せんととも)達は、彼(かれ)を勸(すす)めてキルマアドルフの親戚(せんとく)の許(もと)に行(い)かした。其處(そこ)で彼はローザ・ルキゼンブルグと落(お)ち合(あ)つたのである。

ライブクネヒトは、其處(そこ)で「ローテ、ファネ」の最後(さいご)の論文(ろんぶん)を書(か)いた。

一月十五日(いちがつじゅうごふ)、即ち水曜日(すいようび)は彼の死(し)の日(ひ)であつた。其(その)日(ひ)の新聞紙(しんぶんし)には、初號大(しよごうだい)の活字(くわつじ)で、次(つぎ)の如(ごと)き標題(みだし)が掲(か)げられてあつた。

「ライブクネヒトは逃走(たうそう)せんとして銃殺(じゆうさつ)され、

ローザ・ルキゼンブルグは、群衆(ぐんしゆ)のため殺害(ころ)さる！」

此(こ)の標題(みだし)には、彼の敵(てき)も味方(あか)も眼(め)を見張(み)張(ま)つたのである。

それは一月十五日(いちがつじゅうごふ)の夕暮(ゆふぐれ)の事(こと)であつた。伯林郊外(べるりんかうがい)のキルマアドルフの或(ある)家(いへ)に密偵(みつてい)が入(はい)つて行(い)つた。キルマアドルフは伯林(べるりん)の中心(ちゆうしん)を離(はな)れた所(ところ)でフリードナウや、ステエグリツ同様(どうよう)に街(まち)も繁華(はんわ)であり、且(かつ)つ小(こ)さな家(いへ)が密集(みくしゆ)して居(ゐ)るので、身(み)を隠(かく)すには全(ま)く持(も)つて來(き)の場(ば)所(じよ)であつた。其處(そこ)に前記(ぜんき)の如(ごと)く

二人(ふたり)は一時(ひととき)身(み)を隠(かく)してゐたのである。

軍事警察(ぐんじけいさつ)の探索(たんさく)が可(か)なり嚴重(げんじゆう)であつたにも拘(こ)らず、ライブクネヒトとルキゼンブルグは餘(あま)りに不(ふ)用意(ようい)であつた。密偵(みつてい)が彼等(かれら)のアバアトマンに入(はい)つて行(い)つた時(とき)、密偵(みつてい)は其處(そこ)の客間(きやくま)に、カアル・ライブクネヒトの肖像(せうしやう)の掛(か)つて居(ゐ)るのを見(み)た。それが動(うご)き難(がた)い證據(しやうこ)の一つとなつて、二人(ふたり)は其(その)場(ば)から拘(こ)引(ひ)されたのである。

當時(たうじ)、軍事警察(ぐんじけいさつ)の本部(ほんぶ)は、シヤアロツテンブルグのエデン・ホテルに置(お)かれてあつた。二人(ふたり)は其處(そこ)へ送(おく)られることとなつた。シヤアロツテンブルグと云(い)へば、今(いま)、伯林繁華(べるりんはんわ)の中心(ちゆうしん)が移(うつ)りつゝある隣接(りんせつ)町(まち)で、東京(とうきやう)でいへば、新宿(しんじゆ)と云(い)つたやうな町(まち)である。其處(そこ)には、相當(きやうたう)の劇場(げきやう)もあり、ホテルもあり、レストオランもある。東洋風(とうやうふう)な建(た)物を模倣(もはう)した有名(ゆうめい)な動物園(どうぶつえん)もある。其(その)動物園(どうぶつえん)の近(ちか)くに聳(そび)えたる宏(ひろ)莊(じやう)な石造(いしづくり)の建(た)物(ぶつ)。それがホテル・エデンである。哀(あは)れな捕(とら)はれの身(み)となつた二人(ふたり)は、其處(そこ)へ送(おく)られたのである。

其處(そこ)から、モアピットの未決監(みけつかん)は程遠(ほどほ)からぬところに建(た)つてゐる。薄暗(うすくら)い、舊(ふる)い大(おほ)きな建(た)物は、吾(われ)吾(われ)をして舊(ふる)時の鍛冶橋監獄(かじしきん)を思(おも)ひ出(だ)させる。さうした陰惨(いんさん)な氣持(きもち)に襲(おそ)はれる建(た)物の前(まへ)に、筆者(ひんしゃ)は幾度(いくど)も立(た)つて見(み)たことがある。二人(ふたり)は其處(そこ)へ送(おく)監(かん)される筈(はず)であつた。

ライブクネヒトが自働車(じどうしゃ)に乗(の)せられやうとした時(とき)、背後(はいご)から騎兵(けいへい)のルンゲが、突然(とつぜん)銃(じゆう)の臺尻(たいしり)で彼の

頭腦を打つた。ライブクネヒトは昏倒した。搦打が続けられた。自動車は彼の死骸を載せて、シヤア
 ロッテンブルグの街路へ出た。そして死骸を、あたりの街上のうち棄てて駛り去つた。

さうした悲劇が、秘密の中に行はれたとも知らないで、ローザ・ルキゼンブルグはホテルの表玄関
 に出た。フォーゲルといふ中尉が、彼の女の後について出た。再び騎兵のルンゲが、銃の臺尻でもつ
 て、ローザの頭腦を打つた。彼の女は聲もたて得ないで其處に仆ふれた。フォーゲル中尉は、彼の女
 を其の儘自動車内に搬んだ。自動車の中で、中尉は拳銃でもつて、更に彼の女の額を射つた。

ライブクネヒトの死骸は、氏名の不明なものとして共同葬場に搬ばれたが、それがライブクネヒ
 トに相違ないと言ふ者が出て来たので、急に大騒ぎとなつた。

ローザの方は、針金で縛られた儘、シユブレ運河に投げ込まれた。そして、數ヶ月間其の死體は
 発見されないであつた。

かうした殘虐に就ては、ライブクネヒトが殺されない前に、それまでの騷擾を批判した彼れ自身の
 文字を以て、これに當てはめることが出来やう。

「佛蘭西のブルジョア階級は、一八四四年六月及び、一八七一年五月の虐殺を、自分自身の階級
 の中から着手しなければならなかつた。——獨逸のブルジョアは自ら勞する必要を見なかつた。——
 社會民主黨は醜劣無比、殘忍卑陋の行爲を遂行した。」

二

ローザ・ルキゼンブルグは、舊露領ポーランドのサモスに住つて居た貧しいユダヤ小商人の娘であ
 つた。幼い時から、非常に貧しい生活をして居たが、早くからローザの非常に聰明な資性を認めて居
 た両親は、如何に苦しい思ひをしても、彼の女にだけは立派な教育を受けさせやうと思つてゐた。

彼の女は小學校を終へて高等女學校に入つたが、もう其の時さへ卓抜な才分が發揮された。そし
 て其頃から、彼の女の社會主義に對する傾向が現はれて来た。

十八歳の時、彼の女は瑞西に赴いた、そしてチューリッヒの大學に入つた。チューリッヒとジュネ
 ヴはロシア革命と最も關聯のある土地であり、レーニンや、コロンタイ夫人も、これ等の土地に其の
 流竄の幾年かを送つたことがある。其處の大學に於て彼の女は、自然科學と數學を研究した。數學の
 優れた天分が如何に彼の女の天分を、短時日に完成させたかといふことは、一般に驚異する所である
 が、彼の女の數學的知識が、其處に在學中涵養されたことは、否み難い事實である。

元來、チューリッヒは瑞西に於ける獨逸人系の都會であつて、社會主義的思想は、土地の勞働者に
 も可なり行き亘つて居た。彼の女が、さうした土地に居た結果として、わづか二三年の中に大學生活
 を止めて、社會主義運動に身を投ずるに至つたことは、決して不思議ではない。

當時、ポーランドには、國民的なポーランド社會黨が組織されて居たが、ローザはそれに反對して純然たる社會主義者の立場から、ポーランド社會民主黨を組織した。かうした運動は單にロシア官憲に脱される許りでなく、獨逸の官憲にも脱されるので、迂闊に獨逸に入つては、ロシア官憲に引渡される心配もあつたから、彼の女は、或る獨逸人と形式的の結婚を行ひ、獨逸人としての國籍を得てしまつた。

ローザが、ベルンスタインや、ヒルファディングや、カウツキイなど、理論家の多いドイツ社會民主黨内に於て、一頭地を抜いたマルクス學者であつたことは、黨内でも有名なことであつた。されば社會民主黨が伯林に「社會主義學校」を創立した時、彼の女はマルクス派經濟學の講座を受け持つたそれ等の講義が後に、有名な「資本蓄積論」となつて現はれたのである。

獨逸における社會黨の態度はいつも消極的であつた。總同盟罷工に關する黨内部の意見の如きも、これをローザのそれに比すれば可なり穩健なものであつた。彼の女は黨に入つて後二十年間、絶えずライブクネヒトや、其他の左翼分子と共に積極的行動に出でやうと努めた。いつの社會黨大會に於ても、彼の女の雄辯を聞かない例がなかつた。或る時の如きはシャイデマンを向ふに廻はして、痛烈な熱辯を揮つたことさへある。

總同盟罷工に關する彼の女の意見は可なり徹底したものであるが、茲にはそれを省略しなければならぬ。其の意見はカウツキイの「總同盟罷工論」の中に詳細に紹介されてあるし、彼の女の「總同盟罷工」と獨逸社會民主黨」の中にも委しく論ぜられてある。

一九一三年のイエナにおける社會黨大會に、ローザ一派の左翼派は、政權獲得の手段として政治的總同盟罷工を是認する決議をさした。それは非常な反對があつたにも拘らず、ローザの熱辯により、よく大會の空氣を支配し得たからである。

三

歐洲戦争が来るであらうといふ豫感は、何人の頭腦にもあつたと見えて、是より前、一九〇七年のストットガルトの國際社會黨大會には、ベエベルとジョーレスが、戦争防止の手段として、總同盟罷工に就いて論じた。けれども、當時の大會は、總同盟罷工を單なる戦争防止の「可能な武器」として認めただけである。此の會でレーニンとルキゼンブルグは、決議を修正するために、非常な努力を試みたところが一九一四年七月二十九日の國際社會黨大會は、明かに戦争防止を目的として開會したものである。けれども、此の大會も、終に戦争を防止し得ずして、同年八月一日には、恐ろしい世界大戰の幕が切つて落された。

同年同月、獨逸社會民主黨の代議士及び幹部連は、軍事費に關する黨の態度を決定するために、重大なる會議を開いた。其の結果、此の案に反對の意圖を表白したものは、首領のハアゼを初めとしてリイブクネヒト、カウツキイ、ルキゼンブルグ、チエトキン等、後年獨立社會黨となるべき十四名であつたが、軍事費に對する賛成者は七十四名の多き上つた。

八月三日の議會に於て、ハアゼは、自分自身では反對意見を有してゐるに拘らず、黨の命令により又黨議により、賛成演説をしなければならなかつた。そして、リイブクネヒトさへも賛成の一票を投じなければならなかつた。

けれども、其の年の十二月二日に、第二回の軍費案が票決されることとなつた時、リイブクネヒトは唯だ一人これに反對を表し、社會黨員中の十五名は棄權した。これから以後左右兩翼の態度は可なり鮮明なものになつた。

是より以前、ローザ、クララ・チエトキン、メエリング、リイブクネヒト等の間に、雜誌「インタアナショナル」發行の相談があつた。けれどもこれは創刊と同時に發行を禁止された。又同じ頃、チエトキンは、巴里から歸つて後、二十年の間監禁して居た「グライハイト」社から追はれて投獄された。尙ほこれより幾、一九一五年二月、ローザは兵士虐待の事實に對する攻撃演説をしたために、一ケ

年の禁獄に處せられたが、フランクフルト法院に於ける彼の女の答辯記録は、彼の女の生涯における最も生彩あるものとして、長く労働者の間に讀まれてゐる。

其の年の十二月に、第四回軍費案が、議會の議題に上つた時、突如としてハアゼが反對意見を述べた。其の結果、社會民主黨内には大混亂が起つた。そこで、シャイデマンが、更めて軍費案賛成演説を述べた。そして、ハアゼ、リイブクネヒト、レデブール、デ井ツトマン等の十八名は、社會民主黨から除名され、茲に獨立社會黨なるものが生れた。(ハアゼの項参照)

これで、社會黨の左翼が分離した譯であるが、尙ほ此の外にも「スパルタクス團」と稱する共產黨の一派がリイブクネヒトとルキゼンブルグにより秘密に組織された。それは一九一六年の一月のことであつた。

一九一六年二月にローザは出獄した。然るに其の年のメエデーに際して、労働者連は、戰爭反對の大示威運動を試み、リイブクネヒトは、大衆に向つて、「即刻的平和、政府倒壊」を叫んだために、其場から拘引されて軍法會議に附せられ、叛逆罪として懲役四ヶ年の宣告を受けた。翌年、ローザとメエリングが同じ罪で下獄した。

ローザとクイブクネヒトが獄中に在る間に、世界の形勢は一變した。一九一七年の三月には三月革命が起り、十一月にはボルシエキの革命が起つた。

プレスト・リトヴスキの講和はボルシエキの政府に取つては屈辱であつたが、然し獨逸が此の講和により戦局を轉換すべしと空想したことは、無慘に裏切られた。獨逸國內には、既にボルシエキと獨逸労働者の握手があり、ヨッフエの伯林における活動があつた。

一九一八年の十月、内閣はバーデンのマックス親王により組織され、シヤイデマンは、其の閣員の一人になつた。

そして前記の如くその年の十月二十四日、ライブクネヒトは釋放され、次でローザもまた釋放された。

十一月の革命は捷利を得た。然し獨立黨一派の分裂後、翌年のアイヒホルンの騒擾によつて、ローザの悲劇の幕が降された事實は前述の通りである。

ローザの死骸は長い間不明であつた。筆者が伯林に入つて一ヶ月目に、彼の女の腐爛した死骸がシユブレーの運河で發見された。

壯嚴な葬儀が、此の犠牲者のために行はれた。世界の労働者の代表が凡て弔辭を寄せた。ソヅキエ

ツト露西亞、ソヅキエツト匈牙利の二國がその代表者を送り棺上に花環を献げた。

アレキサンダア廣場

其處には夥しい群衆の潮が、歩道に沿うて流れた。其の中の一部はチイツ百貨店の大きな建物の中に吸ひ込まれて、また其處の他の口から吐き出された。北伯林に歸りを急ぐ勤め人達と、夜を世界の女達の流が其處でぶつかつて、又靜かに別れて、かれら各自の道を急いだ。

世界は平靜に見えた。其處には、伯林の主人公が變つたらしい様子は少しも見えなかつた。けれども、アレキサンダア廣場を挟んで、チイツと相對した伯林の警視廳には、昨日の主人フォン・オツペンは姿を見せなかつたのである。

伯林警視廳の主人公として、十ケ年もしくは十二ケ年威力を揮つたオツペンは何處へ行つたか、誰もが彼の行衛を知らなかつた。

幾百、幾千のプロレタリアが、彼の鐵腕の下に喘いだことであらう。幾百、幾千の無産者の兒達が

彼の主宰するあの憎むべき巨大な赤練瓦の建物に憎惡の眼と罵詈を投げつけたことであらう。

伯林を焼けよ！ 其の前に此の建物を焼き拂へとは、一度び其處の薄暗い地下室の拘留場へ入れられた凡ての無産者達の憤りの聲であつたらう。

全く、伯林の警察ほど、無産者の呪咀の標的となつたものはない。そしてまた伯林の主人であるオツペン程、憎まれたものはないだらう。

伯林の警視總監は、ドイツ帝國の首都における單なる警視總監ではなかつた。彼は、伯林の知事であつた。彼は伯林の總督であつた。彼は伯林の主人公であつた！ 彼は、帝都の安寧を護るといふよりもむしろ、帝國の安寧と秩序を護る職掌を有してゐたかとさへ思はれた。

總監室の電話は、カイザアの宮殿とも、衛戍總督とも、近衛の聯隊とも、陸軍の大臣室とも、いかなる凡ゆる帝都の重要な官廳と、直接に聯絡を取つてゐた。

もしオツペン總監が、小さなボタン一つ押せば、中央交換局の中央部に、さつと光線が流れる。すると、倏忽の間に、數千の警官がアレキサンダア廣場へ、徒歩で、乗馬で、武裝して集る。——つまり總動員といふやつが行はれるのである。此のアレキサンダア要塞とも云はれる區域の中に、總監は王坐を占めてゐる。一百六十三といふ多くの室で、事務を執る警吏達が、彼れオツペン總監の意の儘に、器械の如く、機械人形の如く動く。

總監の接見室には十九枚の巨大な肖像が懸つてゐた。それは、歴代の警視總監達の肖像である。彼等は、死して後も、此のブルジョア権力階級の要塞に亡霊の如く執拗に、魂魄を止めやうといふのである。

初代の警視總監グルナアのリトグラフはもう色が褪せてゐる。彼は一八〇九年といふ日附を其の肖像に残してゐる。オツペンは獨逸帝政時代がもつた最後の總監であつた。彼は其の肖像を、先輩達、先驅者達と並べる光榮を得ないうちに、十一月九日の革命が勃發した。労働者の大群が、此の大要塞を目掛けて殺到した。彼は、身をもつて遁れねばならなかつた。

二

社會主義者としての大警視總監が現はれた。それはエミール・アイヒホルンであつた。

アイヒホルンは疾風怒濤に乗じてやつて來た。彼の去つたのも、決してたゞの去り方ではなかつた。世界の警察史の上に、彼れの名は確かに異様な響を残したであらう。吾々は、短時日の間、アレキサー・ダグア廣場の主人公であつた此のラディカリストに就て記さねばならない。

警視總監と云へば、誰れしもが、赤ら顔の、でつぶりした官僚系の人物を想像する。ことに、舊獨逸の官服は、さうしたタイプの人物に相應してゐた。

ところがどうだ！

アイヒホルンは平民だ！ 役人らしいところは、その頭のでつべんから足の爪先まで見出されさうもなかつた。瘦せた、ひよろ長い、頬骨の出た中年の男で、其の奇麗にオールバックにした白髪交りの髪と、びんとはねた髪に少し許り掛け値をつけさして見たにしても、其處らの無産階級のおやちと變つた何等特異の點を見出し得ない。

けれども、彼が初めて、語つた其の抱負は、流石に、平民總監として莫迦にならないものがあつた。「諸君よ、私に多少の餘融を與へて下さい。そう一度に總ての事はやつて行けない。今後、巡察もしくは警官と云た稱呼は、保護官と改稱されます。在來、公衆の中に、幾度も不祥の血を流した帯剣は一切廢棄されるでせう。賣春婦の取締制度も改革されるでせう。刑事警官制度も、組織の變更を見るでせう。諸君、私は政務官です。私は社會主義者です、左翼の——獨立社會黨です。人民の利益を尊重するといふこと、それが私に取つて唯一の重大なことです。伯林の市民をして、私に信頼せしむるといふこと、それが私に取つて最大の希望です。勿論——伯林の市民は、世界から對多の批評を受けてゐるあのロシアのボルシエキストに就て語つてゐます、勿論、私はボルシエキストではないのですが、然しボルシエキストを、さう莫迦にしてはなりません。ボルシエキストは、世人が非難する程ではない筈です。……前に申した通り、警官は、帯剣を廢棄しなければなりません

さうすれば、伯林市民は私を信頼するでせう。』

アイヒホルンのプログラムは、後に彼の後継者として、多数社会黨の中から、現はれた第二代の社会主義の總監オイゲン・エルンストが考へてゐたものよりも確かによいものであつたに相違ない。けれども、彼はその凡てを行ふだけの時間を有たないで去つたのである。

アイヒホルンは、どんな経歴をもつてゐたか。

彼は、無政府共産主義者として知られたヨーハン・モストが、一度び大衆の人望を博したケムニツツ（サクソン）のレエルスドルフに生れた。彼がモストの影響を受けてゐたことは、止むを得ないと云はねばならない。

彼は普通の小學教育を受けた後、無産者の兒供達が通過する平凡な経歴を踏んで来た。そして、後にドレスデンにおいて新聞編輯者となつた。間もなくカルルスルーエ（バアデン）市の労働黨の書記として招聘された。

南方ドイツ人は最も温和な人達である。其處では、ラディカリズムは歓迎されない。彼は、バタのやうに刺戟のないものになつてしまつた。

彼は次第に好地位を得た。後にマンハイムにおいて、再び記者となり、更にバアデン侯國領議會の

議員となつた。これが、彼を中央の政界に乗り出さす動機となつた。そして中央政界、ことに社会黨と接觸を保つたことが、彼を前よりも遙かに過激な傾向に導いた。

穩健なバアデン黨は、一九一二年の總選舉に際して、もはや彼を候補者として立たしめなかつた。彼は憤然バアデンを去つて伯林に移つた。

彼は伯林の社会民主黨の新聞社に、徴々たる地位を求めて、陰忍した。けれども彼は認められた。リイブクネヒト、リユーレ、デ井ツトマン、レエデブル等が彼を歓迎した。

獨立社会黨が組織され、其の機關紙が發行された時、彼は、その編輯長に推された。

ロシアとの單獨講和後、駐獨ロシア大使としてヨッフエが伯林に來た。彼と其の妻は、ヨッフエと親交を結び、ロスタ通信の通信を引受けた。

ヨッフエと結合したことが、アイヒホルンをしてボルシエキキの方に一步を進ましめた譯である。

帶劍を廢棄して、伯林市民の信任を得やうとした彼は漸次に警視廳を赤衛軍の本部たらしめやうとした。

一九一八年のクリスマス前の前に、政府の首班であつたハアゼが去つて、聯立内閣の中から獨立黨の

分子の凡てが、首領と去就を共にしたに拘らず、アイヒホルンは、警視廳を去らなかつた。社會民主黨内閣は、堪り兼ねて彼を警視廳から放逐しやうとした。

忽ちアイヒホルンの一指が動いた！。それを合圖に、スパルタクストが一齊に蹶起した。

三

北伯林の無産階級、ことにスパルタクストと聯絡をもつ獨立黨の同志は、街上の到るところに防塞を作つて政府軍と闘つた。

二ヶ月前には、共同戦線を張つて、舊ドイツ政府の覆没を謀つた人達が、再び伯林の街上に血を流すに至つたことは、遺憾の極みであつた。

けれども、左翼は無勢であつた。

アイヒホルンの一派は、漸次に其の防壘を奪はれた。彼等は其の最後の逃げ場を警視廳内に求めたのである。

アレキサンダア廣場を挟んで、政府軍とスパルタクストが闘つた。廣場に立つ女神の像に、機關銃の弾丸が叩りをあげて走つた。女神は、その花岡石の臺石に幾つとなく弾丸を受けておのゝいた。

双方に相當の死傷者があつた。けれども、アイヒホルンの一派は充分の弾薬をもたなかつた。

アイヒホルンは、終に身をもつて脱出した。そして漸くの間、ハノオファに隠れてゐた。

數ヶ月の後に彼は捕縛されて、法廷に引き出された。けれども、其の時、彼は殆ど歩行もなし得ない程、弱つてゐた。杖に縋つて法廷に現はれた、アイヒホルンの姿を、凡ての人が同情の眼をもつて見た。

アレキサンダア廣場の主人公は幾度も變つた。けれどもアイヒホルン程痛快な、毛色の變つた警視廳監は現はれなかつた。

私は、あの廣場を通る度に、いつも女神の臺石に残された弾痕を撫でて、徘徊去る能はざるものがあつた。

クララ・チエトキン

一

初めて彼の女を見たのは一九一九年の初めであつたと思ふ。それはフリードリッヒス・ヘエンの墓地で、ローザ・ルキゼンブルグ女史の葬儀の行はれた日であつた。

獨逸のあらゆる労働團體から贈られた花環がかつぎ入れられて後、十数名の水兵達によつて、ローザの棺は墓穴に近く運ばれた。

棺が置かれた時に、水兵二人が赤旗をもつて棺を蔽うた。

水兵たちの歌ふインタアナシヨナアの歌が、一頻り廣大な、静寂な、墓地に響き亘つた、それが終ると、雪のやうな白髪を無雑作に束ねた一人の老婦人が現はれた。彼の女は南方の獨逸人に見る溫和な容貌の持ぬしであつた。彼の女は質素な緑色がかつた服を着て居たかと思ふ。彼の女は數千の同志を前にして弔辭を述べた。

……吾が小きロザは今、吾々の前に横つて居る、彼の女の形骸は滅んで行く、然し彼の女がもつた所の革命の精神は、吾々同志萬人の胸に生きて居る。然り、ロザは今なほ生きて居る、私の胸の中に、そして兄弟よ、あなた方の胸の中に。

棺を圍んで居る同志の中から啜り泣く聲が聞えた。急にそれが諸方に傳波した。そして、ここでも此處でも同じやうな歎歎の聲が聞え出した。

私は其の日の光景を、今でも忘れることは出来ない、私の生涯に於て、其の日は忘れられない記念の一日であつたから。

其の翌年であつたかと思ふ、北伯林に於て共産黨の演説會があつた時、私は二度目に彼の女を見た其の時、彼の女は十六時間の汽車の旅を終へて、すぐと演壇に立つたのである。それは、とても六十を越した老婦人とは思はれない元氣であつた。

千九百二十年の秋かと思ふ、私は片山潜氏から送つて來た書面を彼の女にとどけるために、伯林の議會宛に手紙を出して、面會の都合をきいて見た。

間もなく返事は來た、然しそれは南獨逸に於ける彼の女の自宅からであつた。

守田君！ あなたの手紙は恰度私が伯林を立つた後で議會に着きました。そして、それは轉送されて私の手許に達しました。米國に於ける片山さんの近況を知り得たことは、私に取つて喜ばしいことでした。日本に於ける同志の近状は如何ですか、いづこの國に於ても吾々の同志が、非常な壓迫の下に運動の自由を得んとして、健闘しつゝあることは、喜ばしいことです。(中略)

一九〇四年のことです。アムスタアダムの國際社會黨大會に於て、日露交戦中の日本と露國の代表者たる、片山及ブレハノフの二君が握手された瞬間の偉大な光景は、今尚ほ私の眼の前に髣髴として居る心地です。(中略)

どうか日本の同志諸君に宜しくお傳へを願ひます。

此の手紙はタイプライターでたゞ書いてあつた。そして、其の末尾に彼の女の署名がされてあつた。

私のロシア行の計畫は巧くゆかなかつた。其の中に私の金はなくなりさうになつた。一九二〇年のクリスマス日の日に、私はジュネヴから、瑞西の國境を越えて、ベルガアドに入り、マルセイユに着いた。私は其處で彼の女が、ラインの國境を越えて佛國に潜入して居る記事を読んだ。佛國の新聞紙は、獨逸軍の侵入よりも、より以上に此の老婆の潜入に對して驚いたらしく、何れも數段の記事を費し、

彼の女の肖像を、カシヤンのそれと並べて掲げて居た。

私の生涯に於て、私はいろんな革命家と會つた、長崎に亡命して居たロシアのラツセル博士のグループ、清國から亡命して居た張繼や章炳麟などの一團、その他瑞西に於て、獨逸に於て、澳太利に於て、匈牙利に於て、いろんな人達を見た、けれども、クララ・チエトキンだけは、いまでも忘れることができない。それ程、彼の女の印象は深かつた。

(註) 水兵は、獨逸革命の實行者であつた所のキイルの戦士達である。

二

一體クララ・チエトキンとは何人であるか。彼の女はその本名をクララ・ツンデル夫人と稱する。勿論ツンデルは結婚後の名前であつて、結婚前の名前はアイスナアである。

彼の女はサクセンのニイダウアアウに生れた、小學校を終へて、ライプツヒのスチルベツト女學校に入り、其處を卒業して後に女教師となつた。女教師としての彼の女は、幾多の社會的缺陷と不幸を目撃した。そして漸次に社會問題に對して其の眼を開いた。彼の女は非常に熱情的であり、そして又物事に對して憤懣の情を豊かにもつて居た。

當時社會主義者は、ビスマルクの社會黨鎮壓令の下に苦しんで居る時代であつた。さうした艱難に悩んで居る主義者の一團を見て、彼の女の感情は極度に動いた。彼の女は社會主義者の團體に加はつた。併しそれと同時に、彼の女は小學教師を罷めねばならなかつた。かうなつて來ると、彼の女は身の置き所がなかつた。そこで彼の女は巴里に赴き、ソルボンヌの大學に於て研學した。此の大學に於て彼の女は、露國の青年革命家オシツプ・チエトキンと相知り、そして相愛する間柄となつた。其の後二人は自由結婚をなし、兩三年の間、可なり困難な生活を營んだ。オシツプは其の後病氣となり、終に死亡した。二人の男の兒が、チエトキンに遺された。

オシツプが死亡し、そして獨逸に於けるビスマルクの政治的隱退後、社會黨鎮壓令が廢されたので彼の女は獨逸に歸つて來た。それと同時にスツツトガルト市の、社會主義の書籍商ハイナリツヒ・チイツが、彼の女に生活の資を給した。それは、ドイツ社會主義の婦人雜誌「デイ・グライハイイト」(平等)の編輯を彼の女に委託したことである。斯くして彼の女の生活に、稍々光明が射して來た。

彼の女はあらゆる困苦缺乏に堪へて來たにも拘らず、依然として美人であつた。これが爲め彼の女は畫家のオスカア・ツンデルから、モデルになつて呉れと懇請された。若い未亡人であつたチエトキンは、ツンデルに愛せられた。終に二人は結婚するに至つた。

ツンデルは可なり富裕な人であつた。彼はスツツトガルトの郊外デーガアロツホに別荘を持つて居

た。彼は美術家として、ダ・ヴィンチの如くあらゆる事に熟達して居た。畫家であり、塑像家であり詩人であり、そして又建築家でもあつた。彼は伊太利に於て非常に大きな水道工事を完成した。彼等は夫妻共に美術を愛好して居り、そして燃ゆるやうな知識慾をもつて居た。

彼の女の生涯に、新しい方向轉換が起つた。それは彼の女がローザ・ルキゼンブルグと相知るに至つたことである。

ルキゼンブルグは、冷靜な頭腦と、犀利な批評眼をもつて居る婦人であつた。之に反してチエトキンは、熱烈な爆發的な激情をもつて居る婦人であつた。二人の性情が互に相反することは、二人を結ぶ上に於て最も都合がよかつた。殊にルキゼンブルグは、露西亞系の波蘭人であつた。クララ・ツンデル夫人(チエトキン)は、其の死亡した良人を追憶せざるを得なかつた。そして、ルキゼンブルグとの交情が目を追うて濃密の度を加へたことは言ふまでもない。

二人は長い間「グライハイイト」の誌上に於て論じた。幾多の論文がチエトキンにより公にされた。婦人解放の問題、社會問題、婦人參政權問題、カアル・マルクス及び其著作に關する問題が繼續して論じられた。かくして彼の女は、ルキゼンブルグと共に、獨逸の社會主義者の間に於て、最も親善な婦人となつた。

舊社會民主黨の内部に於て、彼の女は、ルキゼンブルグ、ライブクネヒト、フランツ・メエリング

等と共に、常に最左翼に属した。

戦争が勃発した時、彼の女は社会民主黨の政策に賛同しなかつた。彼の女は依然として國際主義者であり、革命家であつた。

獨立社會黨が舊社會黨から分裂した時、自然彼の女も社會黨から離れて、獨立黨に赴かざるを得なかつた。此の結果、彼の女が多年編輯して居た「グライハイト」は、社會民主黨に奪はれてしまつた。そこで彼の女はライプツヒ人民新聞社より發行された婦女新聞を編輯した。

獨立社會黨員として彼の女は満足することが出来なかつた。彼の女は更に左傾した。そして秘密にスバルタクス團の團員となり、直接に革命運動に従事した。此のスバルタクス團は、ライプクネヒト及びルキゼンブルグの組織した共産主義の團體であつた。

一九一七年の初頭に、革命的書面の數千通が、獨逸の各方面に送られた、それは勿論無名の書面であつたが、其の仕事の背後にライプクネヒト、ルキゼンブルグ、アドラツス・ヨギツシエ及びクララチエトキンが潜んで居たことは言ふまでもない。

其の後、彼の女は「インタアナショナル」を發行したが、一二號でそれは發行を中止しなければならなかつた。そして彼の女は官憲のために拘引せられた。

革命後に、初めて彼の女は自由の身となつた。そして、ライプクネヒト及びルキゼンブルグが共産

黨を組織した時、彼の女も亦それに加はつた。

ルキゼンブルグとライプクネヒトの死後、共産黨は種々の變化を見た。パウエル・レヅキが、ルキゼンブルグを利用して、修正派に都合よき説をなした時、彼の女は躍起となつて、ローザの爲に辯護した。彼の女が勞農ロシヤの政策に全然賛意を表して居るのは、其の「モスカウへの道」を讀めば明瞭である。

獨逸革命後第一回の議員選舉に於て、彼の女は代議士に當選し、共産黨として其の議席を保つことが出来た。レヅキが黨を去つて後、共産黨を代表して國外に使ひするものは何時も彼の女であつた。一九二二年の早春、佛國に於て社會黨大會の催された時、彼の女は密かに旅行券なしに佛國に潜入した。佛國は此の一老婆の潜入を恐れて、あらゆる手段を以て彼の女を放逐しやうとしたが、彼の女はカシヤン其の他の保護の下に、秘密に佛國共産黨と合同し得た。

其の後、彼の女は露國に入り、片山潜氏と共に國賓として優待された。

獅子の鬣をもつた人

—其の日のホフマン—

アドルフ・ホフマンと云ただけでは、君は御存知ないだらう。けれども、あの日の血と火の伯林を語らうと思へば、彼の名はどうしても出て来なければならぬ。

彼は嘗ての獨立社會黨が有つた唯一の無遠慮極まる男であるが、其の辭、彼位な好人物もまた尠ないだらう。

私は彼をローザ・ルキゼンブルグの葬儀の時に見、そして革命後の最初の議會（一九二〇年）において、妙齡の少女ザンター嬢と席を並べてゐるのを見た。當時彼は餘り得意の時代ではなかつた。けれども、それより數ヶ月前のホフマンは阿修羅の如く荒れ廻はつた革命の老闘士であつたのである。まあ話の種に、私の語らうとするホフマンの人物を知つて置いてくれ給へ。

ペルリナア、タアゲスプラト紙の記者、ドンブロスキイは、彼を評して「獅子の鬣をもつた人」だと言つた。實に巧い批評だと思ふ。

彼は其の頃六十歳であつた、もし鬣をもつてゐるとすれば、それは雪の如く輝く白髮の鬣であつた筈だ。

ローザ・ルキゼンブルグの葬儀の日、彼は、クララ・チエトキンと共に悲痛なる弔詞を述べた。棺を圍む幾重もの堵列の後に、背延びして見てゐた私に向つて、一人の労働者が、

『ホフマンですよ、ホフマンが演説しますよ』

と言つた。實を言ふと、私もホフマンを知つたのは其の時が初めてなのだ。

白髮緒顔の偉大な老人、それはヘンリイ四世の髭と云はれる眞白な髭をもつてはゐたが、如何にも憎く氣のない好々爺らしい風彩であつた。

何を言つてゐたのか、低いベエスで、悲しみに漂ふ聲を遠くの私はよく聞き取り得なかつた。けれどもその時以來、私は、此の老闘士の偉を忘れることが出来ない。

彼のやることはいつも無鐵砲極る、其の無鐵砲は確かに彼の缺點には相違なかつたが、然し同時に又彼の長所でもあつた。彼の同志達は、此の老闘士のやり口を非難の眼をもつて眺めつゝ、なほ良く

寛怒して来た。なぜなれば、彼には虚偽といふものがなかつたからである。

世間には喫ぐやうにして戀愛を捜し求めて歩く男もあるが、ホフマンは、ストライキだの、社会改革だのを喫ぐやうにして捜して歩いた男だ。若し、新約全書の記者ルカの筆をもつて、彼の人物を評するならば、「兇兇を好む」といふのかも知れない。

戦前から、伯林第六區のモアビットと云はれる區から選出されて國會の代議士になつて居り、又プロシア議會の代議員でもあつた。

プロシア議會の議事録を閲覧する人が、もしホフマンの項をめぐつたならば、そこには絶えず議長から注意を受けてゐるホフマンの大膽無慮な演説速記録を見たであらう。所謂世の紳士達に取つては、彼は始末に終へない議員の一人であつたに相違ない。

二

彼はキルヘルム一世の還曆の誕生日、即ち一八五八年の三月二十二日に伯林に生れた。當時のドイツは攝政皇子の下に、新時代の曙光が東の空を染めやうとしてゐる時代であつた。

彼は最も穩健な兩親達の下にあつて、四ヶ所の小學校や、貧民學校で初等の教育を受けた。十四歳の時に商賣を見習ふために徒弟として出されたが、それは彼に適しなかつた。雜貨商、本屋のメエ

ツセンチャイ、ボーイ、その他に轉々して、後に記者となり、一八九〇年代の初めに、社會黨に籍を置いた。一八九三年から伯林で書肆を開き、そして傍ら著述の筆を取つた。

彼は無神論者としてモーゼの十誡の代りに、自己一流の十誡を作つた。何處の演説會でも、彼は無神論を振り廻はして、ブルジョア、資本家、權力階級を攻撃した。ところが不思議にも、彼の此の演説に魅了された一婦人があつて、彼に結婚を申込んで來た。ホフマンは喜んでそれに應じたが、此の婦人が、少し許りの持參金をもつて來たので、茲にホフマンは、生活上に稍々安易を覺ゆるやうになつた。

間もなく彼の執筆した狂激な小冊子（當時にあつては）が発行された。それは「社會民主主義は近づけり！」と題する各階級の女性に警告を與へたものであつた。

多少の名聲を博したことが、黨内において彼の地位を得させた。殊に、彼が凡ゆる場合に「反對者」として立つ態度が、スタットハアゲンや、ローザ・ルキゼンブルグに親交を結ばず機縁となつた。

一九〇四年の（スツットガルトの）國際社會黨大會のお茶の會には、彼は「小さなロヂイ」と云はれるルキゼンブルグ女史の手を取つて踊つた。他國の社會黨の代表者達とともに、その時は、我が加治時次郎さんも、夫人同伴で行かれた筈であるから、よく此の二人を御存知であつたらしい。又いまでも、その日の事を記憶にもつて居られることと思ふ。

一九〇四年から一九〇六年まで、彼は代議士であつた。其の期滿後、彼はプロシア議會の代議士として、議場の名物男となつた。

彼は演説の時にいつも mir と mich を間違つて話した、或るものは、これを評して洒落れて言つてゐるのだらうと言ひ、或るものは、無教育の結果だらうと言つた。ある時、演壇に立つて、彼が例の如く文法上の誤りを繰り返すと、一人の代議士は、隙かさず半聲を入れた。けれども流石に彼は、敵の武器を巧みに投げ返した。

「これは君達の貧弱なる教育制度のお蔭だよ」

三

世界大戦中、彼は絶えず積極的態度でもつて、所謂彼の「御用社會主義者」を攻撃した。獨立社會黨の中でも、彼は最も荒くれ男の部に屬する方で、劍とピストルで社會民主黨と闘つた一人である。彼は、「フオルウエルツ」を、實質的に占領しやうとして凡ゆる努力を試みた。そしてそれが失敗に終ると共に、彼は、新しいラディカル新聞を發行しやうとしたが、政府は斷じて許可を與へなかつた、止むを得ず「報知」(Mittellungs Blatt)と云ふ週一二回のもを發行してゐた。

一九一八年十一月九日、民衆の長く期待してゐた革命が伯林に勃發した。伯林の無産階級は一齊に起ち上つた。地平線は血に染められてあつた。アドルフ・ホフマンは、其の獅子の鬣を振つて起ち上り、伯林を狂氣の如く走つた。

彼の自動車は疾風の如く、街から街へ、辻から辻へ、巷路から巷路へ、工場から工場へ、たゞ無性に走つた。目まぐるしきまでに駛つた。彼の太いベエスの怒號が、到る所の街の角で聞かれた。彼がその雪白の鬣を振ふ姿が、到る所の工場街で見られた。

Bravo!

さうした聲、怒濤のやうな拍手、それが彼を送ると、彼は又次の街で怒號した。斯くして二十四時間の後、伯林は無産階級の手に占領されてしまつたのである。

さうした或る夜のことである。

彼は十二人の結束した青年達と共に、モツセの印刷所を占領したのである。

ルードルフ・モツセ！、それはヨーロツパにおける出版王として知られてゐる、其處からは「ベルリナア・タアゲブラット」の外印刷物が、毎月百萬部以上も印刷されてゐる。

けれども、其の當時、印刷所には何人も居なかつた。革命は、工場から凡ての労働者を街上に放つ

たのである。

ホフマンは、モッセの印刷所で、獨立社會黨の機關紙柏林人民新聞 (Berliner Volkszeitung) 第一號を發行した。

プロシア國の内閣が社會黨員の手によつて組織されやうとした時、彼は自薦して教育大臣となつた。そして多數社會黨の領袖ヘエニツシュと共に政務を執つた。

職に就くと同時に、彼は凡ての改革宣傳の手を弛めなかつた。

彼の第一の仕事は政教の分離であつた。學校教育から凡ゆる宗教味を抹殺することは、彼の多年の宿願であつた。

彼が此の方針に、第一歩を踏み出すと同時に、カトリック教の中央黨が憤慨した。同教が最も勢力を有つてゐる上シレチアとラインランド・ウエストフアリアは、プロシア國から分離運動を試みやうとした。

凡ゆる方面に反對の疾風怒濤が起つた。

かうした暴風雨に面して、ホフマンは、びくともしなかつた。否な、彼は嵐に面して闘はうとした。彼は公開の席上で演説して曰く、

『もし國民議會の議員選舉に、社會黨が多數を占むることが不可能だとすれば、社會主義者は、武力

をもつて、即ち機關銃をもつて議會を破壊するであらう』

これは凡ゆる方面の反對に油を注いだ。彼の部下の書記官達 (舊官僚系) はストライキをもつて脅迫した。カトリック僧黨 (中央黨) は、街上に示威運動を試み、彼の住宅をさへ襲撃しやうとした。彼は其の職を辭さなければならなくなつた。

それと同時に、其の年のクリスマスには、既にハアゼ一派が聯立内閣から脱退することになつた。そこでホフマンも大臣の地位を去つて一野人となつた。それが、最も彼に適してゐたのである。

けれども、其後一年にして、彼は柏林の貧民街から、革命後最初の代議士として議場に送られた。

雪白の鬚をもつた老闘士、健在なりや。私はその後の消息を聞かないのである。もし彼、いまなほ存命してゐるとしても、己に彼は七十の坂を越してゐる筈である。

フウゴオ・ハアゼの死

一

獨逸革命の先驅者であり、そして又犠牲者であつたフウゴオ・ハアゼについて、知る人が多くない
 なぜであるか、それは彼の名がカアルやローザのために蔽はれてゐるのである。いま私をしてハアゼ
 を語らしめよ。

一八六三年、アルペンスタインにおいて、かれ、フウゴオ・ハアゼは、此の世の最初の光を見た。其
 處は後には軍隊の司令本部の所在地となり、又汽車の駐る立派な驛ともなつたが、然しハアゼの生れ
 た頃は、其の地は僻遠の一小都會に過ぎなかつた。彼は少年の頃、其處のランテンベルグ中學に普通
 學を學び、後にケエニヒスベルグの大學に於て法律を學んだ。

大學を卒業した彼に取つても、坦々たる大道は開かれて居なかつた。猶太人としての彼の行く手
 は、唯だ荆棘が道を阻んで居たに過ぎなかつたからである。されば、どうして彼が官途などに就くこ

とが出来やうか、どうして大會社に適當な就職の口を見出すことが出来やうか。彼は民間において、
 何かしら職業を求むるより外に道はなかつたのである。

大學卒業後、彼は辯護士の免狀を得て法律事務所を開くことになつた。

彼は身世の酸苦を嘗め盡して來たに拘らず、非常に濇い氣持をもつてゐた。彼は富貴をも地位をも
 求めなかつた。彼の心は唯だ貧民にのみ向つた。狀師となつて後、彼はケエニヒスベルグに於ける
 無産階級對手の唯一の辯護士として、依頼される仕事は非常に多かつたが、辯護料を仕拂はれないこ
 とは屢々あつた。そして時には、自分のポケット・マネエを出して、訴訟費用を拂つてやらなければ
 ならないことさへあつた。

斯やうな義侠的な行爲は、間もなくケエニヒスベルグに於て認められ、同市の市會議員に選ばれる
 こととなり、一八九七年には、國會議員に選出され、時の社會黨首領ベエベルの愛顧を得るやうに
 なつた。

二

彼の熱情と、彼の甚しい左傾的思想は、黨中に於ても異彩を放つた。殊に、彼は社會黨の大會日に
 おいては、同志達の心を得てしまふことが出来た。彼は最もよく實際問題に關して練達の能を發揮し

た。當時、彼は黨の闘士レデブールを餘り好まなかつた。蓋しレデブールは、單に反對せんが爲に、事毎に反對したからである。

ハアゼが、反對したのは、たゞ修正派に對した時だけであつた。此の派に對しては、彼は思ひきり猛烈に闘争した。當時「フォルウエルツ」の編輯主任であつたクルト・アイスナアとも、激しく争つた。

間もなく彼は、社會黨の首領ベエベルの後を襲うて幹事長となつた。彼は黨首としては、可なり費用を要するに拘らず、僅かに年給三千六百マルクで生活し、一意専念黨派のために盡した。

彼の先輩ジంగాアは、懇切な人であり、そして胸中に何等の蟻かまりのない人物であつたが、猶太人として世の迫害と争つて來たハアゼは、直に腹心を披いて友を迎ふことが出来なかつたので、どちらかと云へば、近づき難い所があつたに相違ない。従つて、彼には多くの親友はなかつたが、一度彼と相許した同志は、如何なる場合にも彼を棄て去ることが出来なかつた。

三

一九一四年の夏、奥國の皇嗣フェルディナンド大公がサラボエに暗殺された結果、奥塞間の風雲は急を告げ、ために全歐洲は一大不安に襲はれた。世界戦争が、今にも起りさうに思はれた。そこでハ

アゼは、白耳義のブルツセルにおいて、佛國社會黨の首領であるジャン・ジョーレスと會見し、歐洲の平和が攪亂される場合においては、各國の労働者は團結して戦争防止に努めやうと約束して歸つた。同年七月の末、愈々歐洲の風雲は急を告げたので、ハアゼは其の黨からヘルマン・ミュラアを佛國に送つた。然るにミュラアが巴里に着いた時は、ジョーレスは保守主義者のために暗殺されて、獨佛の開戦を防止する手段を失つてしまつた。機會は倏忽のうちに過ぎ去つた。其の時アルサス・ロオレンには獨逸の大軍が充満し、鐵道沿線には、各ステーションに、輸送すべき軍隊が集中してゐた。

戦争は終に來た。

それは國際社會黨に取つては第一の試練であつた。

ハアゼはジョーレスの暗殺を知つたが、然し、それにも拘らず彼は戦争防止に全力を注がうと決心した。彼は、其の黨に屬する労働者をして大示威運動を執行させた。幾々たる労働軍の行列は、ライプチツヒ街より、ウンター・デン・リンデン街に行進した。けれども、其の甲斐がなかつた。

宣戦は布告された、總動員は下されてしまつた。悲しむべきは、當時、社會民主黨が戦費案に投票したことである。そして、其の民主黨の首領は、實に、フウゴオ・ハアゼ其の人であつたのである。何故、彼は黨派全體の意見を壓へることが出来なかつたか。なぜ彼は其の黨員を統制することが出来な

かつたか。

それは、確かに悲しむべきことであつた、けれども、獨逸社會黨は單なるハアゼ一人を中心とする黨派ではなかつた。其の思想及び傾向においては、可なり樞庭のある幾多の黨員が包含されてゐた。フキリツブ・シャルデマンの如き、フリ・ツツエーベルトの如き、右翼に屬するものもあれば、又一方には、レエデブルルや、ライプクネヒトの如き左翼に屬する人々もあつた。然し大體に於て、右翼に屬する人が多数であつた。それが黨の大勢を左右した。(血闘の伯林参照)

X

軍費案に賛同して後に、社會黨内の空氣が次第に險惡になつた。不平分子が黙してゐなかつた。一九一五年四月の初には社會黨中の少数者が萬國に對して、平和的宣言書を發表した、それに署名したものは、ハアゼ、ベルンスタイン、カウツキイの諸長老であつたが、此の宣言文は、初めて「ライプチツヒ人民新聞」に發表された。

ハアゼは此の計畫を、秘密に行つた。

然るに突如として此の宣言書が發表された事は、社會黨員に取つては、寢耳に水の事件であつた。蓋し黨の首領として、はた、社會黨選出の代議士としてのハアゼの此の行動は、黨全體の態度を一變さすべきものと認められた。是は黨員の大多数に取つては一種の裏切りのな行爲とも見られたであらう。されば黨員は、一齊にハアゼの行動を非難攻撃し、終に彼をして首領としての地位を去らなければならぬまでにさしてしまつた。

一九一六年に、政府は臨時軍費案を議會に提出した。是に對しシャイデマンが社會黨を代表して、賛成の意を表した、ところが、ハアゼは立つて政府案に反對の意を表した。

此の演説の結果、議場は大混亂に陥り、收拾すべからざることゝなつた。議長は振鈴し、怒號し、只管議場の整理に努めたが、終に如何ともすべからざる紛亂のもとに、議長の席を去つた。

此の事あつて後、ハアゼと志を同じうするものは、社會黨を去つて獨立社會黨を組織した。そして、公開の席に於て、新聞紙上に於て、議會に於て、多数社會黨と對抗を續けた。

ライプクネヒト、ローザ・ルクセンブルグの革命的系統は、ハアゼとその同志達にまで延びた譯である。そして、ハアゼの同志中の錚々たる人々は、コーン及びドイツトマンであつた。

四

一九一八年十一月、中央軍の同盟國たるブルガリアが單獨講和條件を、其の敵國に提出した。中央軍の統一が全く亂れてしまつた。

其の間、第一に革命を謀つたものは、キイル軍港の水兵達であつた。革命の勃發中、ハアゼは少数

社會黨を代表して、水兵達に計畫を授けた。斯る中に、獨立黨の黨員バルト等は伯林に於て革命を企てた。軍隊と労働者の握手の結果は意外にも革命を容易ならしめた。

革命黨の一部は議會を砲撃した、議員達も革命黨を如何ともすることが出来なかつた、二十四時間の後に、革命が成就された。

此の革命に獨立黨が、最も與つて力のあつたことは云ふまでもない。

ウキルヘルム二世は蒙塵した、官僚の餘げつは影を潜めた。社會黨は政府を組織しなければならなくなつた。多數社會黨は獨立黨との聯立内閣を組織しやうと希望した。けれども、獨立黨は一度はそれを拒絶した。

だが、純粹の社會黨政府を組織しやうといふ考は、總ての社會黨員の胸にあつた。終に不可思議なる政府が組織されることになつた。多數社會黨の首領エーベルトと、獨立黨の首領ハアゼが、全部の首腦となつて政府を組織した。

然しかやうな變態内閣が長持ちしないのは、眼に見えてゐた。これは獨立黨に取つては失策であつた。

ボルシエキキであるところのスパルタクス團のライプクネヒト及びルキゼンブルグ等は、政府を左

翼へ、左翼へと曳つて行かうとした。けれどもハアゼは左右兩派の紛亂の中間に立つてゐた。

當時、彼は外務の衝に當り露國との親交に努めた。彼の下にあつて、社會黨の長老カウツキイが外務次官として活動したのは一異彩であつた。當時露國よりは、大使としてヨッフエが伯林に駐在して居た。

X

社會民主黨のエーベルト及びシヤイデマンを載く一派の人々と共に、一種の變態政府を繼續して行くことは、ハアゼに取つて困難なことであつた。

此の間に、ライプクネヒト及びルキゼンブルグ女史に率ゐられたスパルタクス團は、政府の施政に反對して居たが、舊帝政派と彼等との間には遂に衝突が起つて、十二月十一日には、死者十一名、負傷者三十五名を生ずるに至つた。

クリスマス前の獨立社會黨の大會はスパルタクスト一派の、急進的なプログラムを拒否したが、それでも獨立社會黨の幹部は聯立内閣の關係たることを辭した。これでハアゼは獨立黨左翼の急進分子を慰撫することが出来たのである。

併し十二月三十日にはスパルタクスト一派は、全く獨立黨から分離して共產労働黨を組織して居た。然るに一九一九年の一月に至り、不可思議な暴動が起つた。

それは前記のアイヒホルンの騷擾であつた。十日に亘る騷擾と市街戦の後、スパルタクストは失敗した。ローザとカアルは、其の尊い血を流した。

× 親友の横死はハアゼを悲しませた。彼の若い同志達は、其の後も屢々ハアゼに暴動を慫慂したが、ハアゼは、自黨が、財政に於ても武器彈藥の供給に於ても、政府に對してはてんで問題にならないので、空しく胸を撫るより他はなかつた。終に國民議會召集の日が來た。議員の選舉にも獨立黨は思つた程當選の數を得なかつた。

議會は新憲法案に就て討議し、且それに協賛を與へるのが目的であつたが、憲法制定後、フリッツ・エーベルトが、第一次の大統領職に就任した。

五

此の間に聯合諸國はツエルサイエにおいて、獨逸の賠償案を協議してゐたが、七月に入るや、平和條件を提案して來た。

七月の初め、伯林のアウーラ（大學圖書館）に於て議會が開かれ、そこで平和條件を討議することとなつた。是まで獨逸議會はワイマアに於て開かれて居たが、今度許りは、伯林より離れて居ることを不便に感じて、伯林に開會されたのである。

此の日は流石に未曾有の大問題を討議する日だけあつて、傍聽席は立錐の餘地もない有様であつた。筆者も亦各國の新聞通信員の席に陣取つて、會議の内容を聞き落すまいとして耳を澄ました。

定刻になつた。首相のフキリツプ・シャイデマンの偉大な姿が現はれた。それに對して何と云ふ異様な對照であらう。左の隅に陣取つて居る吾々のフウゴオ・ハアゼの倭小な、見すばらしい背廣姿は！。然し、ハアゼのあの眼を見る、あの熱情と眞摯の氣が現はれて居る鋭い眼光を見る。

やがてシャイデマンは、與黨の拍手に迎へられて演壇に立つた。彼は其の手に平和條約案の小冊子握つて、徐ろに口を開いた。

彼は言つた、吾等はアルサス・ロオレンを割讓しなければならぬ。それ許りかザアルの炭田（ベツケン）をも渡さなければならぬ。植民地は勿論、海底電線をも、艦船をも、——苟も獨逸人のもつて居るものは、總て聯合國に引渡さなければならぬ。——斯くの如き平和條件、それは平和條件ではない、壓迫である。吾々は斯やうな提案に服することは出來ない、吾々は、再び軍を立て直すであらう。そして、聯合國の軍勢が伯林を攻圍するまで最後の血戦を試みるであらう！。

シャイデマンの演説は、與黨からも、人民黨からも、中央黨からも、總ての黨派から歡迎された。中央黨の婦人代議士を初め、各黨がそれ／＼に、シャイデマンの説に賛成した。彼等は其の祖國の難に赴かんが爲に、平素の黨派的感情の總てを一擲したのである。舉國一致と云ふのは實に斯くの如

きを云ふのであらう。

併し此の悲壯な、學國一致的の光景を裏切らんがために、現はれた一人の人物がある。それは獨立黨のハアゼであつた。其の日のハアゼの顔には、決死の色が漲つて居た。彼は如何なる敵黨の反對をも排斥して、自黨の所志を述べんと決心して來たのである。ハアゼは言つた。

無産階級は既に二百萬人を此の大戦に犠牲にして來た。此の上犠牲を拂ふことは吾等の堪ふべからざることである。再び聯合國と戦を交へんなどとは以ての外のことである。吾々は、それが如何なる提案であるとしても、斷じて調印を済まされなければならぬ。

ハアゼの反對演説は、各黨派より散彈の如く反對の聲を降らした。否、嵐の如き反對の聲が滿堂を壓した、あの堂上に描かれて居る愛國者フキヒテの像ですら、思はず驚いて、代議士席の方へ振り向きさうにさへ思はれた。

けれどもハアゼは、敵黨の脅威に身動きもしさうに見えなかつた。彼は双の手をもつて、屹々と演壇を抱くが如くにして、反對黨の聲の静まるを待つて、其の議論を續けた。ネエ！ネエ！（ナイン）の聲は、代議士席の全部から怒濤の如く起つて、四壁にぶつつかかり、階上の傍聴席をすら揺り動かした。そして傍聴人ですらそれに刺激されて、彼の所論に反對の聲を放つた。

然し、彼は一步も退かなかつた。「労働者には祖國なし！」とは、マルクスの言葉であつた。祖國と

云ふ語を巧みに利用して、ブルジョアは二百萬の鮮血を戦場に流さした、百萬の婦人を寡婦にし、百萬の兒供を孤兒にして顧る所がなかつた、此の上、何の犠牲ぞ、此の上、何の血税であるぞとハアゼは叫んだ。

X

其の日は討論を終決することが出来なかつた。若し議會のみに於て、決を取つたならば、儼かに二十名やそこらの少數な獨立黨に勝ち味のないのは判り切つて居る。けれども、政府は遮二無二に、其の横車を推しきることが出来なかつた。なぜなれば、獨立黨の背後にある労働者の勢力は侮る可からざるものがあつたから。

それに何人が考へても分り切つて居るではないか。獨逸が此の上戦争に堪へ得ないと云ふことは。勿論、ナポレオン時代には、普魯西は併軍の鐵蹄に蹂躪され、伯林は併軍により占領せられた。けれども、あの時とは場合が違ふ。

此の上戦はずとも獨逸は經濟上の破綻を見なければならぬ。戦へば、更に血を流して傷口を大きくするだけのことである。

シャイデマン内閣は、遂に辭職した。エーベルト大統領は、最も労働組合に勢力のあるパウアーを擧げて、内閣を組織させた。けれども、パウアーですらも、前内閣の政策を踏襲しては、内閣を維持

することが不可能であつた。

エーベルトは泣いた、どうしてよいか、彼は殆ど處置に窮したのである。

終に四十二歳のヘマアン・ミュラアが内閣を組織した。ミュラアはハアゼから見れば殆ど小僧にも等しい後輩である。戦争の直前、ハアゼが、ジョーレスの一派と平和運動を起さうとした時、彼はミュラアを巴里に派遣した。今四年の歳月が、ハアゼとミュラアの立場を變へさせた。

けれどもミュラアは、終に屈辱講和條件に調印しなければならぬ情勢を看取した。ミュラアとラズベルグは、選ばれてヴェルサイユに派遣された。嘗て、プロツクドルフ・ランツァウ伯が席を蹴つて歸つたヴェルサイユの鏡の間、其處に獨逸の委員等は、條約の調印をしたのである。

x

こんなにして、ハアゼの所志は貫徹した。彼は獨逸の労働階級を再度、血汐の海に漂はさないだけの努力をした、それが恐らく、彼の生涯に於ける最後の事業であつたらう。

一九一九年十月、彼は議會から退出しやうとして、階段口に向つた時、一人の兇漢のために拳銃で射られた。彈は其の脚を傷けた。不幸にして其の彈は肉の中に食ひ入つて散亂した。

彼は脚部を切斷しなければならなかつた。併し、それすらも、彼を輕快ならしむることが出来なかつた、終に片脚は股のあたりから切斷された。そして、同時に彼は生命を失つた、それは其の年の十

二月十二日のことであつた。

悲報は世界の各國に飛んだ、世界の社會黨、世界の労働黨は、世界の隅々から哀悼の辭を寄せて來た。それは雪の上つた薄曇りの日であつた。伯林の議會に於て、彼のために告別式が行はれた。悲壯な各黨代表者及び労働階級の哀悼の辭の後で、獨立黨員として籍を置いて居るアレキサンダー・モイシ（名優）が、故人を偲んで悲壯な、涙の流るゝ一場の哀詞を述べた。その後で、彼の骨壺は葬儀車に移された。漆黒なりボンをもつて轎を結ばれた漆黒な二頭の馬が、漆黒に塗られた彼の車を引いた。其の前後に幾千となく、幾萬となく、労働者の群が頭を垂れて續いた。葬列はフリードリツヒフェルドの墓地に向つたのである。

ハアゼは良き時期に死んだ。

彼の僚友の中には最左翼のマイブクネヒト、ルキゼンブルグの一派がある。その右翼にはカウツキイを初めとして、モスカウの第三インタアナショナルを否認するヒフルアディングや、クリスピエンなどがある、彼は、兩派の間に介在して其の夫就に迷つたであらう。

彼が若し生きて居るとしたならば、獨逸の政界は如何なる變化を見て居るか、逆踏することは出来ない。併し彼が獨逸のマクドナルドたらずして死んだことは、彼の名譽を救ひ得たと云つてよい。

x

年々千を數ふる日東の遊客が、伯林を訪ふ。けれども、誰れが革命家達の墳墓に花を捧げたか！。日本人の園藝クラブが出来た。日本人の料理屋が出来た。日本人専門の賣娼窟もあるさうだ。けれども、日本の紳士達よ、一九一九年代の伯林のことを思つて見ろ！。一度プロレタリアの血を流した革命の都は、君達が想像するやうな單なる享樂の都市ではないのだ！。

赤色俳優モイシ

マックス・ラインハルト門下の名優アレキサンダア・モイシが日本に來ると云ふ噂がある。噂ばかりで一向やつて來ないモイシ、私は、彼を瑞西と獨逸と埃多利で、何れも違つた機會に於て見た。そして、偶然の機會が、私をして、比較的多く彼に就て知るを得さしめた。私の見たモイシに就て、少し記さして下さい。

御承知の通り、現今ハムレット役者と云ふものは、世界にさう幾人も居ない。然るにこのモイシは、獨、埃、否な中欧及北歐に於ては、カインツ以後のハムレット役者として知られて居る。十年前に早稲田文學が「沙翁記念號」を發行した時、其の口繪の中にさへ、モイシのハムレットが掲げられてあつた位であるから、モイシは餘程早くから知られて居たと思ふ。それにしても、モイシは、未だ四十を出たか出ない位の若い俳優である。彼の先生のラインハルト教授にしてさへも、未だ五十にはな

るまい。

一九一六年、私はライン河畔の小さな美しいバアゼル市に居た。其處は、獨逸と瑞西の境で、私の住んで居た宿の窓には、毎日毎夜砲聲が響いて來た。然し、其處は、唯だ一步離れて居るきりで、獨逸とは全く違つた平和國であつた。平和國の町では、戦捷の國旗も懸へらぬ代りに、戦死者の柩を送る弔鐘も響かなかつた。平和國は、誰れに遠慮もなく、それ自身の平和を樂んだ。そこで、バアゼルの如き小都市にも、第一流の藝術家が迎へられた譯である。ラインハルトの如き、ニキシユの如き、リヒハルト・ストラウスの如き、ユージン・グ・ペールの如き、皆な其處の小さな劇場で、拍手を受けた。

モイシの其處に來たのは偶然であつた。迎へられたのではなかつた。彼は獨逸の飛行下士として、勇敢なる飛行を試みた末、飛行機を射落されて佛軍の捕虜となり、次で、交換捕虜として瑞西に送られたのである。「交換捕虜」とは、瑞西國が仲介となり、各交戦國の傷病捕虜を、再度戦線に立たせないと云ふ約束のもとに交換歸國させたものを言ふ。モイシは實に其の一人であつた。

當時の獨逸國では、俳優を従軍させないことになつて居た。初め、カイザアが、軍令に由つて俳優に従軍を強要した時、是等の藝術家を代表してラインハルトは抗議を提出し、絶対に俳優の従軍を拒否したが、カイザアが、軍律により強て従軍を迫つた時、彼は言つた、「宜しう御座います。伯林の劇

場は全部閉鎖させませう。」これには、流石の獨帝も閉口したと云ひ傳へらるゝ程で、モイシの如き名優が従軍したことは、寧ろ不思議としなければならぬ。然し、それには理由があつた。

モイシの母は獨逸人であつたが、父は伊太利人であつた。世界大戦勃發後、伊太利國は其去就に迷つて居た。然しビユーロウ公の苦辛も甲斐なく一九一六年の初め、聯合國に加盟した結果、伊太利人の血を受けたモイシは伯林の中心で猜疑の眼を以て見られることゝなつた。そこで彼は、奮然志願兵となり、飛行士となり、身を挺して、愛國者の一人であることを立證しなければならなくなつた譯である。そして是がバアゼルの市立劇場に於て、彼を観る機会を私に與へた譯である。

二

中肉中背の體格をもち、そして拉丁型の特徴を現はした貴公子的容貌の所有者であるモイシは、又拉丁人特有な性格の所有者であつたに相違ない。

幽鬱の底に沈んだハムレット、父の幽靈を見るハムレット、伴狂皇子としてのハムレット、復讐者としてのハムレット、戀を犠牲にしたハムレット、嵐のやうな感情の去來をもつたハムレット、一面には、針のやうな神經の所有者として、他面には、氷のやうな冷靜さを裝ふ青年としてのハムレット、その演出には、空想的な、憂鬱な、多感多情の青年モイシが、最も理想的であつたらう。原作者の沙

翁には兎も角としても、沙翁劇の一大權威ラインハルトに取つては、尠くとも理想的であつたに相違ない。假りに又、それが不適當であつたとしても、今の所、獨塊に於ては、モイシを外にして、誰も此の大物に手を付け得る俳優がない。

モイシは、此の外にも特異な役、例へば「幽霊」のオスワルド、トルストイの「生ける屍」及びゴルキイの「夜の宿」の主役、「シイザア」のアントニイ、最近の「ダントン」、ハウプトマンの「ワイザア」、ハイランド」等、主人公に扮して何れも非常な成功を博して居る。

私は「幽霊」のオスワルドと同様な病に罹つた良人を多年看護した老婦人と、「幽霊」を見に行つたことがある。其時、老夫人は、其の言語なり、動作なり、死亡前の良人に髣髴として居ると言つて、顔を蔽うた。如何にモイシが、局部的には傑出した藝術家であるかと判る。

然し、彼が此の調子を以て凡ての古典劇、凡ての近代劇に推して行つては困る。ユーリピデスもストリンドベルヒも、此の調子で繰り返されては、観客は、大きな倦怠を感じる譯である。モイシは今一轉期の頂上に立つて居ると思ふ。

三

アントニイに於て煽動家であり「夜の宿」に於て虚無主義者である彼を観た私は、最後に、本物の

社會黨員としての彼を見せられた。

一九一九年の十月、ウキンより伯林に歸る汽車の中で、私は革命後第一期の首相であつた獨立社會黨の首領ハアゼの遭難を知つた。佛國のジャン・ジョーレスと同じに考へて居た此の人の遭難に對して、社會主義者としての私は、極度に神經を刺戟された。私が伯林に歸つて間もなく、ハアゼは、狙撃された片脚を切斷した甲斐もなく死んでしまつた。

ある雪の降る日、ハアゼの葬儀が、伯林の議事堂で行はれた。其の日、モイシは、ハアゼの遺骨の前で、悲壯な弔辭を述べたのである。

言ふ迄もなく、獨立社會黨は、共產黨に次いで左傾派である。中産階級や、有産階級に多くの最負を有する俳優としてのモイシが、左傾派の一員として、斯様な場合に、斯様な本芝居を打つことは、確かに彼れの人気に關する譯である。然し、モイシは、さうしたことを恐れなかつた。

四

愛國的飛行士としてのモイシ、極端左派としてのモイシ、此の二つのものは、非常に矛盾して居ながら、一人のモイシの内部に調和して居る。それは、恰もハムレットの性格を、彼れに於て見る事が出来るやうな心地がする。私は、斯る人物にして、初めて、複雑な悲劇の主人公を演じ得るのであ

らうと思つた。(一九二四年八月九日)

ヒンデンブルグ元帥審問

—

獨逸國民議會は委員六名を選定して一九一九年十月中旬より、戦争勃發原因、米獨平和交渉顛末、潜航艇戦開始真相等を調査のため、當時最も重大なる關係者たりし前首相ベートマン、ホールウエツヒ外相チンメルマン、藏相ヘルフェリツヒ博士、駐米大使ベルンスドルフ伯及ヒンデンブルグ元帥、ルーデンドルフ將軍を召喚して訊問した。但し此の訊問は、單に事實の真相を調査研究する目的であるから、當の責任者と雖も、何事懲罰を受けぬことになつて居る。されば、審問會と云ふよりも、寧ろ質問會と云つた方が適當であらうが、國民議會が、國民を代表して訊問する形式を取つてゐるから審問の文字を用ひた。

首相其他の審問に關しては省略し、茲には、ヒンデンブルグ元帥及びルーデンドルフ將軍の審問に關して記すこととする。

ヒンデンブルグ元帥の審問——これは實に獨逸の舊官僚、舊軍人、保守黨一派に取つては、容易ならぬことであつた。彼等は是を以て元帥に對する一大侮辱と考へ、此の審問會を中止妨害せんとの下心をもつて、種々の示威運動を試みたが、それは悉く不結果に終つた。然し國民黨及保守黨の此の運動は、政府筋をして恐慌を來さしめ、元帥審問の當日なる十月十八日早朝は、戦捷並木附近より審問所なる議會一帯に、警官隊を配備し、警戒は嚴重を極めた。

元帥はチーア・ガルテン附近に在る前相ヘルフエリツヒ博士の別墅に起臥して居たので、議場迄の距離は何程もなかつた。されば附近の群衆は、九時半に元帥を見やうとして、議會前に集まつたものも可なりあつた。

元帥の自動車は、別墅を出で、二小隊の騎兵に護衛されて議會に着いた。同乗して居たものは元帥と其の令息(大尉)及びルーデンドルフ將軍であつた。群衆は元帥一行の姿を見るや一齊に萬歳を叫んだ。元帥は靜かに帽を取りつゝ議會の第二入口に入つた。然し、群衆は依然として「ホツホ、ヒンデンブルグ」「ホツホ、ルーデンドルフ」「猶太人の現政府を仆せ」「猶太人審問會を仆せ」などの叫びを止めなかつた。

審問會場は、議會の委員會室である、此の室に於ては、戦時中も、幾多の大會議が開かれたが、殊に無制限潜航艇戰協議會の開かれたことは、今尙當年列席の議員達の記憶に新なる所であらう。而

して例日の如く審問會の席に列せる閣僚ダツキツド博士、前首相、前藏相、外相等、何れも當時の會議に列せる人々である。其の會議室に於て、三年後の今日、軍閥巨頭の審問會を見やうとは、誰か當時夢想したものがあらうか。

高貴なる赤絨氈を敷きつめた大會議室は、僅に千人を容れ得る、けれども此の巨室は高き天井の四箇所から吊り下げた莊麗なる飾電燈と、比公、ウキルヘルム大帝騎上の大壁畫を除いては左したる裝飾もなく、堅牢と質素を極めたる全然獨逸式の大サロンである。會議室の正面には、審問委員長ゴツトハイン(閣僚)を初めとし、五名の委員(一名は中央黨婦人代議士)列席し、其の前に證人として喚問された人の卓と椅子がある。其周圍に參考人の椅子、其の兩側に速記者及吾々外國新聞記者の席がある。予の常に坐する席は、新聞記者席ではなくて、大臣ダツキツド氏の背後で、斜に證人の顔を見ることが出来る、巨大なるベートマン・ホールウエツヒ氏、左に決闘の刀痕二條を有する前外相チンメルマン氏、濃厚なる君子の如き容貌を有し、而かも豪膽厚顔、傍若無人なる前藏相ヘルフエリツヒ博士、蒼白なるベルンスドルフ伯など、幾度か奇異の眼をもて、黃顔にして短身倭小なる私を見た。

委員と證人と參考人の席を別にしては、殆ど新聞記者及び官吏の席であつて、時には英米の軍事委員も傍聴に來て居ることもあれば、瑞典あたりの公使が來て居ることもある。是等の席より全く別に

なつて、左端に普通傍聴人の席が仕切つてある。此の日は例日になく、會議室も傍聴席も立錐の餘地なき程であつた。場の空氣は緊張し切つて居た。人々は堅唾を呑みつゝ元帥の來るを待つた。正面の時計は正に午前十時を打つた。

二

正十時と共に、ヒンデンブルグ元帥とルーデンドルフ將軍は、長い幾つかの廊下を通つて會議室の方へ行つた。彼等に次いで二三の武官が隨行した。個人として知己である委員の一人ロールムート氏が二將軍を迎へて握手した。委員會の書記が、二將軍を會議室に案内した。十時を過ぐる十五分、ヒンデンブルグ將軍の姿が、初めて正面の扉に現れた。其の偉大なる軀幹、短く短促たる白髪、長き口髭、如何にも、嚴肅なる容貌である。ルーデンドルフ將軍は元帥に添うて立つて居た。殆ど同じ位の體格を有する偉男子である。否幾分元帥より瘦形なる爲、稍小柄に見受けられたるは止むを得ぬ。其の廣き額、鋭き眼、隆き鼻、端正なる顔面の輪廓、實に軍閥代表者の風貌として、非を打つべき所はない。ヒ元帥に戰士の風貌を見得べくんば、ル將軍は、ブル軍親分面の典型である。唯當日は將軍例になく平服を着用したるため、初見の人には、軍人なるや、將た政治家なるや、判じ難き印象を與へた。元帥の室内に入るや、委員を初めとし、全員一齊に起立して敬意を表した。其の瞬時に、

今までの、ざはめきも嘘きも、びたりと止まつて、百千の眼は一時に元帥と將軍の身邊に注がれたしやがて委員長ゴートハイン氏は立つて元帥の卓の前まで進み度んで握手した。握手を返した元帥は己れより二三歩横の卓に着けるベートマン・ホールウエツヒ氏に對して長き、慇懃なる握手を交した。此の瞬間、傍聴席にありたる、鋭き眼光と、白き尖りたる髭のシャイデマン氏が二人の様子を瞬きもせず疑視し居たるを、記者は興あり氣に見た。次で委員長は、公式的に、元帥が遠路遙々委員會に證人として出席されたことを謝した。これに對し元帥は、委員會が其の旅行に就いて萬般の便宜を與へられたることを謝した。次で委員長は證人として宣誓せらるべきやを元帥に尋ねた。元帥は宣誓する前に、別に委員會に對する意見書を提出し度しとして、一篇の意見書を提出したが、これは過般來の答辯拒否を止當と認めたもので、證人は答辯拒否權を有すと云ふこと、及び彼等二人の意見は、過般來のベートマン・ホールウエツヒ氏及其他の答辯と同一であると云ふことを認めたものであつた。然し委員長は「右は單に證人一人の意見として認むるも、委員會は豫定のプログラムを變更する能はず」と答へた。茲に於てか元帥及び大將は、型の如く宣誓せざるを得なくなつた。元帥は起立した。宣誓せんがためである。室に在りし全員亦一齊に起立した。元帥は二指を舉げて、全然普魯西古式の宣誓を行つた。「神に誓ひ敢て緘黙せず、敢て拒否せず、良心に従ひ……」と元帥は誓つた。嚴肅なる顔が一層嚴肅に見えた。次でルーデンドルフ將軍も同様に宣誓を行つた。

これより前、審問委員會は、次の如き重大なる六箇條の質問をヒ元帥の手許まで提出して置いた。蓋し、元帥に對し考慮の餘地を與へんがためであつた。

第一、最高軍司令部は、一九一七年二月一日の無制限潛航艦戰の宣言を、何れの時期より、又如何なる理由よりして、遷延すべからざるものとして固執せしや。

第二、最高軍司令部は、潛航艦戰に對する反對理由、特に次官フオン・ハンエル氏及びアル・ヘルト氏の提起に關する反對理由を承知し居たりや、又如何なる理由により最高軍司令部は、提起され居たる無制限潛航艦戰に對する反對理由を有効なるものとして認識せざりしや。

第三、何如なる根據により、最高軍司令部は、一九一六年十二月二十一日のウイ爾ソンの平和提唱を、同年十二月廿三日と元帥より首相に打電せしが如く、「英國より求めし平和提唱」として認めしや而して、何が故に政府より提示せしウイ爾ソンの平和提唱に對し讓歩する所なかりしや。

第四、最高軍司令部は、ウイ爾ソン提唱の細目を承知したりしや、特に、潛航艦戰開始の決せられんとせし一九一七年一月九日、ベルンズドルフ伯が、一九一六年十二月二十一日より一九一七年一月九日迄に通知せし報告を承知したりしや。

第五、一九一六年十二月十二日の、海軍軍令部の記録に於て期待されし如く、最高軍司令部は、英國が遅くとも一九一七年七月一日迄に平和を強制さるべしと認めしや。

第六は潛航艦戰開始に關するルーデンドルフ將軍の記事（彼れの著書に現れたる）と、前首相ベートマン・ホルウエツト氏の陳述の矛盾に就て質問したものであつた。

三

委員長は更めて第一の質問を元帥に提出した、右に對して元帥は次の如く答へた。（以下問答は大要を摘記す。）

元帥 吾々が最高軍司令部を擔任した時は既に世界戰の滿二箇年を経過した後であつた。（記者註、夫迄はフアルケンフアイン將軍が最高軍司令部にあつた）されど此の一九一六年八月廿九日以後の大事件と雖も必ずしも此の時期以前の事件と切離して判定さるべきものでない。蓋し一九一四年より當時迄には、羅馬尼が參戰する迄に戰局擴大し、空前の戰爭に成つて居たからである、而して吾が獨逸軍は、兵力に於ても、軍器軍需品其他有ゆる補助機關に於ても、當初より甚だ面白からぬ状態にあつた。

軍隊の絶對價値は獨り軍隊の道義的實質許りに由るものでないのである。然るに此の軍隊の徵集に關しては、中央も、地方も非常に至難であつた。然し少數者（兵）が今次の戰爭の如く非常なる活動をした事は、恐らく空前のことであつたらう。斯様に困難な基礎の上に、吾々の事業は置かれてあつ

た。されば出来得べくんば、人力及び軍事上の手段を盡し、慘害を未然に回避し平和を將來せんと
 と只管希望したのである。斯る多難なる状態の下にあつて、而も、重大事業を成就せんが爲には勢
 吾人は捷利と云ふ目的に向つて確固不動の意志を持たなければならぬ。此の捷利に關する意志は、吾
 吾の權利に關する信念と聯結されて居た。若し、吾々の祖國の道義的力が更新されず、又祖國の全勢
 力が戰場に於て實現されざりしならば、吾々は曠古の此の大戦に屈服せざる可らざるを豫知した筈で
 ある。

戦捷に對する意志は、個人の不動信念と云ふよりも、寧ろ全國民意志の發露なるが如くに見えた。
 若し、吾々が、戦捷の意志を有せざりしならば、而して又此の意志を當然國民の有する意志として認
 め得ざりしならば、決して吾々は重大なる職責に身を置かなかつたであらう。若し假りに、一將軍が
 其の國の捷利に對して努力するを欲せずば、如何で、司令部は、其の責に任ぜんや、恐らく、吾々は
 最高軍事司令部の任命を斷退したであらう。獨逸參謀本部は軍事哲學の大家フオン・クラウゼwitz
 チの説により修養して來た。而して吾々は戦争を軍事的手段による政策の一連續なりと觀る。予は唯
 だ絶對的に確實なる一事を知つて居る。其は獨逸國民が戦争を欲せなかつたことである。獨逸皇帝が
 戦争を欲せなかつたことである。獨逸政府が、戦争を欲せなかつたことである。而して、參謀本部先
 づ第一に是を欲せなかつたことである。蓋し聯合國に對抗する戦争の至難なる實情を知つて居たもの

は、誰よりも先づ參謀本部であつたからである。軍事中央幹部が、祖國に對して其の義務を全うせん
 がため、回避すべからざる戦争に對し準備をなせしことは、蓋し當然のことである。

吾々が、第一の事業として考へたことは、軍事的手段により、出来得るだけ迅速に、且良好に戦争
 の終結を告げしめ、正當なる平和方策による政府の方針を確立することであつた。此の見解は、戦争
 斷行當然の歸結で、敢て他に解釋の餘地はない。且つ又大戦により吾々は慙う云ふことを知り得た。
 即ち、敵が兵力に於ても、有らゆる物資に於ても遙に優勢であること、同時に損害の點に於ても、敵
 は比較し得ざる程多數であらねばならぬが、然し、よし吾々が良好なる成果を擧ぐるにしても、兵力
 沈衰の點に於ては彼我同程度であると云ふことを知り得た。

己に愛國の念により戦争を可及的迅速に終結せしめんと欲せし吾々の思念は、以上の事實により一
 層切實にされた。若し、敵軍優勢なりとも、國內と戦線と、協力同心したらんには、今回の戦争は光
 榮ある終局を見たであらう、然るに今日の状態は果して如何、國人中、祖國の至難なる状態を利用し
 て、黨派の利益に供するものがあるに至らうとは。

委員長 元帥の答辯は又もや批評に立ち入つた、お氣の毒ながら、是以上、批評は御中止を乞ふ。
 元帥 斯る状態が、即ち團結せる戦捷的意志を分裂潰敗せしむるに至つたのである。
 委員長 それ又批評である、御中止を乞ふ。

委員長の元帥に對する態度は頗る感歎であつた。併し如上の問答の瞬間に記者席傍聴席は、稍騒めく様子であつた。委員長は、記者連及び、傍聴者に向ひ、若し議事中、同情的又は諷刺的言動をなすものあらば、容赦なく、入場證を沒收し、或は直に退場せしむべしと嚴達した。満場は再び水を打ちたる如く静まり返つた。

元帥 予が茲に續いて陳述し得ざる點に關して歴史は斷定を與ふるものと信ずる。

斯く前置して、元帥が革命當時、革命軍より分離し居たる忠良なる軍隊が、革命軍の下に、如何に苦しみたるかを縷々として尙ほ述べんとするや、委員長は、陪席のワールムート（中央黨）及シンツハイマア（社會黨）の二氏と低語せし後、堪り兼ねて振鈴す、然し元帥は依然として尙言を續ける。元帥、有ゆる吾々の試みも無効に終り、終に破滅に到達した、革命は唯最後の要石たりしのみ、英國の一將軍の言ひたる如く、まことに、獨逸軍は背後より短刀にて突き刺されたるも同然である。而してかの各戦線に於ける燦爛たる戦果の後、悲惨なる終局を見るに至つたのである。兎に角大問題に達しては、予とルーデンドルフ將軍は、常に同一見解を有し、協力一致して行動した、吾等二人は、大事に際し、共に苦心すると同時に、又責任を分つた。即ち一九一六年八月二十九日以来、共に手を取つて最高司令部を代表したのである。

委員長 擬最高軍司令部は、一九七一年二月一日の無制限潜航艇戦の宣言を何の時期より又如何な

る理由よりして、遷延すべからざるものとして固持されしや。

元帥 詳細の事に關してはルーデンドルフ將軍より答辯がある筈である、予は唯だ簡單に述べやう若し潜航艇戦の準備が整ふたならば早速實行に取掛らねばならぬと云ふことは、已に一九一六年の初頭より見越を付けられて居たことである、蓋し、他の手段により、困難至極なりし西方戦線の助力をなすことは、不可能であつたからである、而して、此の潜航艇戦こそ、戦争を最も迅速に終結せしむべき唯一の手段であつた、勿論、此の上、吾が婦女老幼を食料封鎖に苦しめ、且つ、吾が忠良なる軍隊を、アメリカ製の軍器の下に死なすことは、堪へ難いことであつたからである。

四

ヒンデンブルグ元帥の言葉が終るや、ルーデンドルフ將軍が初めて口を開いた。

ル將軍 予は唯だ記憶をたより陳述を試みやう。

委員長 然し質問書は既に一兩日前お手許に差上げて置いた筈である。

ル將軍 十分精密に準備をすることが出来なかつた、故に予は唯だ記憶を辿つてお答へする。ヒンデンブルグ將軍と予が、最高軍司令部を擔任せし當時の軍状は、頗る困難な状態にあつた、當時は恰もヴェルダンの戦役中であつた、又七月一日以來ソンム戦が頗る猛烈を極めて居た、是は實に最初の

マテリヤル戦であつた、されど吾々は、戦線に於ては極度の努力を傾盡して居た、東方戦線の地盤は未だ鞏固ならず、マセドニヤに於ては、手痛き打撃を受けて居た、かてゝ加へて、羅馬尼の参戦となり、忽ち匈牙利は正面に敵を受けることゝなつた、吾々は敵軍に對して恰も、六と十の比例にて對峙しなければならなかつた、而も吾等の軍器其の他の物資は決して豊富ではなかつた、一言にして云へば、此の事たる實に兵力と金力の一大損害を受くべきことを意味して居たのである、吾々の就任後、首相及海軍軍令部を経由して、無制限潜航艇戦の問題が討議された、當時ヒンデンブルグ元帥は、恚う云ふことを我等に言明された、(是は記録に残つて居る)若し我等が潜航艇戦を直に開始することが出来るならば、吾等は喜ぶべきことであるが、然しそれは一個の重大問題である、吾々は和蘭と一抔が新に宣戦を布告すると云ふことを、打算に入れて掛らねばならぬ、そして目下兵備の必要な地に、數師團を配備せねばならぬ、然らば吾々の將來は、今よりも暗澹たるものなりと言はねばならぬ、尙今次の戦争に於て、吾々に非常な恐慌を與へられたことがある、それは、我海軍が殆ど其の重大な力を用ふる能はず、無爲の状態にあつたことである、蓋し吾海軍は、東海を監視し、依つて以て戦時經濟の杜絶を防ぐの任に當つて居たからである、又フランダー沿岸に於ける海戦隊は、能く勇敢に戦へりと雖も、主力艦隊の補助をなす能はぬ状態にあつた、吾等は潜航艇により、艦隊を更に良く利用せんと試みた、然しウイルソンの覺書によつて、吾潜航

艇戦は制限せられ、自由なる行動に出づることが出来なかつた、これに反し、英國は國際公法に違反せる商業封鎖及び食料封鎖を行ひ、其の結果は、母の胎内に在る小兒の上にもまで影響を與へた、而して此の食料封鎖は實に米國の同意に由つたものである、假令ウイルソンは、此の食料封鎖を不正なりとして認めしと雖も、此のことは、終に黙過されたのである、吾等の窮乏は、野蠻なる英國の行動及び米國の中立違反の結果として現るゝに至つた、斯くして、英國の委員は、米國の港灣に於て、獨逸の船舶を検査し、以て船舶の獨逸行を防遏し、米國亦進んで聯合國を擁護した、

當時予は戦場に於て米國印の榴弾があつたことを記憶してゐる、之に對して我が戦線の兵士は、何れも非常なる憤慨をして居た、されば、米國の從軍將校は、戦線に於て嫌忌されて居た、唯最高軍司令部が、強て兵士等の意志を抑へ付けて居たのである、されば、戦線に於ける一人の兵士と雖も、米國及び米大統領の嚴正中立を信するものはなかつた、然し遺憾ながら、獨逸國一般には、予の斷定せるが如くに、米國の此態度に就ては一向に知られて居なかつた、封鎖問題及び軍器問題に對する米國の態度に關して、米國は、已に一九一五年四月ベルンスドルフ伯により嚴責されて居る、扱米國の此態度は、即ち米國の参戦に對する正當なる判斷をなさんがために、最も注意すべきことであつた、聯合國に對する所謂米國の無盡の援助なるものは、参戦前、已に聯合國に與へられて居たのである、若し米國の参戦後、同國の戦時工業が、一層擴張されたりとせば、そは潜航艇戦に由る聯合國の經

濟的擾亂の結果である、尙是等軍事の重大問題に關しては出來得べくんば、米國の専門家より聽取されんことを乞ふ。

八月廿九日以前の潜航艇戦に關しては、予は敢て語るを欲せぬ。八月末に、ヒ元帥及び予が、最高軍司令部を擔任せし當時は、吾等は潜航艇戦には反對し、同時に海軍軍司令部に反對した、蓋し首相はこれがため英國の壓迫の下に、丁抹及び和蘭が、反抗的貿易をなすべしと判斷し、吾等は又、和、丁二國の國境を守備する兵力の餘裕を有せざるが故に反對したのである。

吾等が最高軍司令部に任命されし時に、一般人民は、必ず戰捷すべしと云ふ希望と意志を有して居た、唯だ當時少數者が戰捷の結果、所謂反動が起り、軍國主義が盛んになるべしとの考へより、獨逸の捷利を怖れて居た。予は今にして尙記憶す、當時の「フオルウエルツ」紙上に「獨軍の捷利は必ずしも、ソシヤル・デモクラットの利益にあらざるべし」云々の論説ありたることを。

五

委員長 唯絶對に必要ある事實のみ陳述されんことを乞ふ。

ル將軍 予は絶對に必要ある事實のみを陳べて居る、予が茲に陳べたことは社會黨首領及び煽動者一派にのみ關係して居る、其責任を完全に盡したる労働者の上に關係して居らぬ。

委員長 それは事實に關係して居らぬ、唯事實を陳述されんことを乞ふ、御意見及批評は述べられぬやうに。

ル將軍 ヒンデンブルグ元帥と予は、全國民と協同して捷利に向つて闘つて居た、然し當時既に之に反對の思潮が流れて居た、假へば、ワルター・ラアテノオ（知名の評論家）の如きは、恚う云ふことを言つて居た、「若しカイザアが、白馬に跨り其の麾下の勇士を率ゐて、ブランデンブルグ門（柏林の凱旋門）を通過する日あらば、世界歴史は、其の意味を失ふに至るべし」と斯様な思潮が、當時既に在つたのである、されば吾等は、特に戰爭繼續に對して、憂慮を懷いて居た、一九一六年、首相は、ウイルソンの仲介により講和を提唱せんことを我等に謀つた、吾々は之れに賛同した、予は尙記憶す、ウイルソンが果して平和仲介の勞を取るや否やを、當時吾等は如何許りの期待と懷疑を以て待つたか。果して其の結果は無益であつたが、然し吾々は敢て驚かなかつた、唯吾等は之れにより英米の經濟關係が益々親善になるを知つた。

首相が、吾等中央軍の講和提議を試みた時も、吾等は前同様之れに賛同した、蓋し吾等は、吾軍の幹部諸將が、國民に平和を將來せんとする意志及び吾軍をして次回の冬營の苦を脱せしめんとする意志あることを知りしが故に、敢て之に賛同したのである。

ブカレスト占領後、及び補助軍役法發布後に至り、初めて吾が國の平和提議が公表せられた。吾々
 は此の提議に關して、非常な懷疑を持つて居た、蓋し敵軍は、非常なる損害を蒙り、其の策戦は全く
 齟齬せりと雖も、敵國民は依然として健全であつたからである。ロイド・ジョージは英國に於ける首
 腦的人物であつた、彼れは、英軍の力盡るか、然らずんば、獨逸國を絶滅さすか、二者何れか一つに
 あらざれば、斷じて武器を指かぬと云ふ鞏固なる意志を有して居た。佛國に於ける状態は英國に於け
 るが如く、精細に觀測することを得なかつたが、と言つて、決して等閑に看過することは出来なかつ
 た、勿論今次の戦争の原動力は英國であつたからである。

斯くてヒンデンブルグ元帥と予は海軍軍令部長と協議の末、若し吾々の平和提議が拒絶さるゝ場合
 に於ては、一九一七年二月を期し、無制限潛航艇戦を開始しやう、而して、若し其の結果、丁抹、和
 蘭の二國が、英國の壓迫の結果、彼れに參戰する場合には、羅馬尼より撤兵して、以て此の二國に備
 へやうと相談一決した。

十二月初旬に於ける吾軍状態は、陸戦のみにては、到底捷利を制し得ずと觀測された、都合よく行け
 ば、防禦戦により、敵の勝算的意志を沮喪せしめ得ると考へた、然し此の事たる實以て、吾國及び國
 民に對する窮極なき悲惨なる戦争を意味してゐたのである。

吾々は又恚う云ふことを考へねばならなかつた、それは吾が軍がリンム戦に於いて往々敵の優勢な
 る武器に對して對抗し得なかつたと云ふことを。
 吾々は最早講和準備により、敵を平和に強ふることは能ぬ、吾々の目的を達せんがためには、出来
 得るだけ迅速且良好に戦争を終結せしめねばならぬ、若し我が平和提唱にして効を奏せずんば、何事
 をか爲なければならなかつた、乃ち吾々は海軍側の判定の結果、一個の戰闘手段として、無制限潛航
 艇戦を行ふこととした。これは吾々の目的を迅速に達せしめ、陸戦の捷利を確實にするものであると
 見た。

六

ルーデンドルフ將軍は更に語を續けた。

ル將軍 吾々の平和提唱は有ゆる手段を講ぜしにも拘らず甚だ微力なるものであつた、予は是をべ
 ルンスドルフ伯とランシングの商議及中立國の新聞紙に徴して知り得た、然るに内地の新聞紙をして
 更に斯様な輿論を喚起せしむべき必要を見たであらうか。

委員長 新聞檢閲問題に關しては、特別の委員會により調査さるゝことと信ずる。

ル將軍 勿論新聞檢閲に關しては、特別なる事情がある、唯表面の事のみを觀ては誤りがある、吾
 吾は毫も政治上に關する新聞檢閲を行つたことはない、檢閲は單に軍事上に關してのみ行つた、若し

是等の新聞紙が、幸に検閲を免るゝことあれば、相互に幸福であつたが、然し、これを免れたものは皆無であつた、單に軍事に關することのみならず、最高軍司令部は其他の雑多な件にて痛心した、一例を擧ぐれば、獨立黨の陸海軍に對する煽動の如き……。

委員長 左様な激越な批評は御中止を乞ふ。

ル將軍 何が批評であるか、是は事實ではないか。將軍は激して卓を打つた。

委員長 それは政黨の態度に關する非難になる、本委員會は恰も國民議會同様各政黨員より成立して居る、委員長としての予が、委員會の全委員を擁護するは其の義務である、されば左様な批評は切に御中止を乞ふ。

ル將軍 予は已に宣誓を行つた、然るに、若し予が思ふことを言ひ得ぬとすれば、それは良心に反することになる。

委員長 宣誓は事實に關する緘黙を禁ずる、然し敢て批評に關する緘黙を禁じない。

委員長 ゴットハイン老人が、獅子の如き辛辣なるルーデンドルフを抑へ、抑へして、事實を吐かしためんとする手腕には、滿場何も感に堪へたるが如く見えた。

ル將軍 予は此の上敢て反對せず、何れにせよ革命運動が盛國と密接な關係を有して居ると云ふことは、最高軍司令部の觀察した所である、然るに政府は是を等閑に附して居た、蓋し斯様な事柄に關

聯することは益々露國と政治上の紛争を來すべしと考へて、恐れて居たからである、斯る中にヨッフエが伯林に來り、各都市に領事館を設置し、終に吾陸海軍が悲しむべき結果を見るに至つたのである。

委員長 吾等は第二より第六迄の質問に移るであらう。

とて委員長は前掲の第二以下の質問書を朗讀する、此時、前首相ペートマン・ホルウエツヒは、第二の質問に關し、委員長の許可を得て、次の如く陳述した。

ペートマン・ホルウエツヒ 予は一月二十九日、外相チンメルマンと共に、ホルチエンドルフ提督に向ひ潜航艇戦を猶豫せんことを依頼した。蓋しベルンズドルフ伯の電報ありたる結果である、然し其の時は已に潜航艇の出發せし後で、提督は艇を呼び戻す能はずと執じて來た、是れにより潜航艇戦猶豫の問題は終結した、ホルチエンドルフの宣言とルーデンドルフ將軍の記事の間には、何等矛盾ありと認むることが能きない。

委員長 然らば第六の質問は廢棄する。

第二問に對して、ヒ元帥は「潜航艇戦に關する反對意見の文書を見たることなし」と云ひ、ル將軍は「見たには見たが、それは私人の意見であつた、吾等は首相及び外相の如き責任ある政治家の意見にのみ信賴する」と答へた、更に、

ヒ元帥 ペルンスドルフ伯の審問により、米國が潜航艇戦の有無に拘らず参戦すべきであつたことは、今や明瞭になつて居る。

委員長 予の諒解せる範圍に於ては、吾々が平和仲介を拒絶せる場合に於ては、米國は参戦すべきであつた。

ヒ元帥 首相の舉證せる反對理由(潜航艇戦の)には吾々は價値を認め、然し吾々の軍事上の理由は依然不變であつた。潜航艇戦に關する決定は確固たるものであつた、斯様に確固たる決定を見たる事は、後年休戦提議の際に見たるのみである。

ル將軍 ヴエルダン要塞前に於ける、一九一六年十二月十五日の敗北は、吾軍の疲弊及び吾軍狀の容易ならざること立證した。當時、即ちロイド・ジョージが吾々の平和提唱を拒絶した後、予は極力潜航艇戦を遂行せねばならぬと云ふことを打電した。此の決定は、決して短時日にて定められたるに非ず、實に長い間考慮されたのである。(實に潜航艇戦は、止むを得ざるに出でたことで、決して試験的に開始されたことでない。)

此の時、委員シュツキングは、第三の質問に關し、問題になりたる元帥の電報を朗讀して質問す電文に曰く「予はウイルソンの提唱を以て、英國の懲慚によるものなりと思考する、吾等は國家的理由よりして吾人の鞏固なる軍事的地位を棄つる能はず、士官及兵士は全力を傾盡して、乾坤一擲の決戦

を期待す。」

ル將軍 此の電文は一句缺けて居ると考へる、それは「予はウイルソンの提唱を以て、吾等を制禦せんために、英國の懲慚せるものと思考す」とあつた。

委員シュツキング 其の一句の缺けたるは不思議である。

委員長 右の電文は、朗讀された通りに發電されたやうに傳聞す。

ヒ元帥 予はウイルソンの提唱を恚様に考へた、其は米國が、英國の損害を氣遣つて無制限潜航艇戦を妨害する爲に提唱したものである。吾々は英米共に一屋の下に在つたものと見解を下して居る。

七

委員長は、此の時、参考として首相とヒ元帥の交換文書に關するガエベルニッツ教授の意見を朗讀させた。(文書省略す、右は大體に於て、潜航艇戦強行の責任をヒ元帥とル將軍に負はした證據書類である) 右に對しルーデンドルフは、

ル將軍 右文書は虚言である、右によれば凡ての責任は吾等二人の肩上に懸ることになる、然し、吾等は忠實に事務を取扱つて來た、吾々に取つては一月九日を以て、既に平和提唱は終結し、其の上言辭を費す必要がなかつたのである。

右の文書を虚言なりと云ふや、委員長は之を遮り、又もヤル將軍と委員長の間が、氣色ばみて見えたりやがて。

委員長 ベルンズドルフ伯の言によれば、閣下は一九一七年五月四日に、伯と次のやうな談話を交換されたさうである。閣下「貴下は米國に於て平和運動をなさるゝと云ふが、予は破裂になると思ふ」伯「予は破裂すべしとは信ぜず、破裂する前に平和を講ぜんと思ふ」閣下「然し吾々は今潜航艇戦により、今後三箇月間に戦争を終結せしめんと考へて居る」

ル將軍 予はベルンズドルフ伯が、何と考へて恠様なことを言はれたのか知らぬ、(此の一言に満場期せずして騒めき立つ)伯は、伯の行動が予に取り同感出来ないものである、不愉快なものであると云ふ印象を得たであらう。此の印象に對して、「予の希望せざるものであつた」と言はれたのならば、それは虚偽である、然し、確に予は伯の平和的行動に對して、同感を有たなかつた。伯は、ウイルソンの關する正確な情報を首相に發して居なかつた、これがため、潜航艇戦の結果による米國及中立國の參戰如何が不明であつた、何れにしても伯は、米國に於けるプロバガンダに何等の對抗をしなかつた、故に伯の行動は予の同感出来なかつた所である、此の事なくんば、予は「平和を欲せぬ、潜航艇戦により、三箇月後に結末を付ける」などと、言明しなかつたであらう。將軍は激して卓を打つた。

將軍の陳述に對して、前駐米大使ベルンズドルフ伯は靜に次の如く述べた。

ベルンズドルフ伯 ルーデンドルフ將軍が予に對せられたると同じ調子を以て、予は敢て將軍に答へんとするものでない、然し唯誤解を解いて置き度いと思ふ、予が「ル將軍は毫も平和を欲せられなかつた」と陳述したやうに考へられると間違である、唯ル將軍は予に對して、ウイルソンの仲介による平和を欲せないと云ふことを言明せられたのであると、左様に予は陳述したのである。

ル將軍 予に取りて當時のベルンズドルフ伯は、此の國の國運に何等影響を與ふる能はざる一私人であつたのである。今若し、予にして、激昂して居るならば、必ずや恚う思つたに相違ない、ベルンズドルフ伯は予の名譽を侵害する人であると。

委員長 さうお考へになつては困る、ベルンズドルフ伯は、閣下が戦争を樽俎折衝の間に決せず、捷利により終結させやうとして居られたと言はれた迄である。

ル將軍 予は、予の名譽のため、予の幕僚たりしパウアー大佐、ニコライ中佐、其の他を召喚されんことを乞ふ、彼等は、予が平和に關し如何の見解を以て居たかを陳述するであらう。

委員長 左様な多數の人々の陳述を聴取することは不可能である。

ル將軍 事情は、ベルンズドルフ伯が觀察したとは、全く別なものであつた、吾々は當時平和を熱望して居たと云ふ證左を示した、恰も露國革命が勃發した時、そして、ストツコードに於ける成功が

絶大であつた時に、露國との平和進捗運動を出來得る限り妨げざるやうにとペートマン氏は予に乞うた。是は軍隊に對しては、まことに苛酷なことであつたが、然し、兎に角吾々は賛同した。更に首相は攻勢によりて、露軍を赫怒させぬやうにと吾々に注文した。吾々は首相の政策を擁護するため、又平和を招來せしめんため是れにも同意した。當時露國に對する休戰條件を立案したものは予である。此の休戰條件なるものは、世界の如何なる平和論者と雖も提出し得ざるが如き寛大なるものであつた。以上は、予が平和を念とせし證據である。尙此の上にも、予がベルンストルフ伯と論ぜねばならぬとすれば、迷惑である。兎に角伯が予の言葉を記憶して居て、そして予を偉人の如く取扱はるゝは、予に取り非常な阿諛である。然し、伯が單に如上の言だけを記憶して居られたことは意外千萬である。ベルンストルフ伯 予の大本營に赴きたるは、二月の半であつた、當時確なる筋より、予は恚う云ふことを聞いた、それは米國に於ける平和運動の發展を全く無効たらしめんとする意見が行れて居ると云ふことを。かるが故に、予は獨逸に於ける重立る人物の言明せられた所を充分注意した譯である。

これにて當日の審問は終結した、一兩日後には國民議會が再開せらるゝため兩將軍の審問は未決の儘、當分延期せらるゝことに決した。兎に角、此の日のルーデンドルフ將軍の傍若無人の言語に徴するも、彼れが、戰時中如何に獨りで切つて廻して居たか判る。されば、審問當日の伯林の夕刊新

聞に於ても、保守黨のドイツ新聞以外、一つもルーデンドルフのために同情的筆を用ふるものはなかつた。(大正八年十一月二十日伯林に於て記)

以上は其の頃、著者が「大阪朝日」に通信した通信文である。當時著者は、かうした審問會に毎回列席して、舊ドイツ國の官僚連は悉く知つてゐたが、どうした都合であつたか、ヒンデンブルグ元帥審問の日には入場券を得られないで、正午の休憩後に、ドイツ外務省の新聞班長ボルヒ氏の入場券を得て入場する筈であつた。けれどもその日は非常に疲れたので終に入場しないで了つた。従つて此の記事は、殆ど當時のドイツ新聞の翻譯である。(一九三〇年附記)

南獨逸篇

ミュンヘン革命の犠牲

一

一九一八年秋九月、ブルガリアとオーストリアの戦線における敗戦は、終にキール軍港における水兵の暴動を招くに至つた。これは、ドイツ全土に對する革命の第一の烽火といふべきであつた。これに對して呼應したものはミュンヘンである。

九月六日、革命の怒濤は終にバイエルンの國境に押しよせて來た、大衆がテレジエンの原に殺到した時、其處で數千の大衆は、其の夜の中に革命に着手しやうと言つた。

其の時にクルト・アイスナアは、我が首にかけて四十八時間のうちに、全ミュンヘンの大衆を奮起させやうと誓つたのである。

然るに、意外にも此の約束は數分間のうちに果されることゝなつた。

多くの人々はクルト・アイスナアを半死の老人と思つたかも知れない。併し彼の胸は燃えて居た。バウリア共和国の首相として、獨逸革命の先驅者として、世界に向つて宣言を發したものは、實に彼であつたのである。

胸には烈々の煙を湛へて居た、けれども、彼は處女の如く優しい氣分を有つて居た、煙草の煙の雲と湧くピア・ホールの中で、口角泡を飛ばして勞働運動のために氣を吐くが如き、デモ闘士振りには見られなかつた。彼は隅の方に黙して、怒號するピア・ホールの政論家の議論を聞き流して居た。

それが若い頃のクルト・アイスナアの姿であつた。又或る時吾等は、伯林の皇室歌劇場の、最下等の階級によち昇りながら、ワインガルテナアの指揮の下に演奏されるシンホニー・コンチエルに聞き惚れて居るアイスナアの姿を見たこともある。無産階級の闘士としての牛面に、かうした優しい趣味の持主であつたアイスナアが、其の全集中に、文學趣味に充ちた評論や、書翰文を残したことは決して不思議ではない。

新聞記者としての彼は、可なり犀利な筆鋒を有つてゐた。十九世紀の末年に、ウキルヘルム・リイブクネヒトが、彼を「フォルウエルツ」の編輯者の一人として採用した。其處には彼の署名した文章が時折紙面に現はれた。

彼は伯林の貧しい家庭に育つたから早くより左傾的思想をもつて居たが、それも、最初は單なる民主主義の思想的洗禮を受けたに過ぎなかつた。學校教育と云つた程の教育も受けなかつたが、兎に角哲學の研究に興味を有つて居たので、其の最初の著述としては、フリードリッヒ・ニイチエに關するものが公けにされた。併し其の著述は、彼に名譽も亦金をも齎らさなかつた。

二十五歳になつて、初めて「フランクフルト新聞」に筆を取り、次いでマアルブルヒの「ランデスツアイツング」に筆を取つた。

當時マアルブルヒに反猶太運動が起つたので、彼はこれに反對の筆を揮つた。殊に代議士の候補者ベツケルなる者に對抗して、辛辣な記事を列ねたが、一向に其利目は現れなかつた。

其の後、同じマアルブルヒ新聞に書いた記事により彼は牢獄に投ぜられた。それは皇帝に對して不敬的の文字を列ねたがためであつた。

一八九八年の八月に、彼は再び「フォルウエルツ」社に入社することが出来た。爾來彼は其の全精神を政治運動に打ち込んだ。

税制問題で社會黨が、保守派の提案を妨礙して、黨のアントリツクに八時間も演説を續けさせたことがある。(勿論社會黨は最後には破れたが)當時アイスナアがフォルウエルツの紙上で大に此の問題

で闘つたことは、今尙獨逸の社會黨員は記憶して居る筈だ。

彼は激越な言語を以て、其の思想を述べたことはない。うち見た所は頗る冷靜であるが、内には烈烈の思想を湛へて居た。其の話し振りは如何にもおど／＼して、憶病であるかの様に見えた、何か一言いふにも、彼は若い少女のやうにぼつと顔を赤めるのを常とした。事實、其の當時彼は尙急激な思想家ではなかつた。彼は、ベルンスタインのやうに修正派であつたのだ。

一九〇三年の社會黨の大會に於て、ベエベルは、焰と劍の熱辯を揮つて修正派を痛撃した。其の時アイスナアは最左翼に走つたのである。けれどもフォルウエルツ社が、左翼の驍將であるドイミツヒと其の一派スタットハアゲン、アドルフ・ホツフマン等により指導されることゝなつた時、アイスナアは再び冷靜な人となつた。

職に離れた彼は、其の文を賣つて生活しやうとした。「ユンカアの叛逆」「ウキルヘム・リイブクネヒト」「時代の精神」「未來の國家」等の論文は、何れも彼に生活の資を給する程ではなかつた。數年間、彼は不安な生活を續けた。

一九〇七年に、ニユルンベルグの社會黨の機關紙「フランクツシユ・タアゲスポスト」社が、彼を編輯長として迎へた。古きデュラアの市に於て、彼の名聲は噴々たるものであつたが、當時の彼は殊に咄辯であつたから、單なる記者として以外には、黨のために用ひられる所はなかつた。

ニュルンベルグに三年を過ぎた後、彼は職を辭してミュンヘンに行き、其處で彼は「労働者文藝」を發行した。これは殆ど全部の社會黨の新聞紙に轉載された。間もなく彼は「ミュンヘンアポスト」紙に記者となつた。當時彼は、労働團體の會合に屢々出席してその論議を闘はして居る中に、漸次に辯舌家となることが出来た。

二

大戦が勃發した。

其の頃、彼はノスケの「ケムニツ民聲新聞」の通信員であつたが、其の書く所が次第に猛烈となつて、検閲官より縦横の抹殺を受けるので、終には、劇評に筆を取るより外に、彼は執筆することが出来なくなつた。

彼は戦争の終末を豫想し得た。機會が次第に接近しつゝあるのを知つた。そして一九一八年の二月に獨立社會黨に入黨した。

其の二月一日に、彼は軍器工の大ストライキに参加して、オイゲン・レルシュユ夫人と共に拘禁されて牢獄に投ぜられた。其處に彼は八ヶ月半を過ぎた。

彼は接近しつゝある革命に對して、何等の援助をなし得ず、牢獄の暗黒に坐して唯筆を呵した。

そして「豫言者の夢」なる一卷を作り上げた。

其の年の九月に彼は釋放された。獨立社會黨は、政界より引退したゲオルグ・フォン・フォルマアの補缺として彼を推薦し、彼を候補者として打つて出すことにした。然るに、それより數週後に、キール軍港から、革命の波濤が押し寄せて來た。アイスナアの得意の時が到來した譯である。

伯林は尙靜かであつた。押し寄せる波の遠鳴りもまだ聞えなかつた。然るにミュンヘンに於ては到る所に大集會が催された。九月六日怒濤は終にバヴリアの國境に打ち寄せて來たのである。當時のことについては、アイスナア自身、次の如く言つて居る。

革命の二日前、即ち大衆がテレジアの原に殺到した時、そして數千の人々が、其の夜の中に進行して革命に着手しやうとした時、私は彼等に向つて叫んだ。「私は私の首を暗けて、四十八時間以内に、全ミュンヘンの大衆を奮起させやう」。然るに此の約束は數分間のうちに果された。若し其の日の朝、私が數時間以内に、八百年間君臨して居たウキツテルバッツ家の王權を顛覆して「ベバヴア共和國」成立を布告するであらうと言つたならば、どうであつたらうか——恐らく私は癲狂病院に收容されたであらう。

癲狂院に入院する代りに、彼は、労働者、兵士及び學生の先頭として政廳を目指して進み、あらゆる舊勢力、あらゆる舊制度を顛覆してしまつた。そして後彼は、勞、農、兵會議を開き、十一月八日

の夜、第一の布告を發した。曰く、

×
 バヴリア國の社會主義的戰爭は終結した。労働團體は、吾が革命的プログラムの基礎の上に一致した。バヴリア共和國萬歳！ 平和萬歳！ 總ての労働者萬歳！

×
 アイスマアは、バヴリア共和國最初の總理大臣となつた。茲に一國の舊制度は悉く破壊された。新組織は之に代らねばならなかつた。勞、農、兵會議が總ての基底とならなければならなかつた。當時彼は、伯林中央政府の處置を不愉快に思つた。彼は、戰爭の原因となり又は戰爭を援助した元兇を排斥せんことを要求した、即ち當時要路にあつたシャイデマン、タイツド、ゾルフ等の諸人を斥けんことを要求した。伯林政府は之に對して何等回答する所がなかつた。茲に於て彼は中央の外務省と一切の關係を斷絶すべしと威嚇した。伯林では彼を嘲笑した。——彼は美文を書いた、けれども労働者であつた。談判するとなれば、何時も短刀直入的態度を取る。

その頃世界の無産階級は、アイスマアが如何なる仕事をやるかと眼をみはつて居た、けれども佛蘭西の官僚は初めから彼に對して嘲笑を送つて居た。

×
 アイスマアは困難な試験の前に立たされた。それを如何に切り抜けるか、彼の世界に批判されるべ

き焦點であると思はれた。

ブルジョアと、社會民主黨の壓迫はアイスマアをして憲法制定議會を開設すべく餘儀なくさせた。此の會議の開會と同時に共產黨は彼に對して火蓋を切る準備をして居た。

然るに意外なことが起つた。反動派が直接行動に出でた！

一九一九年二月二十一日、官邸から議會に入らうとする途中に於て、アイスマアは、青年伯爵アルコオ・ヴァレイなるものに短銃にて狙撃された、そして彼は其處に名譽ある死を遂げたのである。

アイスマアの死後三十分を経過して、社會民主黨出身の大佐アウアーが立つてアイスマアのために悼辭を述べて居る時、共產黨員が議會に闖入して、彼を狙撃した。

アイスマアの死後、何が起つたか？、それは、ドイツが初めて見たミュンヘンの赤革命と、それに伴ふ無産階級の悲劇であつた。

三

クルト・アイスマアの死後、ミュンヘンの多數社會黨、獨立黨、労働組合は、合同して中央會議と云ふものを組織して、一時秩序を維持した。そしてアイスマアの葬儀を行ふことになつた。

アイスマアの葬儀後に獨立黨及び社會黨の左翼に屬する人々は、ミュンヘンに純社會黨の政府を樹

立しやうと考へて居たが、之等の人々は共産黨とも可なり接近して居たので、其の態度は相當に過激であつた。

所が、之等の人々が政府を樹立しない前に、アイスナア内閣の閣僚の一人であつたホッフマンは、ミュンヘンから程遠からぬバンベルグに議會を招集し、其の許可を得て内閣を組織した。所がホッフマンが、其の内閣をミュンヘンに於て組織せず、斯やうな地方に設けたことが、抑もミュンヘン市に騷擾を勃發せしむる原因の一つとなつたのである。

政府が中央にないために、政治が充分に行き届かなかつた、其の結果は農民の多數を驅つて共産黨と密接な關係を作らすに至つた。農民は機會を見て何かしら計畫しやうと考へて居た。元來労働者達は、一九一八年末の革命後、政府を労働政府に変更したい希望をもつて居た。一九一九年の二月末か三月初めに開かれる豫定になつて居た憲法制定會議に於て、彼等は憲法に労働制度を採用すると云ふ一項が加へられるものと信じて切つて居た。

然るに今度組織されたホッフマン政府の顔觸れ、即ち多數社會黨を中堅として組織された政府は彼等の満足を表し得ないものであつた。さればホッフマン政府が社會化委員會、中央委員會などと協力して、あらゆる工業の社會化に手を染めんと企て、居たに拘らず、労働者の多くは満腔の不平を懷いて居た。所が政府の方でも、自ら中央首都であるミュンヘンを立ち去つた位であるから、形勢の懸か

ならぬことは固より氣附いて居たので、四月の一日及び二日には、軍人の代表者と、國民軍組織に關する協議會を開き、政府擁護の鞏固なる機關を作らうとした。

四

然るにミュンヘンより遠からぬアウスブルグ市の勞兵會はミュンヘンに其の代表を送り、アウスブルグ勞兵會の決議を齎らした、其の決議は労働政府を組織して貰ひたいと云ふ懇請であつた、當時首相のホッフマンはミュンヘンに滞在して、不在だつたので、政府は其の回答を待たして置いた、然るに勞兵會の方では、それを待遠しく思つたものか、或は豫定の行動であつたかどうか不明であるが、突如としてアウスブルグ市に總同盟罷工を決定して、政府側に勞兵會の意圖の鞏固であること、其の希望の熱烈であることを知らしめた。

アウスブルグの總同盟罷工の翌日、御用黨である所の多數社會黨代表者が、ミュンヘンの獨立黨及び共産黨の代表者と、上記の問題に關して協議を重ねて居る中に、ミュンヘンの兵士會はアウスブルグの労働者に同情を表して、政府と労働者の間に立つて中立を守ることとなつた。

此の間に、多數社會黨の代表者すらも、労働組織の必要を唱へた程に、一般が労働制の必要を感じた。彼等は、労働制を迅速に採用するならば、目前の政治上、經濟上の不満を緩和するに充分である

と想像したらしい。されば四月五日に開催された多數社會黨の地方大會に於てすらも、勞農制實行贊成の決議が行はれると云ふやうな變態的な現象を生じた。

四月六日には、ミュンヘンの各所に於て勞働者の大會が開かれた。そして何れも勞農制採用の決議をした。此の決議をした人々の四分の一が、眞に勞農會議制を理想とした人々で、他の四分の一は、奇を好んで之に雷同附和した人々であり、其の他は種々雑多な人々であつたが、併し一人も之に反對を表する者がなかつたと云ふは奇妙である。

五

所が四月七日の朝、革命中央委員會の名によつて、バヴリア國勞農政府建設の布告がミュンヘン市の到る所に貼り出してあつた。其の布告には彼等の政綱とも云ふべき事項の多くが羅列されてあつたが其の中の唯一項は、最も注意すべき重大な項目であつた。曰く、吾等は露國及び匈牙利共產政府の例に倣つて政治を行ひ、そして之等の國民と直ちに同胞的の同盟を締結したい云々。

然るに純粹の共產主義者は、此の政府を以て獨立黨及び空想的な無政府主義者の陰謀によつて成立したものと認め、此の布告のあつた當日、五千人以上の大集會を開催し、首領のレヴィエンと云ふ人を司會者として、新に共產政府を組織し、直に閣僚の接觸れまで揃へてしまつた。けれども是に對し

て、保守的傾向を代表して居る士官や、學生や、市民の大部分は反對して立つた。

偶々ウルツブルグ市に於て組織されて居た勞農政府が顛覆されたと云ふ報知に接した市民達は、驟然して新勞農政府の顛覆に努力し、四月十二、十三の兩日は、共產黨と一般市民との間に戦闘が開始された。十三日の夜はミュンヘン共產黨の儲々たるものが、ホッフマン政府に與する兵士達により、中央委員會の席上で拘引され、形勢は共產黨に頗る非であつたが、翌日は共產黨が武器庫を奪ひ、中央停車場を占領し、其の夜の中に十一人の委員を有する共產政府を組織した其の首班には、オイゲン・レヴィネが坐つた。此の運動には露西亞の舊い社會主義者でメンシユフキに屬したアキセル・ロードも加はつて活動した。

六

共產黨の新政府は、先づ第一に政府を擁護すべき赤衛軍を組織しやうとした。此の組織は新共產政府をチレンマに陥らしめた、それは勞働者を以て赤衛軍を組織したために、殆ど大部分の工場はこれがためにストライキをされたと同様な状態に陥つたからである。のみならず、政府は、食料の缺乏、石炭の缺乏、パンの缺乏、就中金の缺乏と云ふ大難を控へて居た。新共產政府が、此の經濟上の難局を切り抜けることは、至難のやうに見えた。若し假に伯林の中央政府が共產政府であつたな